

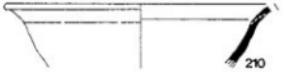
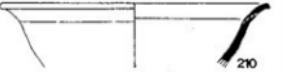
# 上　沢　遺　跡

発掘調査報告書

1995

神戸市教育委員会

『上沢遺跡発掘調査報告書』正誤表

頁	行	誤	正
35	35	92	93
36	1	93	92
48	図 37		
49	31	高杯B	高杯B
53	10	高杯脚部	高杯脚部
55	14	絞り盡	絞り目
56	18	当該期の当該期の	当該期の
60	註 (4)	『長原遺跡発掘調査報告 I』	『長原遺跡発掘調査報告 II』

# 上　沢　遺　跡

発掘調査報告書

1995

神戸市教育委員会

## 序

神戸市では、住みよいまちづくりをめざして住宅や道路網などの住環境の整備をすすめてきました。今回報告いたしました上沢遺跡もこうした道路網の1つである都市計画道路房主寺線築造工事に先立つ調査で発見された遺跡であり、縄紋時代と弥生時代とを結ぶ時期の重要な遺跡であることがわかりました。

さてこの度の阪神・淡路大震災では、神戸市も多大な被害を受けましたが、今回の調査地周辺も例外ではありません。徐々に復興への足どりを歩み始めた現在、私達の先祖の足跡である埋蔵文化財の重要性についても再認識し、新たなまちづくりにむけて取り組んでいかなければなりません。そうした意味においても、今回の報告が広く活用され、なおいっそう埋蔵文化財へのご理解を深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、調査ならびに本書の刊行にご協力いただきました関係各位に深く感謝いたします。

平成7年3月31日  
神戸市教育委員会  
教育長 小野雄示

# 例　　言

- 1 本書は、神戸市長田区六番町1丁目・七番町1丁目に所在する上沢遺跡の発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、都市計画道路房玉守線街路築造工事に伴うもので、神戸市教育委員会および財団法人神戸市スポーツ教育公社が、神戸市都市計画局の委託を受けて、昭和63年度から平成元年度にかけて数回に分けて実施したものである。
- 3 発掘調査の体制は本文（第Ⅰ章第2節）に記した。
- 4 発掘調査の実施にあたっては、神戸市都市計画局の協力を得ました。
- 5 出土遺物の整理については、下記の方々からご指導・ご教示をいただきました。記して感謝致します。  
京嶋 覚・工柴善通・小林義孝・田中清美（敬称略・五十音順）
- 6 本書で用いる遺構実測図の方位は、図4を除きすべて磁北を示している。標高は東京湾中等潮位（T.P.）による。
- 7 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「神戸首部」及び「神戸南部」の一部、神戸市発行の2千5百分の1地形図「夢野」・「神戸駅」・「長田」・「兵庫」の一部を使用した。
- 8 遺構・遺物の実測および遺構の写真撮影は各調査担当者が行い、浄書は口野・山本・阿部が行った。遺物の写真撮影については楠本真紀子氏（楠華堂）に依頼した。
- 9 本書の執筆は各調査担当者が分担して執筆し、日次および必要に応じて本文中に記した。編集は阿部敬生が担当し、口野博史がこれを補佐した。
- 10 自然科学的分析については、次の諸氏に依頼した。なお、各分析結果については、第V章に掲載している。

プラント・オパール分析	古環境研究所
樹種同定	能城修一・鈴木三男
花粉分析	パリノサーヴェイ
- 11 整理作業においては、下記の方々の協力を得ました。記して感謝致します。  
今村直子・大川美知子・大谷喜久子・岡 邦子・西馬久美子・藤原純子

# 本文目次

i. 序	
ii. 例言	
第Ⅰ章　はじめに	1
第1節　発掘調査に至る経緯と経過	(阿部) 1
第2節　調査組織	(阿部) 2
第3節　調査日誌抄	(山本) 3
第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境	5
第1節　遺跡の立地	5
第2節　遺跡周辺の歴史的環境	5
第Ⅲ章　発掘調査の概要(造構)	11
第1節　基本層序	(阿部) 11
第2節　各調査区の概要	12
(1) I区南半	(西岡) 12
(2) I区北半	(口野・富山) 12
(3) II区	(口野・富山・山本) 15
(4) III区	(西岡・斎木・山本) 18
(5) IV区	(阿部) 25
第Ⅳ章　遺物	27
第1節　縄紋時代後期の遺物	(山本) 27
第2節　縄紋時代晩期～弥生時代前期の遺物	(口野) 29
(1) 突帯紋土器の分類	29
(2) I区北半・II区流路1出土の突帯紋土器と弥生土器	29
(3) III区流路2出土の突帯紋土器と弥生土器	36
(4) I区北半・II区流路1出土の石器	39
(5) III区出土の石器	41
第3節　弥生時代後期の遺物	41
(1) 弥生時代後期の土器の分類	(山本・阿部) 41
(2) III区SK01出土の土器	(阿部) 43
(3) その他の弥生時代後期の土器	(阿部) 53
第4節　古墳時代後期以降の遺物	(阿部) 57
(1) 小 器	57
(2) 瓦	59
第Ⅴ章　自然科学的分析	61
第1節　自然科学的分析について	(口野) 61
第2節　神戸市 上沢遺跡におけるプラント・オパール分析	(古環境研究所) 62

第 3 節	神戸市 上沢遺跡出土木材の樹種同定	(能城修一・鈴木三男) 69
第 4 節	神戸市 上沢遺跡における花粉分析	(パリノサーヴェイ) 77
第 VI 章	まとめ	83
第 1 節	弥生土器を共伴する突帯紋土器について	(口野) 83
	(1) 神戸市内の突帯紋土器出土遺跡	83
	(2) 突帯紋土器について	86
	(3) 弥生土器について	87
	(4) 小結	88
第 2 節	弥生時代後期の土器について	(阿部) 88
第 3 節	平安時代後半の土器について	(阿部) 90
第 4 節	むすびにかえて	(口野) 91

## 図 目 次

図 1 調査地点位置図	1	図23 I 区・II 区流路 1 出土土器実測図 (2)	31
図 2 遺跡位置図	5	図24 I 区・II 区流路 1 出土土器実測図 (3)	32
図 3 調査地周辺遺跡分布図	6	図25 I 区・II 区流路 1 出土土器実測図 (4)	32
図 4 基本層序模式概念図	11	図26 I 区・II 区流路 1 出土土器実測図 (5)	33
図 5 I 区北半・南半平面図	13	図27 I 区・II 区流路 1 出土土器実測図 (6)	34
図 6 I 区南北北壁 (上図)・東壁 (下図)		図28 I 区・II 区流路 1 出土土器実測図 (7)	35
断面図	14	図29 III 区流路 2 出土土器実測図 (2)	37
図 7 I 区 SX 02 出土土器実測図	14	図30 III 区流路 2 出土土器実測図 (3)	39
図 8 II 区第 1 遺構面平面図	15	図31 I 区・II 区流路 1 出土石器実測図 (1)	39
図 9 I 区北半・II 区第 2 遺構面平面図	16	図32 I 区・II 区流路 1 出土石器実測図 (2)	40
図10 I 区北半流路 1 断面図	17	図33 I 区・II 区流路 1 出土石器実測図 (3)	40
図11 II 区流路 1 断面図	17	図34 III 区出土石器実測図	41
図12 III 区切り土部分北壁断面図	18	図35 III 区 SK 01 出土土器実測図 (1)	44
図13 III 区舗道部分平面図	19	図36 III 区 SK 01 出土土器実測図 (2)	46
図14 III 区舗道部分東壁断面図	20	図37 III 区 SK 01 出土土器実測図 (3)	48
図15 III 区平面図	21	図38 III 区 SK 01 出土土器実測図 (4)	49
図16 III 区 SK 01 半・断面図	22	図39 III 区 SK 01 出土土器実測図 (5)	50
図17 III 区流路 2 平・断面図	23	図40 III 区 SK 01 出土土器実測図 (6)	52
図18 III 区流路 3 平・断面図	24	図41 IV 区 SD 01 出土土器実測図	54
図19 IV 区第 1 遺構面・第 2 遺構面平面図	25	図42 I 区遺構出土土器実測図	55
図20 IV 区 SD 01 平・断面図	26	図43 I 区南半出土土器実測図	56
図21 III 区流路 2 出土土器実測図 (1)	28	図44 I 区南半 SX 01 出土土器実測図	57
図22 I 区・II 区流路 1 出土土器実測図 (1)	29	図45 III 区切り土部分出土土器実測図	58

図46	I 区北半出土瓦実測図	59	図52	樹種同定試料採取位置図（1）	72
図47	III区出土瓦実測図	60	図53	樹種同定試料採取位置図（2）	73
図48	自然科学的分析試料採取位置平面図	61	図54	花粉分析試料採取位置断面図	79
図49	プラント・オパール分析試料採取位置 断面図	64	図55	花粉分析試料採取位置断面図	80
図50	イネのプラント・オパールの検出状況	65	図56	上沢遺跡周辺突帯紋土器出土遺跡分布図	84
図51	おもな植物の推定生産量と変遷	65	図57	I 区・II区流路1出土瓢形土器復元図	88

## 表 目 次

表1	遺跡番号一覧表	8	表5	プラント・オパール分析結果	64
表2	各調査区遺構対応表	11	表6	上沢遺跡II区出土木材化石一覧表	71
表3	流路1出土突帯紋土器（深鉢）の突帯と 刻み目による分類	30	表7	I 区半花粉分析結果	81
表4	流路2出土突帯紋土器（深鉢）の突帯と 刻み目による分類	36	表8	神戸市内突帯紋土器出土遺跡一覧表	83

## 図 版 目 次

図版1	1. I区南半全景（北から） 2. I区南半SX 01全景（北から）	2. III区第3遺構面全景（南から） 3. IV区流路2全景（南から）
図版2	1. I区北半・II区第1遺構面全景 （南から） 2. I区北半・II区第1遺構面全景 （北から）	1. III区流路3全景（西から） 2. III区流路3中央壁面断面（東から）
図版3	1. I区北半流路1全景（南から） 2. I区北半流路1断面（南から）	1. IV区第1遺構面全景（南から） 2. IV区SD 01西半部全景（東から）
図版4	1. II区流路1流木群検出状況（東から） 2. II区流路1北半部全景（南から）	1. IV区SD 01土器出土状況（北東から） 2. IV区第2遺構面全景（南から）
図版5	1. II区流路1北壁断面（南から） 2. III区第2遺構面全景（南から）	1. III区流路2出土土器（1）・I区北半・ II区流路1出土土器（1）
図版6	1. III区SK 01第1層土器出土状況 （東から） 2. III区SK 01第4層土器出土状況 （東から）	1. I区北半・II区流路1出土土器（2） 2. I区北半・II区流路1出土土器（3）
図版7	1. III区SK 01完掘状況（東から）	1. III区流路2出土土器（2） 2. III区流路2出土土器（3）
		1. I区北半・II区流路1出土土器（4） III区流路2出土土器（4）

図版15 1. I 区北半・II 区流路 1 出土石器・  
III 区流路 2 出土石器

2. III 区 SK 01 下層出土土器 (1)

図版16 1. III 区 SK 01 下層出土土器 (2)・  
同上層出土土器 (1)

図版17 1. III 区 SK 01 上層出土土器 (2)

IV 区 SD 01 出土土器・I 区出土土器

図版18 1. I 区南半 SX 01 出土土器・

III 区切り土部分出土土器

## 挿図写真目次

挿図写真 1 III 区切り土部分調査前風景（北東から）

挿図写真 2 III 区舗道部分掘削作業風景（南から）

挿図写真 3 II 区流路 1 掘削作業風景（南西から）

挿図写真 4 III 区掘削作業風景（南から）

挿図写真 5 現況写真（南から）

挿図写真 6 I 区北半 SX 02 土器出土状況（北から）

挿図写真 7 III 区切り土部分全景（北から）

挿図写真 8 III 区切り土部分北壁（南から）

挿図写真 9 III 区舗道部分全景（南から）

挿図写真 10 III 区第 1 道横面全景（南から）

挿図写真 11 III 区 SX 08 全景（南から）

挿図写真 12 プラント・オバールの顕微鏡写真 (1)

挿図写真 13 プラント・オバールの顕微鏡写真 (2)

挿図写真 14 プラント・オバールの顕微鏡写真 (3)

挿図写真 15 上沢遺跡 II 区出土木材化石の顕微鏡写真 (1)

挿図写真 16 上沢遺跡 II 区出土木材化石の顕微鏡写真 (2)

挿図写真 17 上沢遺跡 II 区出土木材化石の顕微鏡写真 (3)

挿図写真 18 花粉分析試料顕微鏡写真

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯と経過

上沢遺跡の所在する神戸市長田区から兵庫区にかけての地域は、神戸市域の中でも特に遺跡が密集する地域として知られている。しかしその一方で早くから市街地化が進行した地域もあり、近年になって再開発事業などに伴う試掘調査で初めて確認された遺跡も多い。今回報告する上沢遺跡もこうした遺跡の一つである。

今回の調査地の東側を通る都市計画道路房王寺線は、市街地と西・北神の住宅地域を結ぶ主要道路であるが、早くから住宅地として利用されていたことなどから道路幅が狭く、非常に混雑していた。このため、通学生などの歩行者にとっても通行が困難で、地元住民にとっても交通渋滞の緩和が早くから望まれていた。

### 試掘調査

こうした状態を考慮して都市計画道路房王寺線街路築造工事が計画され、神戸市都市計画局より神戸市教育長あて試掘調査依頼書が提出され、この依頼書にもとづき昭和63年9月16日に試掘調査を実施した。調査の結果、弥生時代及び中世の土器を含む遺物包含層が確認され、遺跡の存在することが明かとなった。この試掘結果にもとづき、また伝房王寺跡との関連も考えられることなどから、当該地について発掘調査が必要であるとの回答を行い、神戸市教育委員会文化財課は神戸市都市計画局と協議を重ねる一方、試掘調査の結果を踏まえて周知の遺跡として分布地図に掲載し、今後の周知徹底に図るよう努めた。

### 遺跡の命名

なお、遺跡名の命名については、所在地の行政区画は長田区六番町及び七番町であるが、この一帯が広く上沢通りに面した地域であり、将来的な遺跡の括りについても考慮し、上沢遺跡とした。発掘調査は、諸般の事情により数回にわけて実施することとなった。



図1 調査地点位置図 (S = 1 : 5,000)

## 第2節 調査組織

現地における発掘調査は、平成元年3月13日～平成元年3月28日、平成元年4月17日～平成元年4月21日、平成元年8月21日～平成元年10月24日までを神戸市教育委員会が、平成元年8月1日～平成元年8月31日までを財団法人神戸市スポーツ教育公社が実施した。調査に伴う組織は以下のとおりである。

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会）

昭和63年度

小林 行雄 京都大学名誉教授

檀上 重光 神戸市立博物館副館長

宮本長二郎 奈良国立文化財研究所建造物研究室長

平成元年度

檀上 重光 神戸市立博物館副館長

宮本長二郎 奈良国立文化財研究所建造物研究室長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会

昭和63年度

教育長 緒方 学

社会教育部長 岡村二郎

文化財課長 西川知佑

埋蔵文化財係長 奥田哲通

文化財課主査 中村善則

事務担当学芸員 渡辺伸行・西岡巧次

調査担当学芸員 西岡誠司

財団法人神戸市スポーツ教育公社

平成元年度

教育長 緒方 学

社会教育部長 福尾重信

文化財課長 西川知佑

埋蔵文化財係長 奥田哲通

文化財課主査 中村善則

事務担当学芸員 渡辺伸行

調査担当学芸員 山本雅和・佐伯二郎

斎木 嶽・阿部敬生

平成元年度

理事長 宮園寿雄

監査役 赤坂典昭

総務部長 緒方 学

副理事長 緒方 学

総務部長 福尾重信

総務課長 藤井 浩

静観主一

文化財調査係長 中村善則

（文化財課主査 兼務）

事務担当 鶩尾稔一

調査担当 口野博史・富山直人

### 第3節 調査日誌抄

- 1988年9月16日 試掘調査によって遺物包含層確認  
22日 都市計画局に試掘結果を回答  
以後、調査に係る協議継続

〔Ⅲ区切り土部分〕

- 1989年3月13日 堀削開始  
15日 全景写真撮影、図化作業  
16日 埋め戻し後作業完了



挿図写真1 Ⅲ区切り土部分調査前風景（北東から）

〔Ⅰ区南半〕

- 1989年3月16日 堀削開始  
25日 図化作業  
26日 全景写真撮影  
27日 作業完了



挿図写真2 Ⅰ区舗道部分堀削作業風景（南から）

〔Ⅲ区舗道部分〕

- 1989年4月17日 堀削開始  
18日 遺構検出・堀削  
(大きな遺構の埋土の一部？)  
20日 全景写真撮影、図化作業  
21日 作業完了

〔Ⅰ区北半〕

- 1989年8月1日 堀削開始  
8日 第1遺構面遺構検出・堀削開始  
11日 SX 02 堀削完了・図化作業  
17日 下層に落ち込みを確認  
21日 流路確認、縄紋～弥生土器出土  
28日 全景写真撮影、図化作業  
29日 分析用土壤サンプル採取  
9月1日 埋め戻し後作業完了



挿図写真3 Ⅱ区流路1堀削作業風景（南西から）

〔Ⅱ区〕

- 1989年8月3日 堀削開始  
8日 第1遺構面遺構検出開始  
21日 第1遺構面全景写真撮影  
24日 下層の流路堀削開始  
9月4日 流路の堀削は調査区を半載する方針に変更  
南半の砂礫を集中的に堀削  
11日 南半全景写真撮影、図化作業

12日 北半掘削開始  
 中央東西断面図化作業  
 19日 台風22号接近のため養生作業  
 27日 北半全景写真撮影、図化作業  
 埋め戻し作業完了

〔Ⅲ 区〕

1989年8月21日 挖削開始  
 23日 第1・2遺構面遺構検出開始  
 29日 第1・2遺構面遺構掘削開始  
 図化準備のため割り付け開始  
 9月4日 大雨のため、調査区水没  
 SK 01 挖削開始  
 12日 第1・2遺構面全景写真撮影、図化作業  
 14日 第3遺構面検出開始  
 19日 台風22号接近のため養生作業  
 20日 流路3掘削開始  
 27日 流路2検出、掘削開始  
 28日 流路2上層から繩紋～弥生土器出土  
 10月2日 流路2下層から繩紋後期の土器出土  
 4日 SK 01 挖削完了  
 6日 南半図化作業  
 9日 第3遺構面全景写真撮影、図化作業  
 19日 図化作業等完了

〔Ⅳ 区〕

1989年10月13日 挖削開始  
 17日 遺構検出、掘削開始  
 SD 01 から弥生土器出土  
 19日 第1遺構面全景写真撮影、図化作業  
 21日 第2遺構面掘削完了  
 23日 第2遺構面全景写真撮影、図化作業  
 埋め戻し後作業完了



挿図写真4 Ⅲ区掘削作業風景（南から）



挿図写真5 現況写真（南から）

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 遺跡の立地

上沢遺跡は、六甲山南麓の東西に長くひろがる傾斜面の西部に所在する。六甲山系に源を發する茹藻川が形成した扇状地上左岸に立地する。遺跡は、大阪層群に属する会下山<sup>(1)</sup>と六甲山地に起因する堆積土によって構成されている。

地形は、北から南に向かってやや緩やかに傾斜しており、現況での標高は約15~20mを測る。現在は市街化が進行し、人工的に開削された新湊川によって旧地形はかなり改変を受けている。

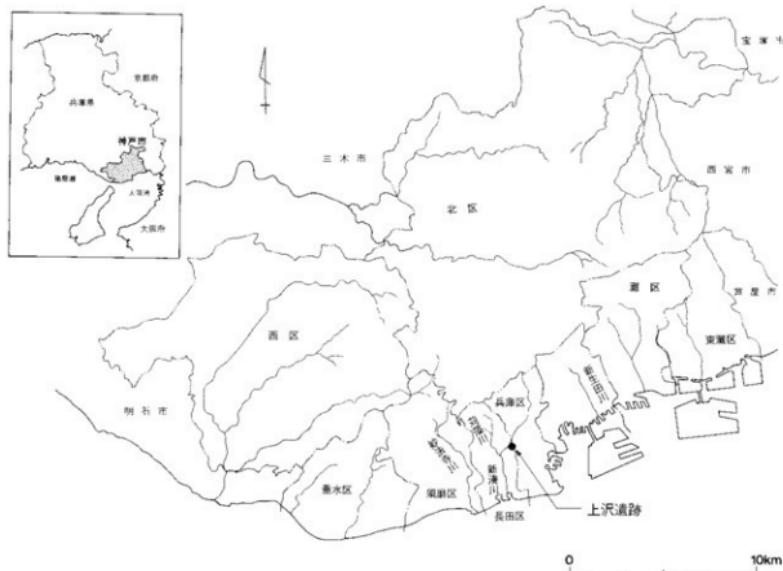


図2 遺跡位置図

### 第2節 遺跡周辺の歴史的環境

以下、上沢遺跡の周辺の遺跡について、時代ごとにみていくこととする。

旧石器・縄文時代 旧石器時代に属する遺跡は、神戸市域では極めて少ない。当遺跡の北西約0.5 kmに、会下山<sup>(1)</sup>遺跡がある。ナイフ形石器が採集されており、この付近に人間の活動があったことを窺い知ることのできる当地域での最初の証拠である。

図 3 調査地周辺道路分布図 ( $S = 1 : 50,000$ )



縄紋時代の様相については不明な点が多かったが、近年になって新たな知見が増えつつある。草創期については依然不明であるが、早期については、発掘調査によるものではないが押型紋土器や石器が採集された境川遺跡がある。また市街地では宇治川南遺跡や雲井遺跡<sup>(32)</sup>で早期の押型紋土器が出土している。両遺跡は以降晩期までの遺物が確認されている。

名倉遺跡<sup>(33)</sup>では中期の土器や石器が採集されている。後期になると官窯式の土器を伴う土坑が楠・荒田町遺跡<sup>(34)</sup>で調査されている。

晩期になると遺跡数が飛躍的に増加する。その大半は晩期後半に属する突帯紋土器の時期のものである。宇治川南遺跡や雲井遺跡、長田神社境内遺跡、五番町遺跡、三番町遺跡、三川口町遺跡、戎町遺跡などである。このうち雲井遺跡では土器棺墓や住居址状の落ち込みなどが確認されている。宇治川南遺跡や五番町遺跡、三番町遺跡、三川口町遺跡、戎町遺跡では河道中より遺物が出土している。また、これら突帯紋土器を出土する遺跡のうち、弥生時代前期の土器を伴出する遺跡は、大開遺跡<sup>(35)</sup>、宇治川南遺跡、雲井遺跡、三川口町遺跡、戎町遺跡であり、近年注目されてきた縄紋時代と弥生時代の接点を考える上で重要な資料が増えつつある。

#### 弥生時代

大開遺跡では、弥生時代前期の環濠が検出されている。弥生時代前期から中期にかけては、その時期によって居住域や墓域などの変遷をみせる楠・荒田町遺跡があげられる。

中期の遺跡としては、壺形土器に40個近い数のゴホウラ製貝輪が容れられていたことで知られる河原遺跡や東山遺跡、熊野遺跡、布引丸山遺跡などがあげられる。しかしながら工事の際の発見や採集例でありその後の調査はなく、遺跡としての実態は不明である。

後期の遺跡としては、松野遺跡、戎町遺跡<sup>(36)</sup>や大型の堅穴住居址が検出された長田神社境内遺跡などがある。

以上楠・荒田町遺跡や戎町遺跡などをみると、弥生時代に六甲山南麓に着実な人々の営為の有り様を窺い知ることができる。

#### 古墳時代

古墳時代の周辺の前期古墳としては、得能山古墳<sup>(37)</sup>、会下山二本松古墳<sup>(38)</sup>、夢野丸山古墳<sup>(39)</sup>があげられ、妙法寺川、苅藻川、湊川とそれぞれ水系ごとに捉えることができそうである。しかしながらそれに対応する集落は不明である。

中期古墳としては、苅藻川河口に、前方後円墳と推定される念仏山古墳があげられる。後期には山裾部に池田古墳群や現在異人館として有名な北野周辺では、中宮黄金塚古墳など数基の古墳がある。その他市街地の中にも列記すべきものもあるが、その多くは、市街化が進むなかで、実態が不明となっているものが殆どである。

古墳時代の窯としては、神戸市内では2例を数えるのみである。その1例が林山窯である。出土遺物から6世紀後半頃操業した窯とみられる。

古墳時代の集落では、前期に属するものは、極めて少ないのが現状である。中期から後期にかけての集落では、鷹取町遺跡<sup>(40)</sup>、松野遺跡<sup>(41)</sup>、神楽遺跡<sup>(42)</sup>、三番町遺跡<sup>(43)</sup>、湊川遺跡<sup>(44)</sup>、生田遺跡<sup>(45)</sup>などがあげられる。松野遺跡では、長方形の区画内に掘立柱建物群と堅穴住居が検出されている。神楽遺跡では、韓式系土器を伴う掘立柱建物が検出されている。三番町遺跡では、大溝内より多量の土師器と小形彷彿鏡が出土している。三番町遺跡を除きこれらは、多少の時期差はあるものの堅穴住居と掘立柱建物が共存する遺跡である。地域としての特

徵であるのか、今後の検討すべき課題であろう。

以上古墳時代の遺跡を概観したが、例えば神楽遺跡のように外來の要素を取り入れた集落や一般的な集落とは隔絶した形態を示す松野遺跡など、それぞれの特徴をもった活動を繰り広げていったことが見て取れる。

奈良時代以降

奈良時代以降の遺跡としては、須磨駅家の可能性が考慮される大田町遺跡や官衙に関連する遺物が出土した神楽遺跡や奈良時代の瓦が出土した室内遺跡が、推定山陽道に接続して存在している。また旧三宮駅構内遺跡では、奈良時代や平安時代後期の遺構、遺物が検出されている。交通の要所にあたる遺跡であることから、同じく山陽道との関わりを検討する材料を提供しているものと考えられる。<sup>(36)</sup>

いわゆる福原京に関連する遺跡として、神戸大学附属病院内の調査で大規模な溝や柱穴群が検出されており、京都系の製作手法をもつ土師器が多量に出土した雪之御所遺跡や同様に多量の土師器や瓦が出土している紙園遺跡などがあげられる。また位置的にも近い宇治川南遺跡でも同様の時期の遺物が出土している。<sup>(37)</sup>

兵庫津遺跡については、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての時期は、調査例は増加しているものの、明確な遺構、遺物は極めて少ない。大輪田泊についても未だ実態は不明である。中世の時期になるといわゆる町家が築かれるようである。

以上述べたように、市街地の再開発の進行に従う発掘調査により、徐々にではあるが様々な成果が得られてきている。

(山野)

表1 遺跡番号一覧表

1 境川遺跡	10 林山窯	19 熊野遺跡	28 雪御所遺跡
2 得能山古墳	11 名倉遺跡	20 河原遺跡	29 紙園遺跡
3 戎町遺跡	12 長田神社境内遺跡	21 夢野丸山古墳	30 宇治川南遺跡
4 大田町遺跡	13 五番町遺跡	22 東山遺跡	31 中宮黄金塚古墳
5 鷹取町遺跡	14 三番町遺跡	23 渕川遺跡	32 旧三宮駅構内遺跡
6 松野遺跡	15 室内遺跡	24 大開遺跡	33 生田遺跡
7 念仏山古墳	16 上沢遺跡	25 三川口町遺跡	34 雲井遺跡
8 神楽遺跡	17 会下山遺跡	26 兵庫津遺跡	35 三本松古墳
9 池田古墳群	18 会下山二本松古墳	27 楠・荒田町遺跡	36 布引丸山遺跡

註

- (1) 薩田和夫・笠間太郎「六甲山地とその周辺の地質」神戸市企画局 1971  
　　薩田和夫・笠間太郎編「神戸市および瀬戸内地域地質図」1976
- (2) 喜谷美宜「おおむかしの神戸」神戸市立考古館 1976
- (3) 石野博信編著『縄文時代の兵庫』1979  
　　貞野 修「明石地域の縄文時代」「神戸古代史』第3巻第1号神戸古代史研究会 1986
- (4) 丹治康明「六甲山南麓における縄文時代の動向—最近の調査成果より一」「神戸の歴史』第13号  
　　神戸市市長秘書室 1985  
　　丹治康明他「宇治川南遺跡」「昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報」1986
- (5) 丹治康明「雲井遺跡第1次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1991  
　　安田 道他「雲井遺跡」「平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報」1994
- (6) 直良信夫「神戸市名倉町出土の縄文土器片」「近畿古代文化叢考」葦牙書房 1943  
　　(2) 嘉谷文献
- (7) 丸山 謙「楠・荒田町遺跡Ⅲ」神戸市教育委員会 1990
- (8) 丹治康明他「宇治川南遺跡」「昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報」1986
- (9) (5) に同じ
- (10) 黒田恭正他「長田神社境内道路発掘調査報告」神戸市教育委員会 1990
- (11) 丸山 謙他「楠・荒田町遺跡」「昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報」1994
- (12) 口野博史他「三番町遺跡」「昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報」1994
- (13) 山本雅和「三川口町遺跡」「昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報」1988
- (14) 山本雅和編「武町遺跡第1次発掘調査概報」神戸市教育委員会 1989  
　　山本雅和「武町遺跡 第3次調査」「昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報」1994  
　　武町遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての時期の住居址などが検出されている。
- (15) 前田佐久編「大岡遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1993
- (16) 浜田耕作「貴輪を容れた素焼壺」「人類学雑誌』第36巻8号 1921
- (17) 小林行雄「神戸市東山遺跡弥生式土器研究」「考古学』第4巻4号 1933
- (18) 小林行雄「神戸市布引丸山の弥生式土器」「考古学』第6巻4号 1935
- (19) 千種 浩「松野遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会 1983
- (20) (14) に同じ
- (21) (10) に同じ
- (22) 梅原末治「神戸市板宿御能山」「兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第一輯兵庫県 1925
- (23) 辰馬淡藏他「会下山二本松古墳及び経塚」「兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第五輯兵庫県 1928  
　　黒田恭正「会下山二本松古墳」「昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報」1988
- (24) 梅原末治「神戸市夢野丸山古墳」「兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第二輯兵庫県 1925
- (25) 嘉谷美宜「市街地に残えた古墳—念佛山古墳—」「神戸市立博物館研究紀要』第6号神戸市立博物館 1988
- (26) 森川 松「長田区般音山古墳の出土遺物」神戸市立博物館だよりNo.23 1988

- (27) 背本宏明「中宮黄金塚古墳」『昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報』1994
- (28) 神戸古代史研究会「兵庫県下の石棺」『神戸古代史』第2巻第1号 1975  
本村栄章「古墳時代の基礎研究概」『東京国立博物館紀要』第16号東京国立博物館 1981
- (29) 鈴沢正弘・渡辺伸行「神戸市市长出区林山窯について」『神戸古代史』第3巻第1号神戸古代史研究会 1986
- (30) 大平 茂他「神戸市鷹取町遺跡」兵庫県教育委員会 1991
- (31) (19) に同じ
- (32) 背本宏明「神楽遺跡発掘調査報告書」1981  
背本宏明「神楽遺跡」『昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報』1986
- 西岡誠司他「神楽遺跡」『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』1987
- (33) 口野博史他「三番町遺跡」『昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報』1994  
「三番町遺跡現地説明会資料」妙見山麓遺跡調査会 1988
- (34) 西岡巧次「湊川遺跡」『昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報』1989
- (35) 丸山 漤「生田遺跡」『昭和62年度 神戸市埋蔵文化財年報』1990
- (36) 口野博史他「大田町遺跡」『平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報』1994
- (37) (22) 貢本文献 1981
- (38) 島田 清「房王寺出土の古瓦に就いて」『神戸史談会会報』1937  
藤澤一夫「摺河泉出土古瓦の研究」『考古学評論』第3輯『仏教考古学論叢』東京考古学会 1941  
高井佛三郎「六甲山南麓の奈良時代遺跡」『伊丹市史』第1巻 1971
- (39) 背本宏明他「旧三宮駅構内遺跡」『平成2年度 神戸市埋蔵文化財年報』1993
- (40) 山出清朝「神大病院内遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度』1987  
岡田章・「神大病院内遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』1988  
多謝敏樹「福原京の遺構の発掘—神戸大学附属病院内遺跡—」兵庫県生活文化大学『平清盛と福原京』講座資料兵庫県教育委員会 1985
- (41) 山本雅和「雪之御所遺跡」『昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報』1989
- (42) 「祇園遺跡現地説明会資料」神戸市教育委員会 1994
- (43) (8) に同じ
- (44) 山本雅和「三川口町遺跡」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』1988  
「ひょうご津」大手前女子学園兵庫津遺跡調査会 1988  
黒田恭正「兵庫津遺跡」『平成2年度 神戸市埋蔵文化財年報』1993

## 第Ⅲ章 発掘調査の概要（遺構）

### 第1節 基本層序

すでに述べたように、発掘調査は數回に分けて実施した。工事区画に従って南よりI区からIV区と呼称する（図4）。総調査面積は、約1,000 m<sup>2</sup>である。

調査地は北から南に緩やかに傾斜しており、現況で標高15~20mである。各区とも調査前には宅地として利用されていたため盛土が厚く、擾乱も大きい。調査区は南北に長いため土層の堆積も一様ではない。前述の擾乱により部分的に弥生時代及び中世の土器を含む遺物包含層が存在しない地区もあったが（I区南半、III区中央部）、概ね盛土の下層に厚さ約20cmの遺物包含層が存在し、その下層で間隔を挟んで2面の遺構面（III区北西部のみ3面）を確認している。このうち、I区・II区では後述するように弥生から中世、近世の遺構が同一面で確認されたが、III区では2面の遺構面として検出した。各調査区の遺構面の対応関係を示すと表1のとおりである。

表2 各調査区遺構面対応表

I区	II区	III区	IV区
第1遺構面	第1遺構面	第1遺構面	第1遺構面
		第2遺構面	
第2遺構面	第2遺構面	第3遺構面	第2遺構面

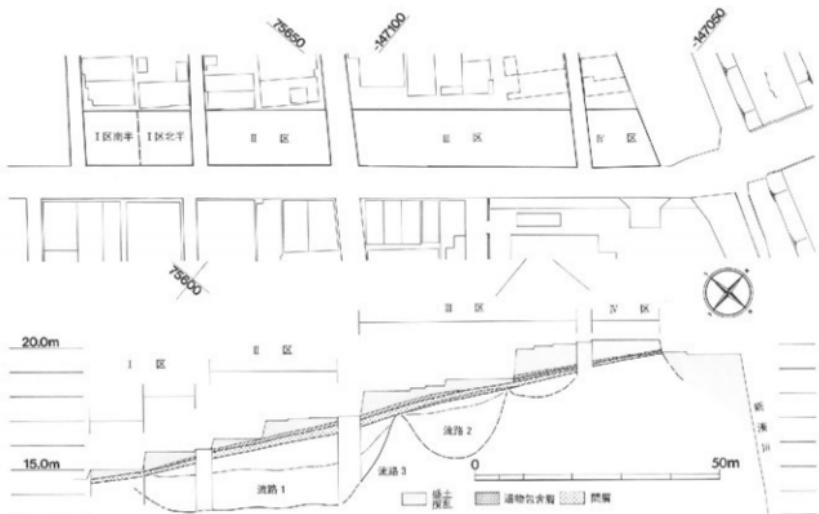


図4 基本層序模式概念図

## 第2節 各調査区の概要

- (1) I区南半 北南北約8.5 m×東西約9.5 mの調査区で、調査対象地区のうち最も南に位置する。現地表下0.5~1.0 mで淡褐色砂質土を基盤層とする遺構面を確認し、土坑3基、落ち込み1ヶ所を検出した。遺構面は全面的に擾乱を受けている。特に調査区北隅付近は著しい削平を受けており、遺物包含層も失われていた(図5)。
- SK 01 調査区の東壁中央で検出した直径0.7 mの円形の土坑で、東半が調査区外に延びている。深さは0.1 mで、埋土は黒褐色砂質土である。弥生時代後期の壺・甕・高坏・鉢などが出土している。
- SX 01 調査区のはば中央で検出した平面形が不整梢円形の落ち込みで、長径3.4 m、短径2.5 m、深さ0.4~0.6 mのものである。擾乱のため、遺構検出面はSK 01・SX 02検出面よりも一段下がっている。埋土は黒褐色砂質土で、5世紀後半の須恵器壺蓋・壺身・高坏のほか土師器甕・製塙土器などが出土している。
- SX 02 調査区の北壁中央で検出した遺構で、北半が調査区外に延びている。当初平面形が梢円形の土坑と考えていたが、I区北半の調査で連続すると考えられる溝状遺構が検出され(I区北半 SX 02)、全体の形状は平面形が二又に分かれる溝状の落ち込みであることが判明した。規模は当調査区内で、幅1.6 m、長さ1.3 m以上、深さ0.6~0.7 mで、埋土は4層に分けられ、下層より暗灰色砂質土、暗茶褐色砂質土、暗灰褐色砂質土、黒褐色砂質土が徐々に堆積していった状況がわかる。6世紀前半の須恵器壺身・甕のほか、土師器高坏・甕・瓶把手、弥生土器などが出土している。  
(西岡)
- (2) I区北半 調査区の北西隅には古墳時代の遺物包含層である暗黒褐色シルト層が存在し、その上層などに中世の遺物を含む灰色シルト層が部分的に残存していた。その他の部分では後世の擾乱・削平を受けており、盛土直下で褐色シルト質細砂~中砂層を基盤層とする第1遺構面を確認した(図5)。
- 第1遺構面 第1遺構面ではピット40基、溝2条を確認した。
- SX 02 調査区南部で検出した遺構で、I区南半のSX 02と同一の遺構である。当調査区内で北側が二又に分かれるが、東側部分は擾乱を受けている。深さは0.1~0.2 mを測る。弥生時代後期の壺・甕・高坏が出土しているが、I区南半の出土遺物から、古墳時代後期(5世紀後半)の遺構と考えられる(図7)。
- 出土土器 SX 02はI区南半とI区北半の両調査区で検出したが、遺物の時期に幅があるため、ここで一括して記述をおこなう。
- 1~8は弥生土器、9~13は土師器、14は須恵器である。
- 1~3は壺で、1は内・外面ともにヨコナデによって仕上げる。特に口縁端部は強いヨコナデによって窪んでいる。口径16.2 cmを測る。2も内・外面ともにヨコナデによって仕上げるもので、口縁端部に凹線が3条巡る。口径15.9 cmを測る。



挿図写真6 I区北半 SX 02土器出土状況(北から)

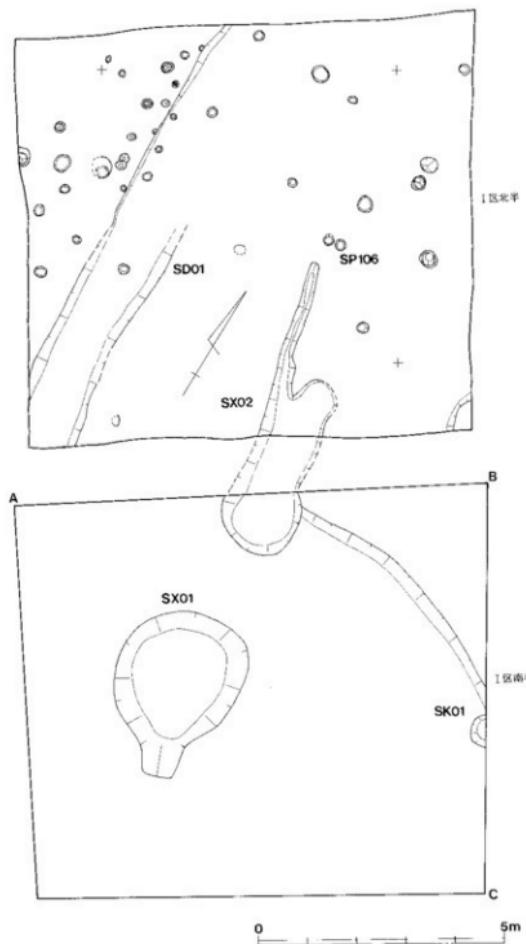


図5 I区北半・南半平面図

3は小型の壺で、内・外面ともに口縁部はヨコナデ、体部はナデで口縁端部外面は面をもち、その直下はヨコナデによって沈線状に窪む。口径 9.4 cm、器高 9.8 cmである。

4～7は甕で、4は体部上部から頸部にかけて3条/cmの右上がりのタタキを施し、その他のはヨコナデ、ナデである。口縁端部内面に平坦面を有する。口径 13.2 cmを測る。5・

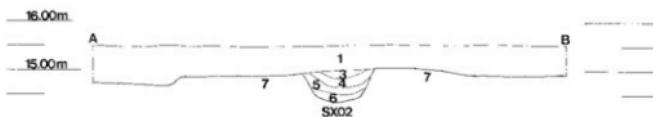


図6 T区南半北壁（上図）・東壁（下図）断面図

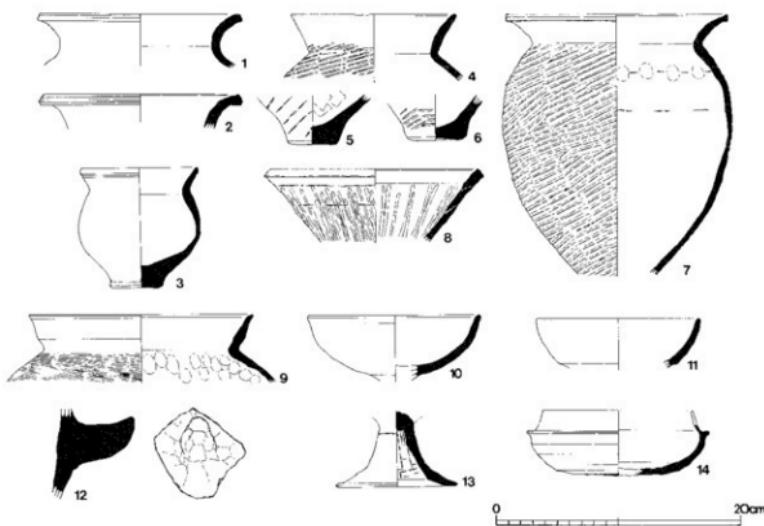


図7 I区 SX 02出土土器実測図

6は底部で体部外面に右上がりのタタキを施す。5の内面は板ナデを施し、底部外面には木葉痕がみられる。

7は体部の外面に2条/cmの右上がりのタタキを施すが、体部中央部でタタキの方向が変化しており、分割成形している。内面は磨滅のため不明瞭であるが、ナデで仕上げ、体部上半には指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデで、端部は凹状をなす。口径 17.6 cm、体部最大径 18.5 cm、残高 21.4 cm を測る。

8は鉢で、内外面ともにナデの後縦方向のヘラミガキを施すが、内面は粗い。口径 16.6 cm を測る。

9は壺で、外面は6条/cmの横・斜め方向のハケ、内面は指頭圧痕がみられる。口縁部

はヨコナデで、端部内面には不明瞭な面を有する。口径18.2cmを測る。

10・11・13は高坏である。

10・11は坏部で、ともにヨコナデで仕上げる。10は口縁端部内面に面をもつ。10は口径13.7cm、坏部高5.4cmで、11は口径13.0cmを測る。

13は脚部で、外面はヨコナデ・ナデで、内面は横方向のヘラケズリを施す。底径9.9cmを測る。

12は瓶の把手で、把手外面には指頭圧痕が明瞭に残る。内面はナデで、下半は下から上へのケズリが施されているようである。

14は坏身で口縁部と底部を欠く。底部の約1/2に回転ヘラケズリを施す。受部端部の成形は鈍い。受部径15.0cm、残高4.2cmを測る。

SD 01 調査区西部を北西～南東方向に流れる溝で、幅1.3m、深さ0.1～0.4mを測る。埋土は灰色シルトで中世の須恵器・土師器が出土している。

ピット 調査区内全体で検出しており、特に北西部でやまとまって検出している。直径0.1～0.4m、深さ0.1～0.4mのものである。ピットからの出土遺物は古墳時代末～平安時代、中世の土器小片で、大半が該期の遺構と考えられ、弥生時代後期のものが数基存在するようである。掘立柱建物としてのまとまりは見出せない。なお、SP 106 埋土中より弥生時代後期の壺底部が出土している。

第2 遺構面 流路を1条検出した(図9)。

流路 1 調査区東側で東側肩部を検出しており、南北方向に流れる。この流路1は北側のII区に延びている。当調査区内での最深部の深さは2.4mを測る。

(3) II 区 I区北半と同様に搅乱・削平を受けているが、遺物包含層は良好に遺存していた。この包含層を除去した段階で褐色シルト質細砂～中砂層を基盤層とする第1遺構面を確認した。

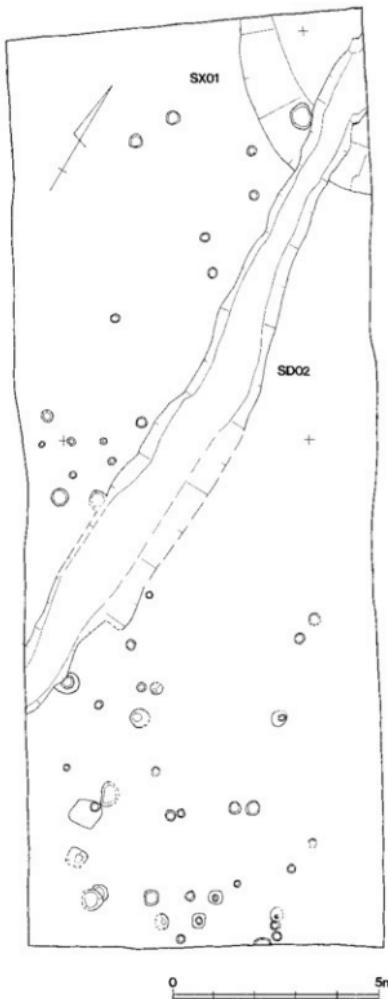


図8 II区第1遺構面平面図

第1遺構面 ピット50基、溝1条、落ち込み1ヶ所などを検出した(図8)。

SX 01 調査区北東隅で検出した浅い落ち込みで、大半が調査区外に延びる。平面形は円形になるとされる。深さは0.41mである。弥生土器が出土している。

SD 02 調査区内を南北方向に流れる溝で、幅1.0~1.8m、深さ0.1~0.4mを測る。埋土は灰色シルトで、須恵器、土師器、陶磁器が出土しており、近世の遺構と考えられる。

ピット 直径0.1~0.4m、深さ0.1~0.4mのものである。出土土器も少量で、I区北半と同様に弥生後期~中世のものが混在しているものであろう。掘立柱建物としてまとまるものはない。

(口野・富山)

第2遺構面 I区北半より続く流路を検出した(図9)。

流路1 II区内では流路の肩部は検出されず、調査区全体が流路内部に含まれているため流路の幅については明確にできない。また、流路の方向についてもI区北半内では北西から南東方向に流れ、I区・II区間でやや東側に方向を変えることは確認できたが、II区内での方向については、肩部を検出していないため不明である。また、平面的には確認できなかったが、II区北端部付近では断面観察から流路1を切る別の流路の存在が考えられ、この流路は堆積土の層位的な関係から、後述するIII区流路3と同一の流路である可能性が考えられる(図11)。当調査区内での最深部の深さは約3.5mである。

流路堆積土の状況は、流路を最終段階に埋没させた青灰色極細砂質シルトが1m前後の厚さで堆積し、さらに下層に約2mを測る灰色砂疊が厚く堆積している。なお流路底面も灰色砂疊で構成されるが、この層からの遺物は確認できなかった。

下層の灰色砂疊層内には、最大長4mを測る自然木の木材化石や種子などの大型植物化石が若干包含されている。また、北西隅の流路中央にあたる暗褐色シルト質細砂層から樹木の根の部分が集中して検出された。

このような堆積状況からみると、この流路は大きな洪水によって運ばれた灰色砂疊によっ

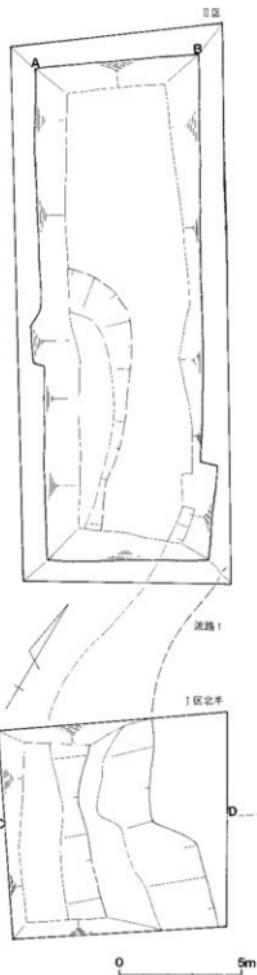


図9 I区北半・II区第2遺構面平面図



図10 I区北半流路1断面図

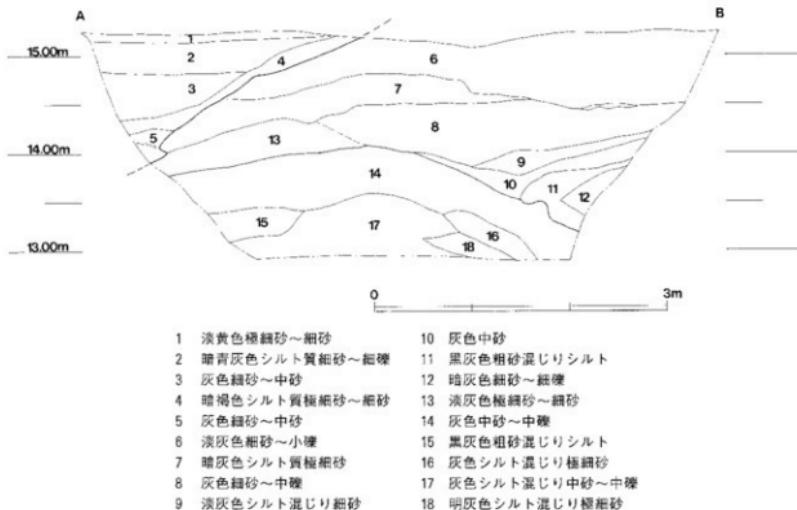


図11 II区流路1断面図

てその大半が埋没した後、徐々に青灰色極細砂質シルトによって埋め尽くされていったものと考えられる。

なお、流路内で検出した木材化石は、樹種同定の結果、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ節、ヤマザクラ、ヤマグワ、マキ属、イヌガヤであった（第V章第3節参照）。この流路埋土から出土した土器の大半は流路上層の青灰色極細砂質シルトからのもので、縄紋土器と弥生土器がある。

縄紋土器は、大半が口縁部や体部に突帯紋をもついわゆる突帯紋土器とよばれるもので、長原式併行期に比定できる。弥生土器は、前期前半のものである。

（口野・山本）

(4) III 区 調査前のIII区は、住居区画による斜面が多く、階段状を呈していた。調査区の土留矢板切り土部分を打つためには、この段差が障害となって、重機の搬入および作業が困難であった。このため、まず北西部の約44m<sup>2</sup>について段差部分を標高約19.10mまで発掘調査を実施し、調査終了後に土留め作業を行い、その後改めて全面調査を実施することとなった。

調査の結果、調査区北西部でわずかに検出された暗褐色砂質土（遺物包含層）から、平安時代～鎌倉時代の須恵器壺・甕・碗、土師器壺・小皿、黒色土器碗などが出土した。この遺物包含層は、後述するIII区9～11区の第1遺構面の遺物包含層に相当するものと考えられる。遺構は検出されなかった。

（西岡）

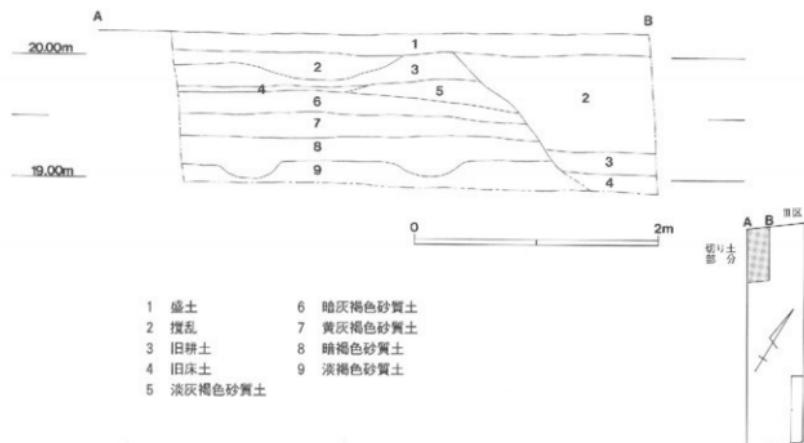


図12 III区切り土部分北壁断面図

挿図写真7  
III区切り土部分  
全景（北から）



挿図写真8  
III区切り土部分  
北壁（南から）



舗道部分 上述したIII区切り土部分と同様、全面調査に先駆けて、市民の安全な歩行を確保するための仮歩道を設置するために調査を実施した調査区で、後述する1～3-E区に相当する。重機により盛土を除去した後、遺物包含層の掘削と遺構検出作業を行った。その結果、他の調査区の第1遺構面に相当する層位では遺構が検出されず、第2遺構面に相当する遺構



挿図写真9  
III区舗道部分全景（南から）

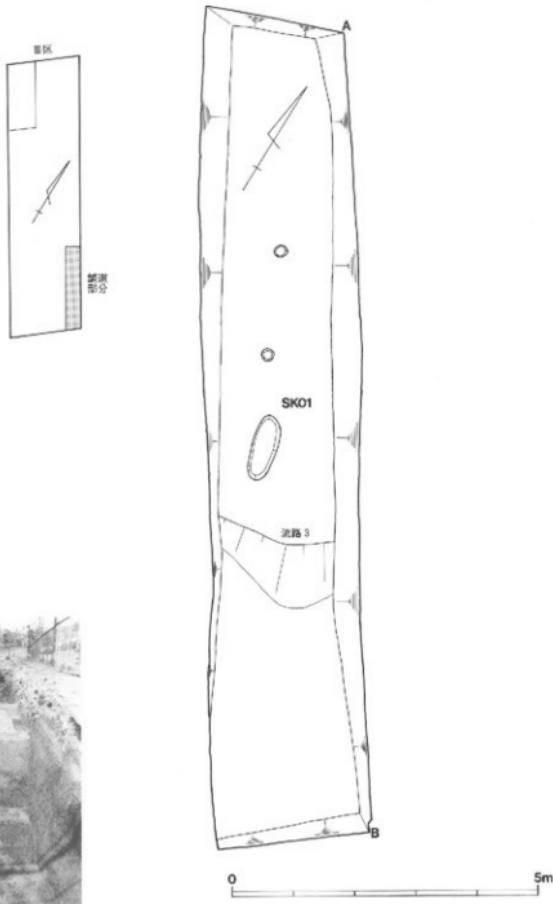


図13 III区舗道部分平面図

面を現地表下約1.7mで確認した。遺構面では土坑1基、ピット2基の他、調査区の南端部において流路の肩部付近を検出した。また、調査区の北端部においてもトレンチ東側の壁面観察により流路の堆積層と思われる砂疊層が確認されたが、擾乱のため平面的には流路の肩部を検出できなかった（図13・14）。

**流路3** 調査区の南端において、遺物包含層を除去した段階で流路の肩を検出した。反対側の肩部は調査区外に延びており、当調査時には流路の方向および規模については不明であった



図14 三区舗道部分東壁断面図

が、全面調査時に全容が明らかとなっている。当調査区内で磨滅した弥生時代前期の甕の口縁部1点と弥生土器片が若干出土している。

SK 01 平面形が橢円形の土坑で、長径1.04m、短径0.37m、深さ0.1mである。埋土中に拳大から人頭大の礫を含む。遺物は出土していないため、時期については不明である。

(東木)

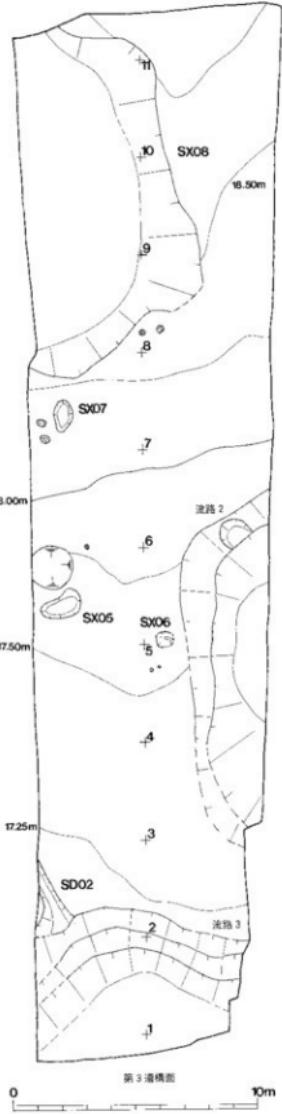
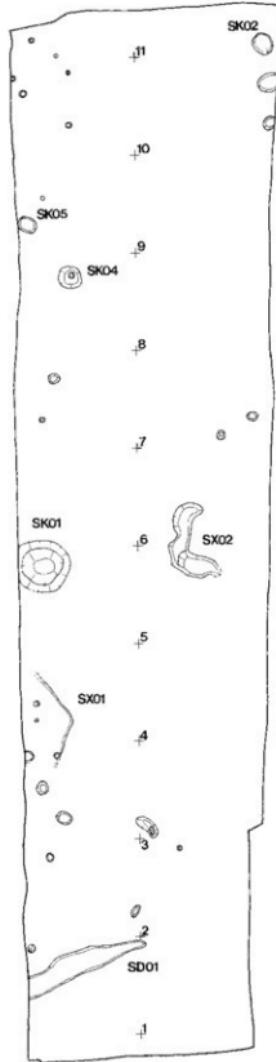
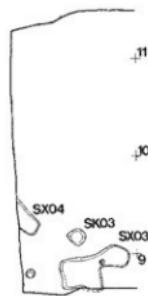


图15 Ⅱ区平面图

全面調査 幅約10m、長さ約43mの調査区で、II区と現道を隔てた山側にあたり、北西から南東への傾斜が著しい。便宜的に南側より4m毎に地区割を設定した。

調査区の全域で遺構面を2面確認したが、一部3面の部分があった。遺構面が3面存在した部分は、前述した切り土部分と重複する9~11-W区で、古墳時代末~平安時代末の遺構面を確認した。この第1遺構面では土坑1基、ビット1基、落ち込み2ヶ所を検出し



挿図写真10 III区第1遺構面全景  
(南から)

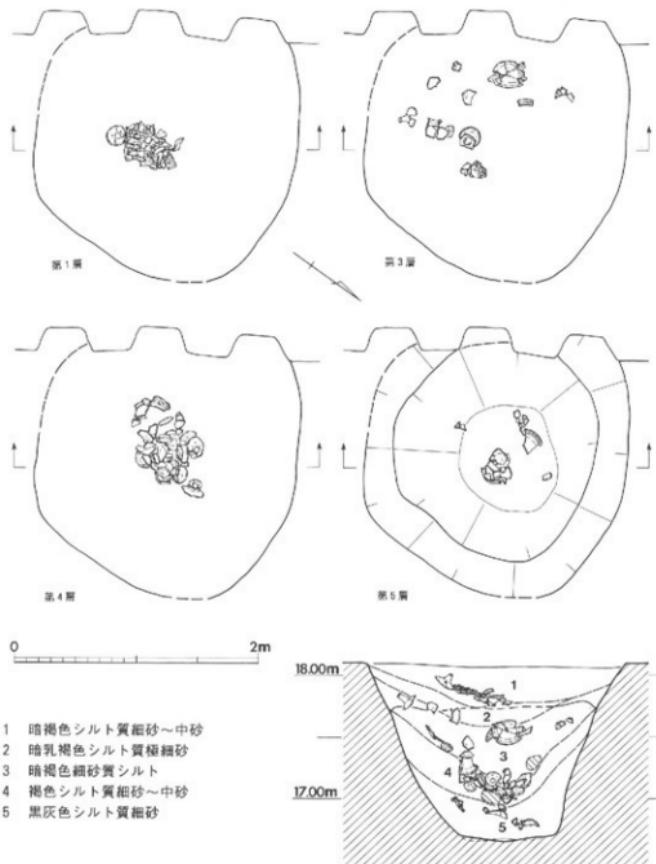


図16 III区SK 01平・断面図

た。他の調査区の第1遺構面に相当する第2遺構面は弥生時代後期と古墳時代後期を中心とする遺構が多く、第3遺構面では縄紋時代後期から弥生時代前期の遺構が確認できた(図15)。

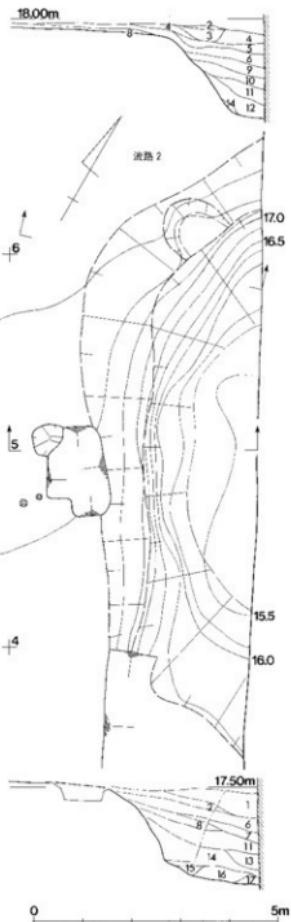
**第2遺構面** 淡褐色の砂礫層上面を基盤層とする遺構面で、土坑5基、ピット20基、溝状遺構1条、不整形の落ち込み2ヶ所などを検出した(図15)。

**SK 01** 5・6-W区で確認した断面形が摺鉢状の土坑で、規模は直径2.2m、深さは1.5mである。埋土は5層に分けられ、第2層を除くそれぞれの層でまとまって弥生土器が確認できた(図16)。

各層毎の状況は、最下層の第5層(黒灰色シルト質細砂)では壺の口縁部が投げ込まれたような状況であり、第4層(褐色シルト質細砂～中砂)でも人頭大の砾とともに壺・甕などがまとまって投げ込まれたような状況で出土した。続く第3層(暗褐色細砂質シルト)は完形品を含み、出土土器量は第4層とともに多い。第2層(暗乳褐色シルト質極細砂)にはほとんど土器は含まれず、第1層(暗褐色シルト～中砂)では、甕・高杯などがかたまって出土した。出土した弥生土器には壺・甕・鉢・高杯などの器種があり、当該期の器種がほぼ揃っている。

**ピット** 第2遺構面で検出したピットは出土遺物が少なく、詳細な時期は明確ではない。上層の遺物包含層の出土遺物と考え合わせると古墳時代のものと思われるが、掘立柱建物としてのまとまりはみられない。

**第3遺構面** 第3遺構面は、第2遺構面を形成した褐色砂礫と乳黄色シルト質極細砂(土壤化)の下層にある黄色シルト質極細砂上面が基盤層となっている。流路2、溝状遺構1条、落ち込み4ヶ所、ピット8基などを確認した(図15)。



1	淡褐色中砂～小砂 黄褐色シルト質細砂～中砂
2	淡褐色シルト質細砂～中砂 黄褐色シルト質じりり細砂～細砂
3	褐色シルト質細砂～中砂 黄褐色シルト質じりり細砂～細砂
4	乳黄色シルト質細砂～中砂 黄褐色シルト質じりり細砂～中砂
5	褐色乳黄色シルト質細砂 黄褐色シルト質細砂～中砂
6	乳黄色シルト質細砂 黄褐色シルト質細砂～中砂
7	孔隙性シルト質細砂 黄褐色シルト質細砂～中砂
8	孔隙性シルト質細砂 黄褐色シルト質細砂～中砂
9	孔隙性シルト質細砂 黄褐色シルト質細砂～中砂
10	暗褐色シルト質細砂 黄褐色シルト質細砂～中砂
11	暗褐色シルト質細砂 黄褐色シルト質細砂～中砂
12	暗褐色シルト質細砂 黄褐色シルト質細砂～中砂
13	淡褐色シルト質細砂 黄褐色シルト質細砂～中砂
14	深褐色シルト質細砂 黄褐色シルト質細砂～中砂
15	深褐色シルト質細砂 黄褐色シルト質細砂～中砂
16	深褐色シルト質細砂 黄褐色シルト質細砂～中砂
17	深褐色シルト質細砂 黄褐色シルト質細砂～中砂

図17 Ⅲ区流路2平・断面図

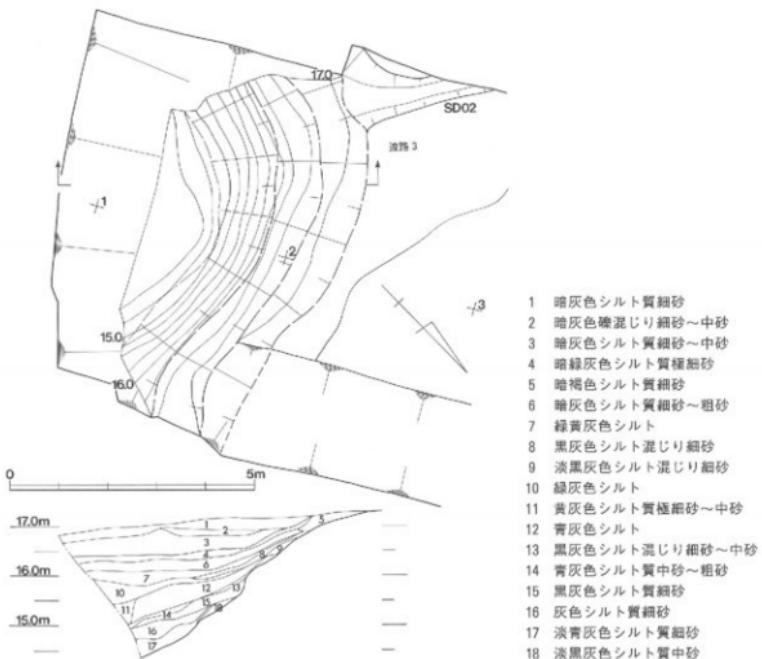


図18 Ⅲ区流路3平・断面図

流路2は3～6-E区で確認した遺構で、この大半は調査区外へ延びている。平面形態では円弧を描いており、その最大幅約3.5m、最深部の深さ約2.5mを測る。埋土は灰色系ないしは褐色系のシルト質細砂を中心としており、徐々に埋没していくものと考えられる。最下層から下層にかけては縄文時代後期の土器、最上層では縄文時代晩期後半～弥生時代前期前半の土器がそれぞれ出土している（図17）。

流路3　流路3は1区で確認した遺構で、II区北西隅で断面観察によって確認された流路と層位などから同一のものである可能性が考えられる。

調査区内での最大幅約6m、最大深さ約2.5mである。出土遺物は弥生土器の小片を肩部で若干検出できたが、縄文時代の土器は出土しておらず、また先述したように層位的にも流路1を切るように流れることがわかるので、流路1よりも新しい時期の流路と考えられる。なお、II区で確認された青灰色極細砂質シルト層は流路中央の窪みにのみ堆積したものと推定できる（図18）。



排図写真11 Ⅲ区 SX 08 全景（南から）

SX 08 7~11区で確認した落ち込み状の遺構で、平面形態は円形に近いが、西半分は調査区外に延びるため判然としない。推定直径約15m、最深部の深さは約1.5mを測る。遺物は全く確認できなかったため、時期や性格については不明である。  
(山本)

(5) IV 区 IV区は、III区の北側に設定した調査区で、III区北端・IV区南端間の距離は、約3.5mである。地形に沿って北から南へわずかに傾斜している。なお、IV区内においても小地区を設定し、遺物の取り上げ等の便宜を図った。

第1遺構面 標高19.4~19.6mで黄色シルト質極細砂層上面を基盤層とする遺構面を確認した。調査区内のはば中央部分が北東から南西方向にかけて大きく擾乱を受けている。溝1条、落ち込み1ヶ所、ピット5基を検出した(図19)。

SD 01 2区で検出した溝で、平面形は円弧状を呈して東西方向に流れる。東・西両側はともに調査区外に延びる。また、調査区中央部の擾乱によって東・西2つに分断されている。

規模は幅0.18~0.38m、深さ0.3~0.45mである。平面形が円弧状をしているため、当初は竪穴住居の周壁溝かとも考えられた。しかし、円弧の径がかなり大きくなること(推定内部直径約24.0m)、住居内部にあたる溝の南側に主柱穴などが検出されなかつたことなどから、その可能性は薄い。

遺物は、西端部と中央擾乱の両側の計3ヶ所でまとまって土器が出土している。いずれも弥生時代後期の土器で、壺、甕、鉢、高杯がある。溝は幅が狭く、流れてきたものとは考え難く、意図的に置かれていた可能性も考えられる(図20)。

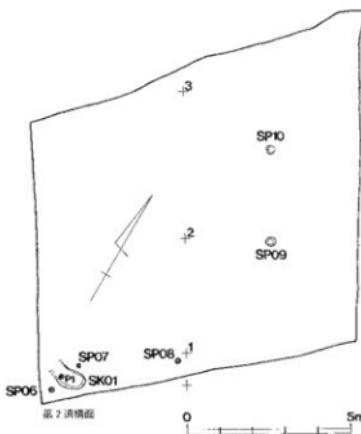
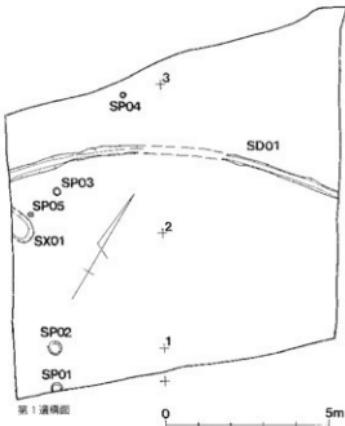
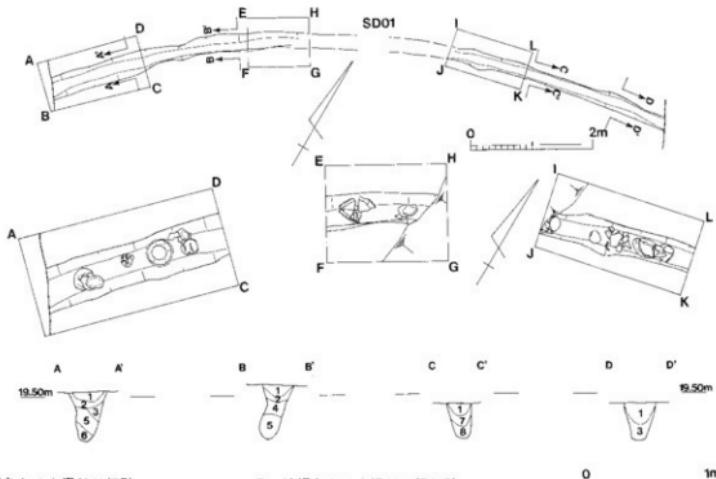


図19 IV区第1遺構面・第2遺構面平面図



- |                    |                |
|--------------------|----------------|
| 1 褐色シルト混じり細砂       | 5 暗褐色シルト混じり極細砂 |
| 2 灰褐色シルト混じり細砂      | 6 喧乳褐色シルト質細砂   |
| 3 暗乳褐色シルト混じり極細砂～細砂 | 7 乳褐色シルト混じり極細砂 |
| 4 暗褐色シルト質極細砂       | 8 淡乳褐色極細砂～細砂   |

図20 IV区 SD 01 平・断面図

SX 01 1・2-W区で検出した落ち込みで、西側は調査区外に延びる。平面形は楕円形で、規模は幅0.7m、深さ0.1mである。埋土は褐色シルト質細砂で、遺物は出土していない。

ピット ピットは計5基検出した。SP 03～05はほぼ同規模で、直径0.15～0.25m、深さ0.1～0.2mで、埋土は黒褐色シルト質細砂である。SP 01・02は他の3基に比べてやや大きめで、埋土も異なる。SP 01は直径0.35m、深さ0.16mで、埋土は黒色シルト質細砂である。SP 02は直径0.42m、深さ0.1mで、埋土は灰褐色シルト質細砂である。

遺物はSP 03・04から弥生土器が若干出土している。いずれも小片であるが、SD 01出土遺物と同時期のものと思われる。遺構の密度は粗く、建物としてまとまるものではない。第2遺構面 標高19.1～19.4mで確認した、黄色シルト質細砂層上面を基盤層とする遺構面である。土坑1基、ピット5基を検出した（図19）。

SK 01 1-W区で検出した平面形が楕円形の土坑で、規模は幅約0.56cm、深さ約0.12cmである。西部は攪乱を受けている。なお、SK 01の内部で径約0.14m、深さ約0.05mのピット1基を検出した。遺物は出土していない。

ピット ピットは計5基検出したが、遺物は全く出土していない。直径0.1～0.3m、深さ0.05～0.3mのほぼ同規模のものであるが、SP 09は他よりやや大きい。埋土は概ね褐色シルト質細砂であるが、SP 10は淡褐色シルト質細砂である。

なお、2区-Wにおいて試掘坑を設定し、第2遺構面より下層の状況を確認した。調査の結果、同遺構面下約15～70cmで乳褐色および暗灰色の砂疊層を検出し、さらに下層には楕円形砂層が同遺構面下約1.5mまで堆積していた。遺構・遺物とともに確認されなかった。

## 第Ⅳ章 遺物

### 第1節 繩紋時代後期の遺物

III区

流路2

15~29は流路2の下半層より出土した縄紋土器で、有紋土器と粗製土器がある。

15はわずかに内湾してたちあがる深鉢の口縁部で、口唇部は丸く仕上げられる。直線的な沈線紋が施され、LRの縄紋帯が巡る。

16は直線的な横位の沈線紋が配され、細かいRLの縄紋が1帯おきに充填される胴部である。

17は2条の沈線にはさまれた直線的なLRの縄紋帯がみられる胴部である。この縄紋帯の上位には曲線的な沈線が1条みられる。

18は椭円形に近い区画紋内にRL縄紋が充填される。

15・16・18は胎土・色調などの特徴から同一個体の深鉢と考えられる。

19・20は沈線の下位に羽状を呈するRL縄紋を施すものである。

21は沈線の下位に不明瞭な平行線紋を加えるものである。

22・23は頸部が横位のヘラミガキ調整によって無紋となる深鉢の胴部で、同一個体と考えられる。胴部の縄紋は最大径より上位まで縦位のRL縄紋が不規則に施され、最上位は横位のRL縄紋が施され、羽状にみえる部分もある。内面は横方向のヘラミガキ調整である。

24は大きく外反する口縁部で、端面にRL縄紋が施され、端部外面には沈線が1条巡らされる。

25・26は頸部から大きく外反して伸びる粗製土器の口縁部で、端部は丸く収められる。

26は口径32.2cm、残存高12.7cmを測り、外面が横方向の巻貝条痕で、内面は幅1.5cm前後の粘土紐接合痕を残すヨコナデ仕上げである。26は口径30.4cm、残存高7.6cmを測り、内・外面ともに巻貝条痕で仕上げられる。

27~29は底径6.5cm前後の底部で、大きなあげ底のもの27と半底のもの29がある。

わずか15点の資料が検出できたにとどまるが、磨消縄紋手法の省略化、頸部の無紋化や沈線が細くなり多状化するような傾向から、神戸市域では比較検討する良好な資料に恵まれないが、流路2から出土した一括の縄紋土器は後期前半に位置づけられる北白川上層式の範疇で捉えられるものと考えられる。

(山本)

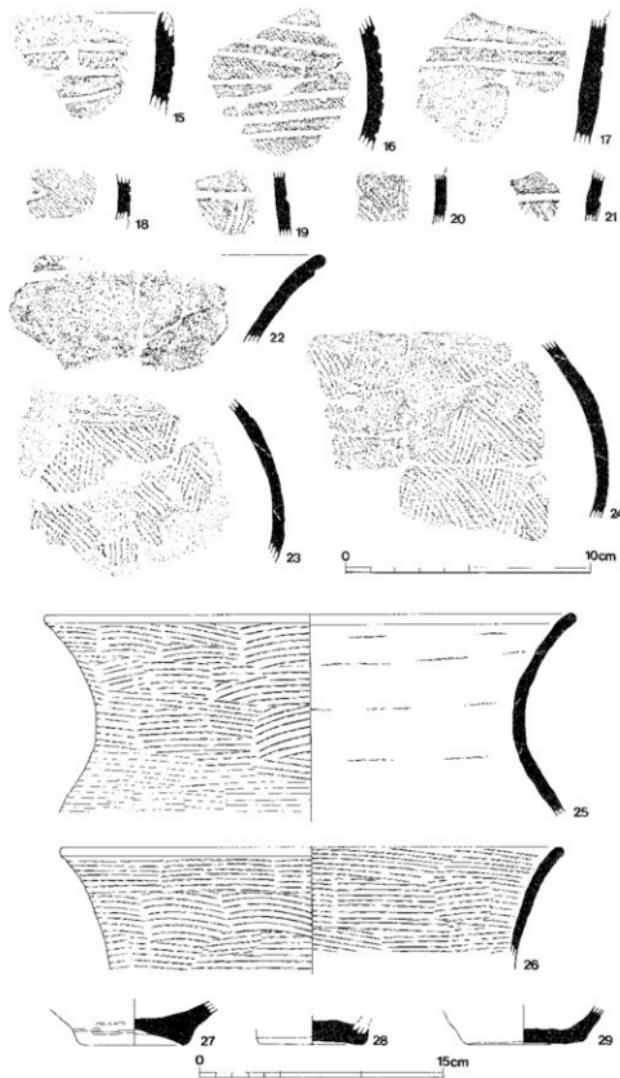


図21 Ⅲ区路2出土土器実測図(1)

## 第2節 繩紋時代晚期～弥生時代前期の遺物

今回の上沢遺跡の調査では、突帯紋土器がⅠ区北半・Ⅱ区の流路1上層およびⅢ区の流路2最上層と肩部周辺にひろがる遺構面直上の褐色砂質土から出土している。さらに、Ⅰ区北半・Ⅱ区の流路1では良好な状態で弥生土器が共伴している。

### (1) 突帯紋土器の分類

突帯紋土器は口縁部ないしは体部に施された突帯の数で、1条の突帯と2条の突帯をするものがそれぞれ知られている。しかし、ここで扱う資料中には全形を窺える資料が少なく、体部の突帯は確認できるものの、口縁部とセットで突帯について確認できる資料はない。したがって、口縁部の破片のみで1条突帯のものか2条突帯のものは判断できない。

まず、突帯の形態から次の3類に分けることができる。

A類：上下をはさんでヨコナデによって突帯を貼り付けるもので、概して上面のナデが強いため、丸みをもった断面三角形ないしはカマボコ形を呈するもの。

B類：突帯の幅が狭く、水平方向に大きく突出するもの。

C類：幅が広く、偏平なもの。

さらに、口縁部に施された突帯紋の位置によって次の5類に分ける。

1類：丸みをもつ口縁端部に上端を沿わせて突帯を施すもの。

2類：丸みをもつ口縁端部より若干下がって突帯を施すもの。

3類：丸みをもつ口縁端部より大きく（突帯の幅以上）下がって突帯を施すもの。

4類：平坦面を有する口縁端部より大きく（突帯の幅以上）下がって突帯を施すもの。

5類：擬口縁に粘土紐を足して、口縁端部と突帯を形成するもの。

以下A1～C5の組み合わせにより、分類を行い記述する。

また、突帯の刻み目の有無によっても分類が可能で、確認できる刻み目にはD字形、小D字形、O字形、小O字形、V字形のものがある。

### (2) Ⅰ区北半・Ⅱ区流路1出土の突帯紋土器と弥生土器

滋賀里式

流路1からは突帯紋土器と弥生土器の他に滋賀里式に属する土器が1点出土している。30は、深鉢片である。内面は黒色でナデを施す。外面は暗乳褐色を呈し口縁部は貝条痕、頸部はナデを施す。口縁端部は、少し後ろをもつ程度の端面である。胎土は、石英、長石、雲母を含み角閃石を僅かに含む。



図22 Ⅰ区・Ⅱ区流路1出土土器実測図(1)

突帯紋土器

深鉢

器種として、深鉢、浅鉢、壺がある。図示した点数は40である。以下深鉢から略記する。

深鉢は、(1)項の分類によって該当する土器は以下のとおりである。また同分類による傾向は表3に示すとおりである。

A 1・B・C 1・C 5類に該当するものはない。A 2類は31~37、A 3類は38~41、A 4類は、42~49、A 5類は50、C 2類は51・52、C 3類は53、C 4類は54・55である。

体部突帯についてはA類は56~59・62~65、B類は該当なく、C類は60・61である。66は底部である。

表3に現れない全般的な内容についてのべると、図示した36個体のうち17個について、外面に煤が付着している。また色調としては、32・46を除き淡茶褐色系である。次に32・43・49・60などに代表されるように、胎土に石英、長石、雲母が含まれ、石英、長石については比較的大きな砂粒のまま土器が製作されている。<sup>(3)</sup>65は、生駒西麓の胎土をもつ個体である。以下主だった土器について記す。

32(A 2類)は、内外面ともに丁寧にヨコナデを施し、口縁端部にもやや稜ができるような作りである。刻み目も明瞭である。上述したが、色調は淡乳褐色を呈し、白いと言う印象を受けるものである。胎土に石英、長石、クサリ穂を含む。

A 3類は、全体に残存状態が悪い。38は、赤褐色を呈し、雲母を含み、石英、長石の粒が大きい。

表3 流路1出土突帯紋土器(深鉢)の突帯と刻み目による分類

型	刻み目					合計
	D字形	小D字形	O字形	小O字形	V字形	
口	1					
	2	1	1		1	3
	A 3		1	1		2
	4		2	1	1	2
	5	1				1
縁部	1					
	2					
	B 3					
	4					
	5					
突帯	1					
	2			1	1	2
	C 3		1			1
	4			1		1
	5					2
小計	2	5	5	2	3	25
	A	1	1		2	4①
	B					
	C	1	1			2
	小計	2	2		2	4
合計		4	7	5	2	12
					5	35

①：固体数の内1個体が生駒西麓の胎土であることを示す。

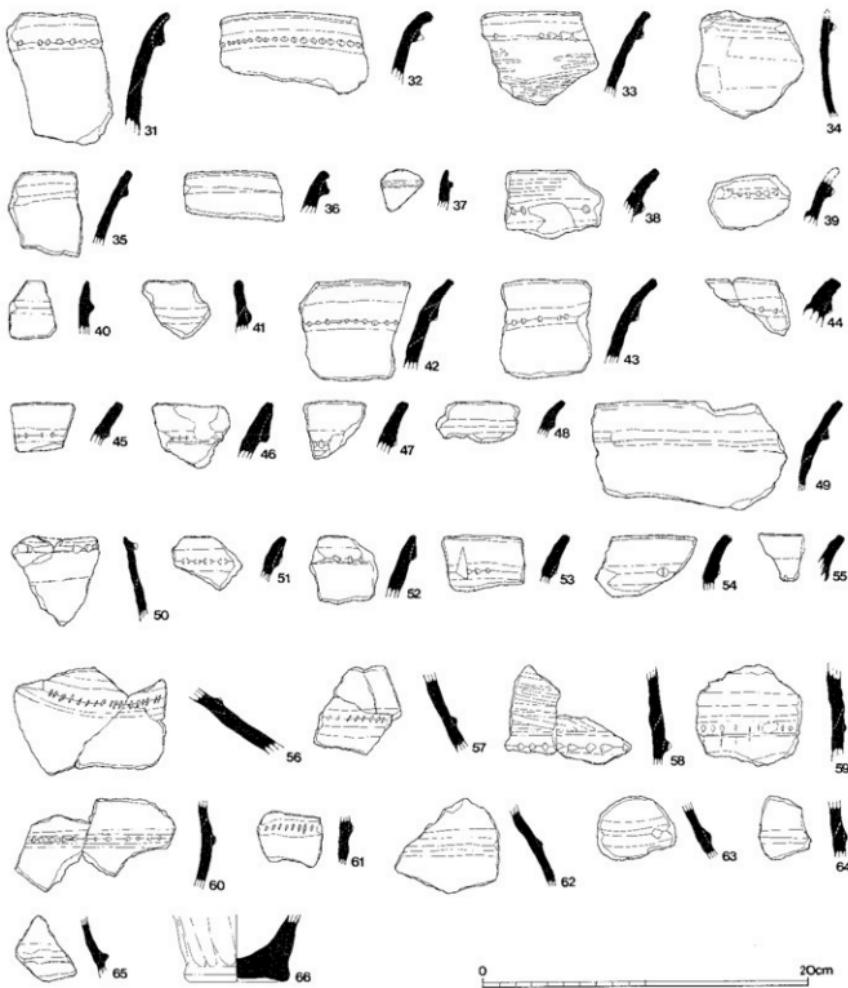


图23 I区・II区流路1出土土器实测图(2)

49（A 4類）は、内外面ともに丁寧にヨコナデを施す。外面には煤が付着し、色調は淡茶褐色である。胎土に石英、長石、雲母を含む。刻み目はない。

50（A 5類）は、内面はヨコナデを施し、突帯の上下はナデを施し、この下には指頭圧痕が残る。口縁部の接合方法については、他の深鉢の口縁と異なり、粘土を覆い被せて、それをそのまま押さえ口縁としている。69のような壺とすべきか、異なる製作技法であろうか。外面には煤が付着し、色調は淡茶褐色である。刻み目はD字形である。

59・60などに見られるように、D字形、O字形、小O字形、線状などの刻み目が観察されるものがある。残存部分によるものであろうか。

66は、深鉢か壺か不明の底部である。色調は、

淡赤褐色で、胎土に石英、長石を含む。

浅鉢

67は、調査の中で唯一確認できた浅鉢である。<sup>(4)</sup>

口縁内面はナデ、その他はミガキを施す。色調は、外面淡乳褐色、内面淡黒褐色を呈す。胎土には砂粒を殆ど含まない。口縁部と体部界にそれぞれ沈線を一条施し、体部界の沈線は口縁部のものに比べて鈍い。焼成も鈍いものである。

口縁部と底部は、接合せず図上で復元した。口径 22.6 cm、高さ 15.7 cm を測る。

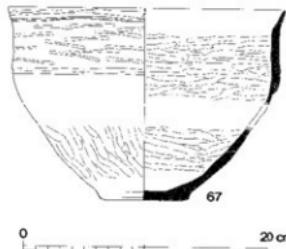


図24 I区・II区流路1出土土器実測図(3)

壺

69の口縁部の突帯は、(1)項の分類によるC 1類に属し、刻み目は小O字形である。口頭部は内外面ともナデを施す。色調は、赤みがかった茶褐色で、胎土に石英、長石、雲母、角閃石を含む。生駒西麓の胎土をもち河内からの搬入品と考えられる。

68は、外面にススが僅かに付着する。口縁部の突帯に刻みはなく、丁寧にナデを施し、しっかりととした作りである（A 1類）。外面頭部は左上がりのナデがみられる。色調は茶褐色で、角閃石を多く含み河内からの搬入品と考えられる。

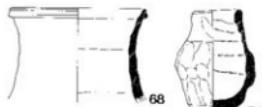


図25 I区・II区流路1出土土器実測図(4)

弥生土器

壺

流路1出土の弥生土器には、壺・甕・鉢がある。

71は口頭部界に横方向のヘラミガキによって段をつくり出す。口縁部はヨコナデ、頭部外面はナデである。体部内面は表面剥離のため不明瞭であるが、ナデと思われる。色調は淡乳褐色で、胎土に石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。口径 15.2 cm を測る。

72は口頭部界に段をもち、段以下に縱方向のヘラミガキを施す。頭部と体部の境にも段をもつ。口縁部は横方向のヘラミガキを含むヨコナデである。色調は淡乳褐色で、胎土に石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。色調、胎土は71と類似する。口径 14.8 cm を測る。

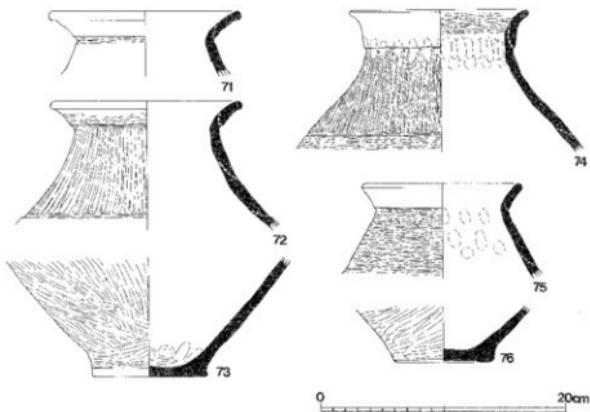


図26 1区・II区走路1出土土器実測図(5)

73は壺底部で、外面は体部下半は斜め方向のヘラミガキ、底部は横方向のヘラミガキナデである。底部内面には指頭圧痕が残る。底径9.5cmを測る。

74は口頭部界に段をもち、段以下に縱方向のヘラミガキを密に施す。段部の内外面には指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデで、内面には横方向のヘラミガキを施す。頭部と体部の境にも段をもち、体部外面は横方向のヘラミガキを施す。体部内面はナデである。色調は乳褐色で、胎土に石英、長石、雲母、チャートを含む。口径14.3cmを測る。

75は頭部外面に横方向のヘラミガキを施す。口頭部界の段は不明瞭である。口縁部はヨコナデで、頭部内面はナデで、指頭圧痕が残る。色調は乳褐色で、胎土に石英、長石、チャートを含む。口径12.5cmを測る。

76は壺底部で、外面は不明瞭だが斜め方向のヘラミガキを施すものと思われる。内面はナデである。底径8.3cmを測る。

77~90は壺頭部・体部片である。

77は、頭体部界に明瞭な段をもち、2条の沈線の下に斜格子を施し、さらに3条の沈線を施す。胎土に石英、長石、雲母、角閃石、クサリ礫を含む。

78は、頭体部界に段をもつものであるが、外面が剥離しており調整、紋様については、不明である。79は2条の沈線をもつ。80は、肩部に幅6mmの削り出し突帯をもつ大型の壺体部と思われる。突帯の上下はミガキを施す。81は、沈線を3条施す。

82は、内面はヨコナデで指頭圧痕が残り、内面に煤が付着している。外面は横方向に丁寧なミガキを施し、肩部に幅5mmの削り出し突帯をもつ。

83は3条、84は1条とやや離れて下に1条、87は2条とやや離れて1条の沈線をもつ体部片である。

85は、4条の沈線の下に3条の重弧紋を描く。胎土に石英、長石、角閃石、クサリ礫を含む。残存状態は良くない。

86は、肩部に3条の削り出し突帯をもつ。内面はナデ、外面は横方向のヘラミガキを施



图27 I区・II区流路1出土土器实测图(6)

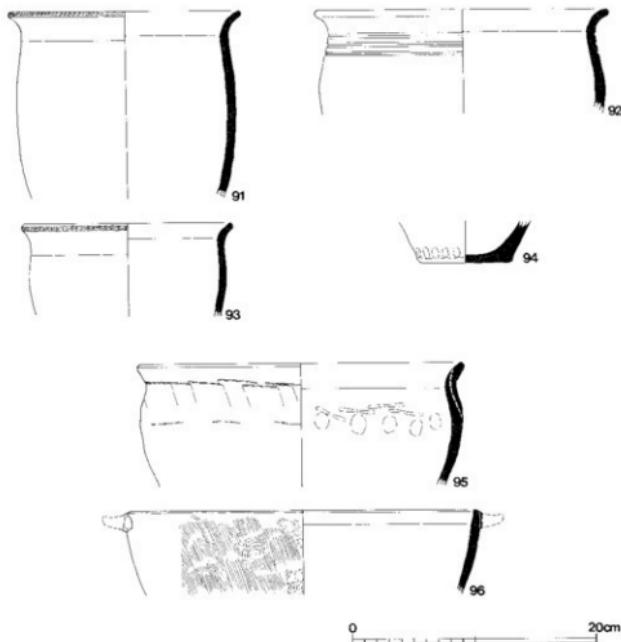


図28 I区・II区流路1出土土器実測図(7)

す。

88は、4条の沈線と1条の沈線及びそれを繋ぐ縦方向の沈線によって区画された方形の四隅に7~9条の斜め方向の沈線を描いている。4条の沈線の上の区画は、縦方向の沈線によって半区画分すらして同様の紋様を描く。内面はミガキ、外面は丁寧なナデを施し、丁寧な作りの体部片である。

89は、唯一の貼り付け突帯をもつものである。突帯の上部は残存状態が悪く調整は不明下部は横方向のヘラミガキを施す。突帯の刻み目はO字形である。内面はヨコナデを施す。

90は7条の沈線を斜め方向に施す。

91~93は甕、94は甕底部である。

91は口縁部が如意状に外反し、端部に浅い刻み目を施す。体部はほとんど影らまず、体部最大径は中位にあるが口径を下回る。口縁部はヨコナデ、体部は外面はナデ、内面は左上がりのナデである。口径20.4cmを測る。

92は口縁部が如意状に外反し、端部に浅く小さな刻み目を施す。体部最大径は上位にあるが、91と同様あまり張るものではなく、口径を凌ぐものではない。砲弾状にすぼまって底部にいたるものと思われる。口縁部はヨコナデ、体部の内面はナデであるが、外面は磨滅のため不明である。口径17.3cmを測る。

93は口縁部が如意状に外反し、口頭部界にヘラ描き沈線を3条巡らせる。体部最大径は口径を凌ぎ、上位にある。磨滅顯著で調整については不明である。口径23.6cmを測る。

94は内・外面ともにナデで、外面に指頭圧痕が残る。底径7.0cmを測る。

95・96は鉢で、95は口縁部が如意状をなす。口縁部はヨコナデで、口頭部界は板ナデを施すが、段は意識していない。体部外面は剥離しており調整不明である。体部内面は横向向のヘラミガキと指頭圧痕がみられる。口径26.2cmを測る。96は2方向に把手の付く直口の鉢であるが、把手は基部以外は欠損している。体部外面に5~6条/cmのハケを縱方に施す。内面はナデである。口径28.9cmを測る。

### (3) III区流路2出土の突帯紋土器と弥生土器

III区では、前述したように流路2最上層とその肩部周辺にひろがる遺構面直上の褐色砂質土(遺物包含層)から突帯紋土器と弥生土器が出土している。流路2最上層のものは、遺物包含層が流れ込んだ状態であるため、両者とも同一層に当たるものと考えておらず、一括して記述する。

突帯紋土器 まず、突帯紋土器はいざれも深鉢で浅鉢・壺は確認できていない。数量的な傾向は表4のとおりである。

表4 流路2出土突帯紋土器(深鉢)の突帯と刻み目による分類

型	刻み目						合計
	D字形	小D字形	O字形	小O字形	V字形	無刻み	
口	1					1	1
	2		3①		1		7
	A 3		1		2	1	10
	4	2			1	1	7
	5						
縁部	1						
	2		1			1	2
	B 3						
	4						
	5						
突帶	1	2				1	3
	2				2	2	4
	C 3						
	4						
	5						
小計		2	6	1	6	2	34
体部	A		3	1		1	4
	B						
	C	1				1	5
小計		1	3			2	7
合計		3	9	2	6	4	48

①: 固体数の内1個体が生駒西麓の胎土であることを示す。

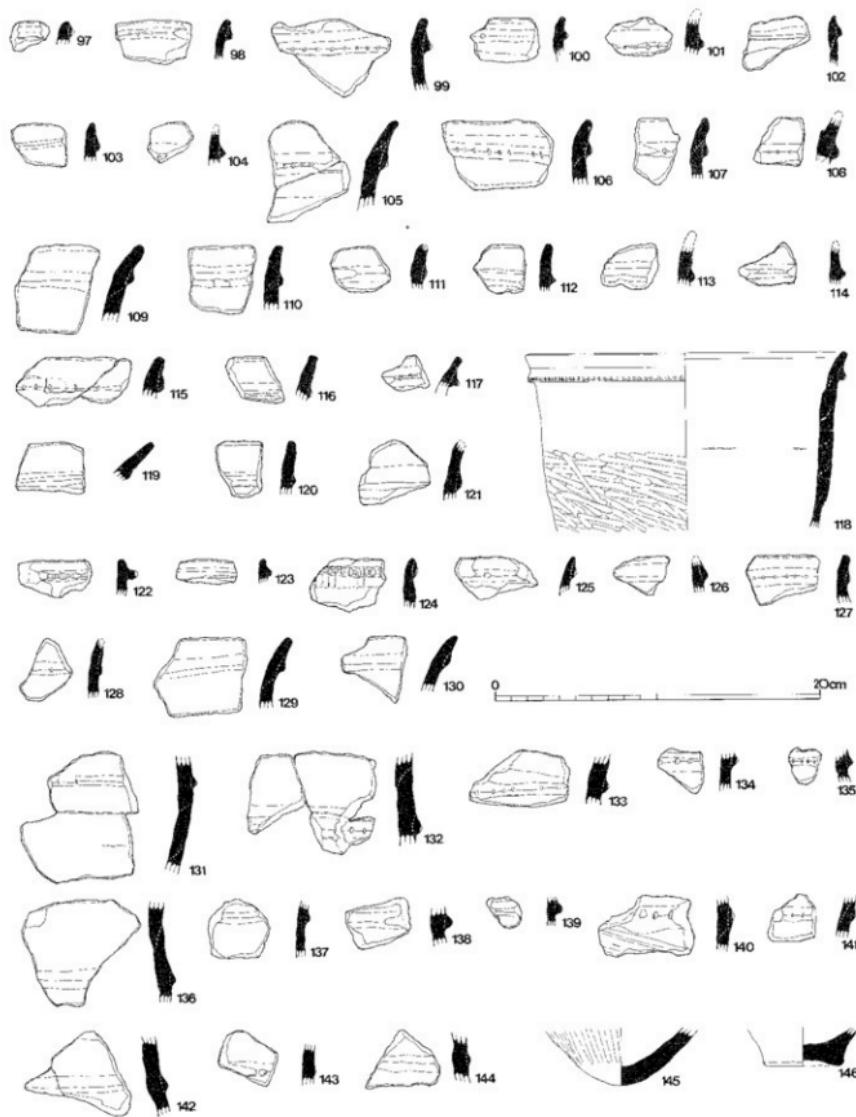


图29 III区流路2出土土器实测图(2)

深鉢は、(1)項の分類によって該当する土器は以下のとおりである。A 5・B 1・B 3～B 4・C 3～C 5類に該当するものはない。A 1類は97、A 2類は98～104、A 3類は105～114、A 4類は115～121、B 2類は122・123、C 1類は124～126、C 2類は127～130である。

体部突帯については、Aは131～139、Bは該当なく、Cは140～144である。145・146は底部である。

表4に現れない全般的な内容についてのべると、まず残存状態は、I 区北半・II 区流路1出土のものに比べ悪い。外面に煤が僅かに付着しているものは118のみであり、残存状態によるものであろうと思われる。次に色調は、赤褐色系を呈す。胎土は、石英、長石、雲母が目立ち、角閃石、クサリ礫を僅かに含むものもある。98・104は生駒西麓の胎土をもつ個体である。

A 1類に分類されるものは97のみである。色調は赤褐色で、胎土に石英、長石を含む。

99(A 2類)は色調は赤褐色で、胎土に石英、長石、雲母を含む。突帯上部のナデが強く突帯下端が蛇行する。刻み目は、小D字形である。内面に初の圧痕と思われるものが観察される。

105(A 3類)は、内外面ともヨコナデを施す。色調は外面淡茶褐色、内面淡赤褐色である。胎土は、石英、長石、雲母を含む。刻み目は、小D字形である。

118は、唯一口径の復元ができるもので、口径19.1cm、残存高10.9cmを測る。突帯の分類では、A 4類に分類できるもので、刻み目は小O字形で、明らかに1条突帯のものである。口縁部はヨコナデによって仕上げられ、体部外面下半は横方向のヘラミガキで仕上げられる。

122は、B 2類に分類されるもので、他に同一個体と思われるものが1点ある。色調は淡赤褐色で、胎土に石英、長石のはかクサリ礫が目立つ。刻み目は小O字形である。

124(C 1類)の色調は、暗黄褐色で、胎土に石英、長石が含まれ、ほかにチャートが目立つ。突帯下部のヨコナデが強く、凹んだように観察される。また刻み目施紋の際に突帯下部にヘラによる平行線が残る。刻み目は小D字形である。

127(C 2類)は、残存状態が悪いが、突帯と口縁部に刻み目が確認できた。突帯の刻み目は小O字形が半うじて観察されたが、口縁部の刻み目は不明である。色調は外面淡灰褐色、内面淡赤褐色である。胎土に、石英、長石、雲母を含む。

131(A類)は色調赤褐色、胎土に、石英、長石、雲母を含む。刻み目は小O字形であろうか、残存状態が悪く不明である。

140(C類)は色調淡乳褐色、胎土に、石英、長石、クサリ礫を含む。刻み目はD字形である。

145は丸底の底部で、外面は縱方向のヘラミガキであろうか、縱方向に条痕が観察される。内面はナデで仕上げられる。色調は赤褐色、胎土に、石英、長石、雲母を含み、僅かにクサリ礫を含む。

弥生土器 147は壺口縁部で内・外面ともに磨滅顯著で調整は不明である。口径18.4cmを測る。

148・149は壺底部で、148は外面はナデによって仕上げるがハケ状の条痕が不明瞭なが

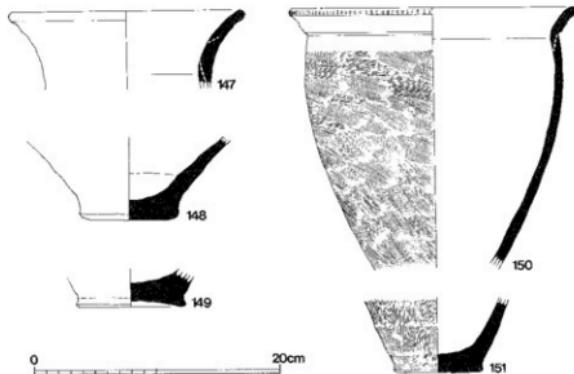


図30 III区流路2出土土器実測図(3)

らみられる。内面はナデ及び指オサエである。底径8.2cmを測る。149は内・外ともにナデで底面外面には平行に走る条痕がみられる。

150は口縁部が如意状をなす壺で、口頭部界に明瞭な段を有する。口縁端部には細かい刻み目を施す。体部外面には10条/cmの斜め方向から水平方向のハケを施す。口縁部はヨコナデ、体部内面はナデである。口径23.5cmを測る。

151は壺底部で、外面に10条/cmの縱方向のハケを施す。内面はナデで、煤が付着している。底面はナデである。底径7.4cmを測る。

#### (4) I区北半・II区流路1出土の石器

152は石鎌で、幅1.4cm、長さ1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.4gを測る。比重は2.50で、石材はサヌカイトである。153は楔形石器で、幅4.6cm、長さ6.8cm、厚さ1.05cm、重さ46.5gを測る。比重は2.56である。石材はサヌカイトである。表面は磨耗している。

154は凹石で、径12.0cm、厚さ6.1cm、重さ1,313.7gを測る。比重は2.91である。側面については、研磨痕がみとめられる。

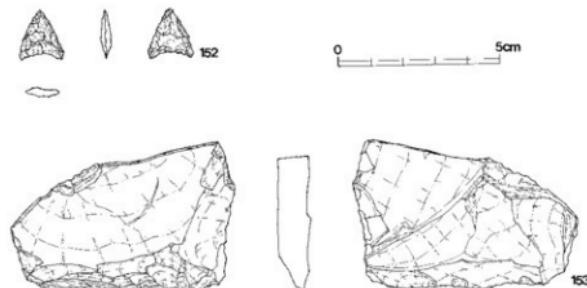


図31 I区・II区流路1出土石器実測図(1)

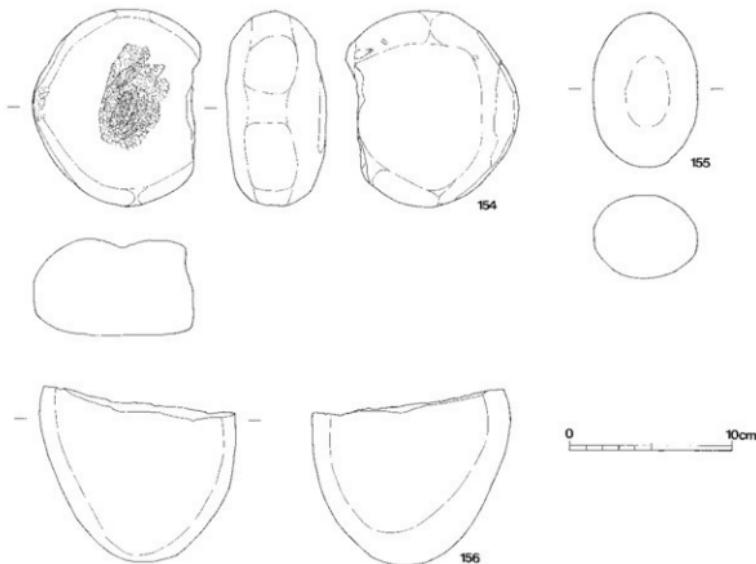


図32 I区・II区道路1出土石器実測図(2)

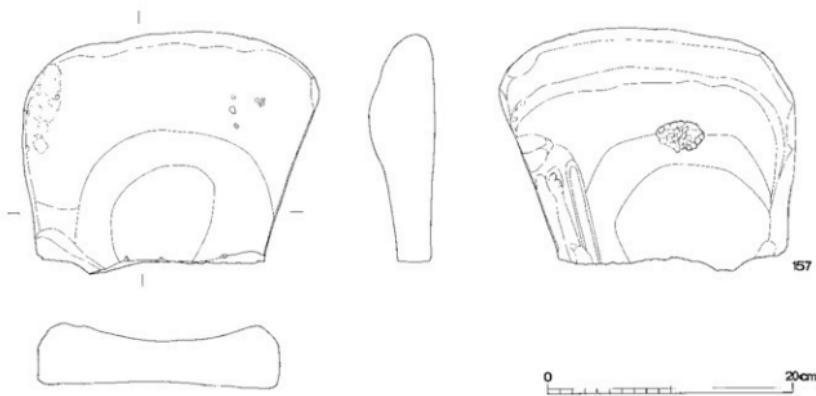


図33 I区・II区道路1出土石器実測図(3)

155は叩石で、径9.4cm、厚さ5.1cm、重さ412.1g、比重は2.55である。156は磨石で、幅11.9cm、残長10.7cm、厚さ5.4cm、重さ1,104.9gを測る。比重は2.93である。

157は石皿で、幅24.3cm、長さ19.9cm、厚さ5.4cm、重さ3,481gを測る。比重は2.15である。欠損部分は大きいが、表裏面および側面も使用している。

他に幅4.0cm、長さ5.8cm、厚さ0.9cm、重さ39.9gの緑泥片岩が1片出土している。比重は2.88である。

#### (5) III区出土の石器

158・159は、第2遺構面上層の遺物包含層中よりの出土であるが、時期的には弥生時代前期に属するものと考えられるので、ここでとりあげる。

158は石庖丁片で、全体の形状は外湾刃半月形を呈するものと思われる。表面には自然面が残り、破断面は研磨している。刃部端も刃部に直交する研磨によって刃潰しをおこなっている。刃部はややシャープさに欠ける。裏面は手擦れによって自然面が磨滅している。幅3.7cm、長さ3.9cm、厚さ0.85cm、重さ14.1g、比重2.56で、石材は頁岩と砂岩が互層となっているものが使用されている。

159は楔形石器で、幅5.8cm、長さ4.1cm、厚さ1.2cm、重さ44.9gを測り、比重は2.67である。石材はサヌカイトである。

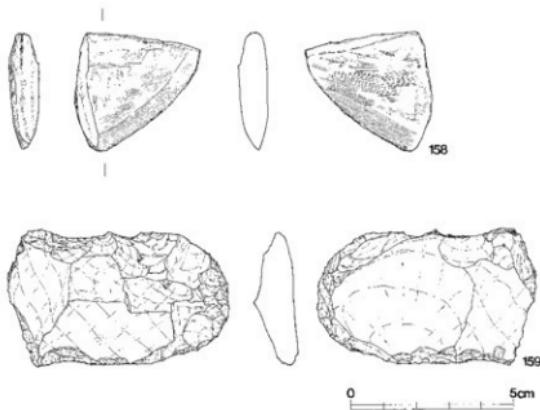


図34 III区出土石器実測図

### 第3節 弥生時代後期の遺物

#### (1) 弥生時代後期の土器の分類

弥生時代後期に該当する遺物は、各調査区で出土している。28m入りコンテナにして約20箱を数え、比較的まとまった量が出土している。まず、以下で形態分類を行い、各遺構

毎に説明を加えていく。

- 壺A 扁球形の体部に、太く直立した頸部と大きく外反する口縁部を有する。口縁端部は下方に拡張され、大きな平坦面が確保され、紋様が施されるものが多い。法量から大・中・小に分類できそうである。
- 壺B 球形に近い体部に、短くたちあがる頸部と外反する口縁部を有する。口縁端部は平坦面を有する。
- 壺B 球形に近い体部に、外反気味にたちあがる口縁部を有する。口縁端面には擬凹線の巡るものが多い。
- 壺C 縱長の球形の体部と外反する口縁部から成る。端部は若干上方へつまみ上げられる。
- 壺D 扁球形の体部に、短く外反気味にたちあがる口縁部を有する。口縁端部は平坦面を有する(IV区の壺268)。
- 壺E 球形の体部から、やや内傾する頸部と外反して斜上方へ延びる口縁部から成る。
- 壺F 短く斜上方にたちあがり、屈曲した後内湾しながら延びる口縁部を有する。
- 壺G 球形の体部に緩やかに外湾気味にたちあがる口縁部を有する。口縁端部は若干下方へ拡張され、鈍い凹線が巡る。
- 壺G 球形の体部に緩やかに外湾気味にたちあがる口縁部を有する。口縁端部は丸く收める。
- 壺H 球形の体部から、ほぼ直立して延びる太く長い口縁部を有する。
- 壺I 扁球形の体部から、やや外傾気味に延びる口縁部を有する。丸く收められた口縁部外面には凹線が巡る。
- 壺A：丈高の丸みをもつ体部と、外反する口縁部をもつ。口縁端部は平坦面を呈する。
- 壺A：丈高の丸みをもつ体部と、外反する口縁部をもつ。口縁端部には擬凹線の巡るものがある。
- 壺A：丈高の丸みをもつ体部と、外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸く收める。
- 壺B：外反して延びる頸部と、内湾気味に受口状を呈する口縁部をもつ。
- 鉢A：外反する口縁部をもち、その端部は面をもつ。
- 鉢B：小型の直口の鉢で、口径が器高を凌駕するものはB<sub>1</sub>、口縁部形態は判然としないが、底部に低脚台を付すものはB<sub>2</sub>。
- 鉢C：鉢B<sub>1</sub>の底部に穿孔のあるもの。
- 高坏A 口縁部が屈曲してたちあがる坏部と、裾ひろがりの脚部を有する。
- 坏体部と口縁部の成す角度から、3類に分けられる。
- A<sub>1</sub>：130～140度前後
- A<sub>2</sub>：150度前後
- A<sub>3</sub>：A<sub>1</sub>のうちで、肉厚のもの。
- 高坏B 楕形の坏部で、坏口縁部と体部の境に突帯状の明確な稜を有する。
- 器台 全体の器形が割る資料がないため、不詳である。
- この他に個体差が大きくて分類するには至っていないミニチュア土器がある。
- なお、壺A～Fはいわゆる広口壺、壺G～IIは長頸壺、壺Iは細頸壺と呼ばれるものと対応するものと考えている。

(山本・阿部)

## (2) III区 SK 01 出土の土器

今回の調査で検出した遺構のうち、最も当該期の土器が多く出土しているのは、III区で検出したSK 01である。よって、まずIII区 SK 01 出土土器についてみていくこととする。

III区 SK 01 出土土器には、上述した分類のほぼ全器種がそろっているが、第III章第2節で既に触れたようにSK 01の壠上は5層に分層が可能で、そのうちの第2層を除く層位から土器がまとめて出土している。よってこの第2層を鍵層として層位的には上・下2層に分層が可能であり、以下この2つのまとまりの中でみていくこととする。

下層出土土器 下層（第3～5層）出土土器には、壺A（160～163）、壺B<sub>1</sub>（164・165）、壺B<sub>2</sub>（166・167）、壺C（168）、壺E（169）、壺G<sub>1</sub>（170）、壺G<sub>2</sub>（171）、壺H（172・173）、甕A<sub>1</sub>（183・184）、甕A<sub>2</sub>（185～188）、甕A<sub>3</sub>（189～195）、鉢A（207～210）、鉢B<sub>1</sub>（211・212）、鉢C（213）、高壺A<sub>1</sub>（222・223）、高壺A<sub>2</sub>（224）、ミニチュア土器（229～232）などがある（図35～図38）。

160は口縁端部を下方に拡張し幅広の平坦面を作りだし、その端面に擬凹線を4条巡らし、ヨコナデによってすり消している。頸部の外面には貼り付け突帯を1条巡らし、ヘラ状工具による刻み目を施す。外面の調整は11条/cmの縦方向のハケの後縦方向（一部横方向）のヘラミガキを施す。内面の調整は磨滅により不明である。口縁部は内・外面ともにヨコナデで、端部内面は2次焼成を受けている。口径26.6cmを測る。

161は壺Aの口縁部で、内外面共にヨコナデである。口径22.0cmを測る。

162は下方に拡張した口縁端部に5条の櫛描波状紋を施し、3個1組の円形浮紋を加えるものである。口径13.2cmを測る。

163は口縁端部を欠くがほぼ器形の全容がわかるもので、やや肩の張った扁球形の体部に直立する頸部が付き、底部は若干上げ底状を呈する。頸部に同一の工具によると思われる4条1組の櫛描直線紋と櫛描波状紋を施紋する。体部外面は2.5条/cmの右上がりのタタキの後10条/cmの縦方向のハケを加え、さらにナデによってすり消しているようである。底部外面は縦方向のヘラミガキを施す。内面は上半はナデ、下半は10条/cmの左上がりのハケの後水平方向及び下から上へのヘラケズリを加える。肩部と底部外面に黒斑がみられる。底径4.7cmを測る。

164は口縁端部に凹線紋を2条巡らし、頸部外面は6条/cmの縦方向のハケを施す。口径13.3cmを測る。

165は頸部外面に縦方向のヘラミガキを施す他は、ヨコナデである。口径13.8cmを測る。

166は口縁端部に凹線紋1条を巡らせるもので、口径17.2cmを測る。

167は口縁端部に擬凹線紋1条を巡らし、外面は4条/cmの縦方向のハケ、内面は4条/cmの左上がりのハケの後ナデを加える。口径12.4cmを測る。

168は甕に分類される可能性も考えられたが、ここでは壺Cに分類した。外面の調整は4条/cmの縦方向のハケの後ヘラミガキを加える。内面は口縁部が横方向、体部が左上がりのハケの後ナデである。口縁部は強いヨコナデによって端部が僅かに窪んでいる。口径12.6cmを測る。

169は短く直立する頸部にほぼ直線的に開く口縁部をもつもので、口縁部はヨコナデで、

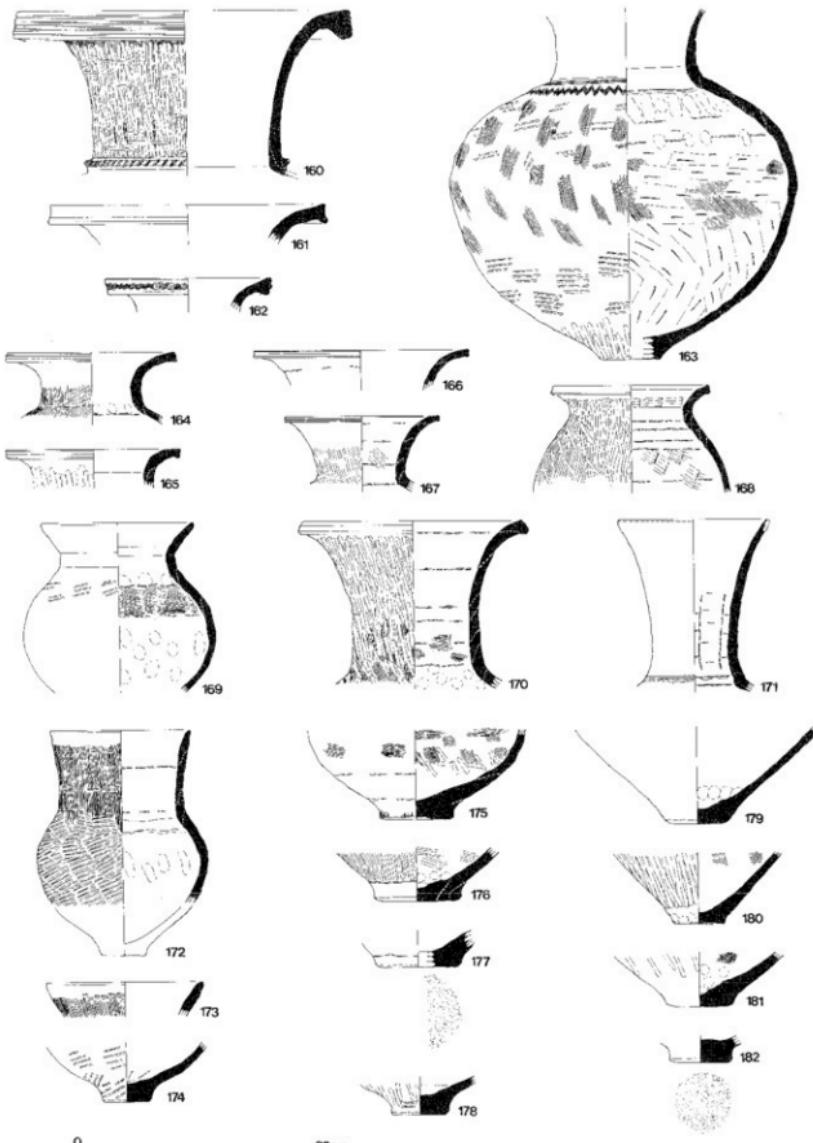


図35 Ⅲ区 SK 01出土土器実測図(1)

端部はやや上方につまみ上げるような感じに仕上げる。体部外面は3条/cmのやや右上がりのタタキの後ナデによるすり消しが加わり、タタキメは肩部にしか残存しない。内面は肩部に10条/cmの横方向のハケを施しているが、その他はナデで指頭圧痕が残る。口径12.0 cmを測る。

170は拡張した端部が円線状に窪むもので、頸部外面は10条/cmの縦方向のハケメの後縦方向のヘラミガキを施す。内面は一部に10条/cmの横方向のハケメがみられるが、基本的にナデで、接合痕や指頭圧痕が残る。口径17.6 cmを測る。

171は口縁部はヨコナデ、頸部外面は横方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラケズリを施す。口径12.2 cmを測る。

172は体部下半以下を欠く。体部外面は3条/cmの螺旋状タタキを施すが、肩部はやや方向が乱れ、口頸部外面に施した10条/cmの縦方向のハケによって一部をすり消している。口径11.0 cmを測る。

173はヨコナデ後外面に8条/cmの縦方向のハケを施す。口径12.4 cmを測る。

174～182は底底部で、外面にタタキメの残るもの（174）、ハケメの残るもの（175）、ヘラミガキを施すもの（176・178・180・181）などがある。175の内面は10条/cmの縦・横方向のハケの後ヘラミガキを施す。177・182の底部外面には木葉痕が残る。

183は外面に、2条/cmのタタキを肩部と下半部は水平方向に、中央部は右上がりに施し、肩部と下半部は6条/cmの縦方向のハケ、縦方向のヘラミガキでそれぞれすり消している。体部中央部はさらに左上がりのタタキを加えている。内面は頸部以下にヘラケズリを施す。口径22.3 cm、体部最大径25.2 cmを測る。

184は口縁部はヨコナデ、体部はタタキを施しているようだが磨滅のため判然としない。口径は14.3 cmを測る。

185は口縁部はヨコナデ、体部は2条/cmの螺旋状タタキを施す。内面はナデで、指頭圧痕、接合痕が残る。口径15.0 cmを測る。

186は外面に2.5条/cmの螺旋状のタタキを施すが、下半はナデによってすり消している。内面は口縁部は10条/cmのやや左上がりのハケ、体部上半は板ナデに近い左上がりのハケ（原体の幅は約2.7 cm）、下半はナデである。

187は口縁部はヨコナデ、体部外面は4条/cmの右上がりの螺旋状タタキ、体部内面は4条/cmの横方向のハケメを施す。口径17.1 cmを測る。

188の体部外面は3条/cmの右上がりのタタキ、口縁部外面は10条/cmのハケ後ヨコナデ、内面は口縁部及び体部上部は10条/cmのやや左上がりのハケを施す。口径17.2 cmを測る。

189は、体部外面に2条/cmの螺旋状タタキを施し、下半部は一部4条/cmの縦方向のハケを加え、上半部はナデによってすり消している。内面は4条/cmのやや左上がりのハケを全体的に施し、体部下半に部分的に縦方向のハケを加える。口径15.9 cmを測る。

190は球形に近い体部に外反する口縁部が付くもので、体部外面に2.5条/cmのタタキを上半は螺旋状に、下半は水平方向に施す。内面は口縁部は6条/cmの横方向のハケをヨコナデによってすり消し、体部はナデで、接合痕が明瞭に残る。口径16.4 cmを測る。

191は口縁部はヨコナデ、体部は外面は3条/cmの右上がりのタタキ、内面は右から左

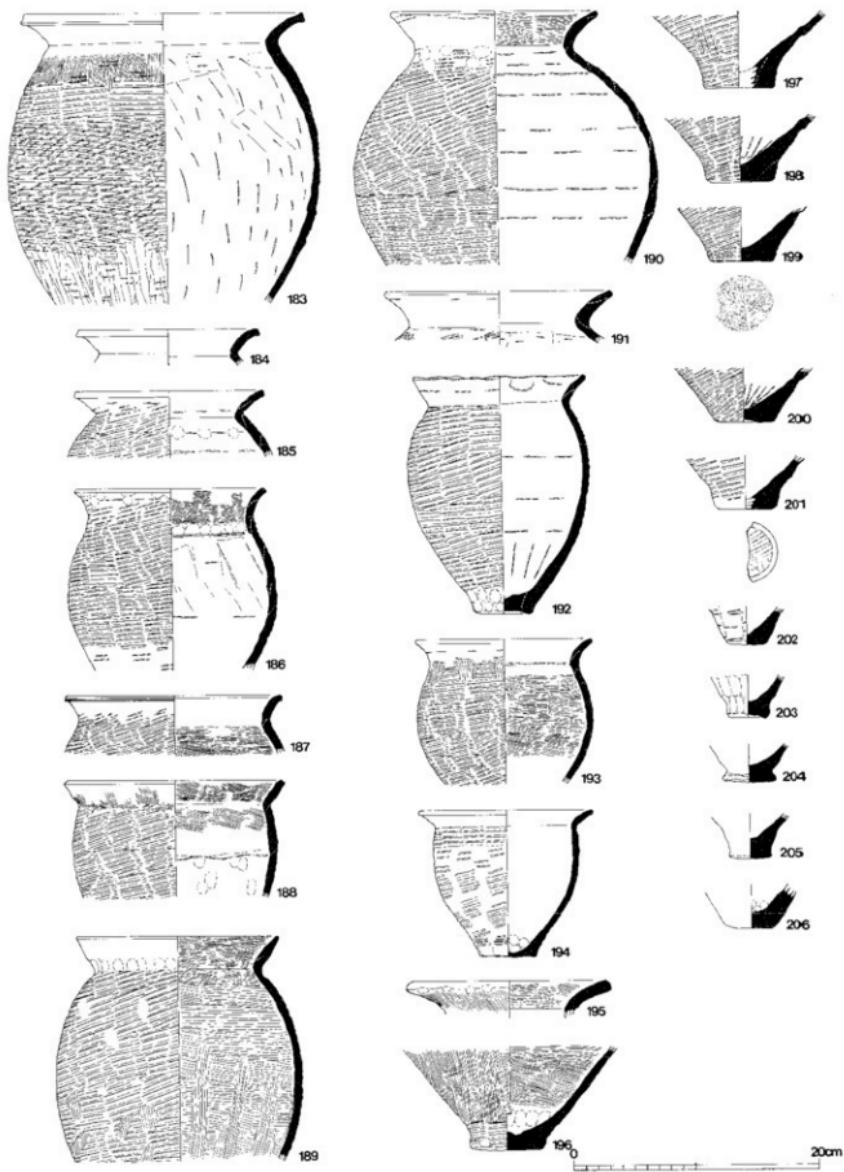


図36 III区 SK 01 出土土器実測図(2)

へのヘラミガキを施す。口径 15.0 cm を測る。

192 は壺 A<sub>3</sub> の完形品で、体部外面に 2 条/cm の螺旋状タタキを施す。内面は當て道具の痕跡と思われる圧痕や接合痕が残り、口縁部はやや粗雑な作りで波状を呈する。口径 13.6 cm、器高 19.3 cm を測る。

193 は外面に 3 条/cm の螺旋状タタキの後頭部に 8 条/cm の板ナデに近い縱方向のハケを加える。体部内面は 8 条/cm の横方向のハケを施すが、下部は磨滅により不明である。口径 14.0 cm を測る。

194 は体部外面に 2 条/cm のタタキを、下半は右上がりに、上半は水平方向に施す。底部はナデ及び 3 条/cm のタタキにより仕上げている。口縁部はヨコナデ、体部内面はナデである。口径 13.8 cm、器高 12.1 cm を測る。

195 は壺 A<sub>3</sub> の口縁部と思われるもので、6 条/cm のハケを外面は縱方向、内面は横方向に施す。口径 15.4 cm を測る。

196 ~ 206 は壺または鉢の底部である。196 ~ 202 はタタキ成形によるもので、196 は 6 条/cm の縱方向のハケを加え、202 は板ナデ状のハケによってすり消している。199 の底部外面には木葉痕が残り、201 の底部外面は木葉痕をタタキとナデによってすり消している。203 ~ 206 は指オサエ、ナデによって成形しているものである。

207 は体部外面は 8 条/cm の縱方向のハケの後やや左上がりのヘラミガキを施す。体部内面は放射状にヘラミガキを施すが、やや粗めである。口縁部は内面に 8 条/cm の横方向のハケを施し、ヨコナデによって粗くすり消している。口径 40.4 cm を測る。

208 は外反する口縁部をもつもので、端部は面をもつ。体部外面は横方向、頭部は縱方向に 10 条/cm のハケを施す。体部下半外面は縱方向のヘラミガキを施す。体部内面は放射状のヘラミガキを施す。口縁部はヨコナデで、内面に指頭圧痕が残る。口径 29.0 cm を測る。

209 は外面は 10 条/cm の左上がりのハケ、内面は体部下半が 10 条/cm の縱方向のハケの後 4 条/cm の放射状のハケを加える。口縁部はヨコナデだが、8 条/cm の横方向のハケが残る。口径 24.3 cm、器高 9.3 cm を測る。

210 は口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面は左上がりのナデで仕上げる。口径 21.9 cm を測る。

211 は小型の鉢の完形品で、外面はナデで下半にタタキメが残る。内面は 2 ~ 3 条/cm の左上がりのハケをナデにより粗くすり消している。口径 8.7 cm、器高 6.3 cm を測る。

212 は口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面は 6 条/cm の左上がりのハケを施す。口径 15.5 cm、器高 8.0 cm を測る。

213 は壺 C で、底部に径 2 ~ 2.5 mm の円孔を両面より穿孔する。円孔は 6 孔残存しているが、欠損部分にもう 1 孔存在した可能性がある。体部下半は 3 条/cm の螺旋状タタキ、上半は 2 条/cm の右上がりのタタキを施す。内面は体部下半は左上がりのナデで、上半はナデを施す。口縁部は歪みが大きい。口径 23.0 cm、器高 15.7 cm を測る。

214 ~ 221 は鉢底部で、大きく上げ底になるもの、僅かに上げ底状のもの、平底のものがある。214 ~ 215、219 ~ 221 は指頭圧痕が明瞭に残る。216 は内・外面にヘラミガキを施すもので、底部外面に 3 条/cm のタタキメが残る。217 ~ 218 は外面にタタキメのみら

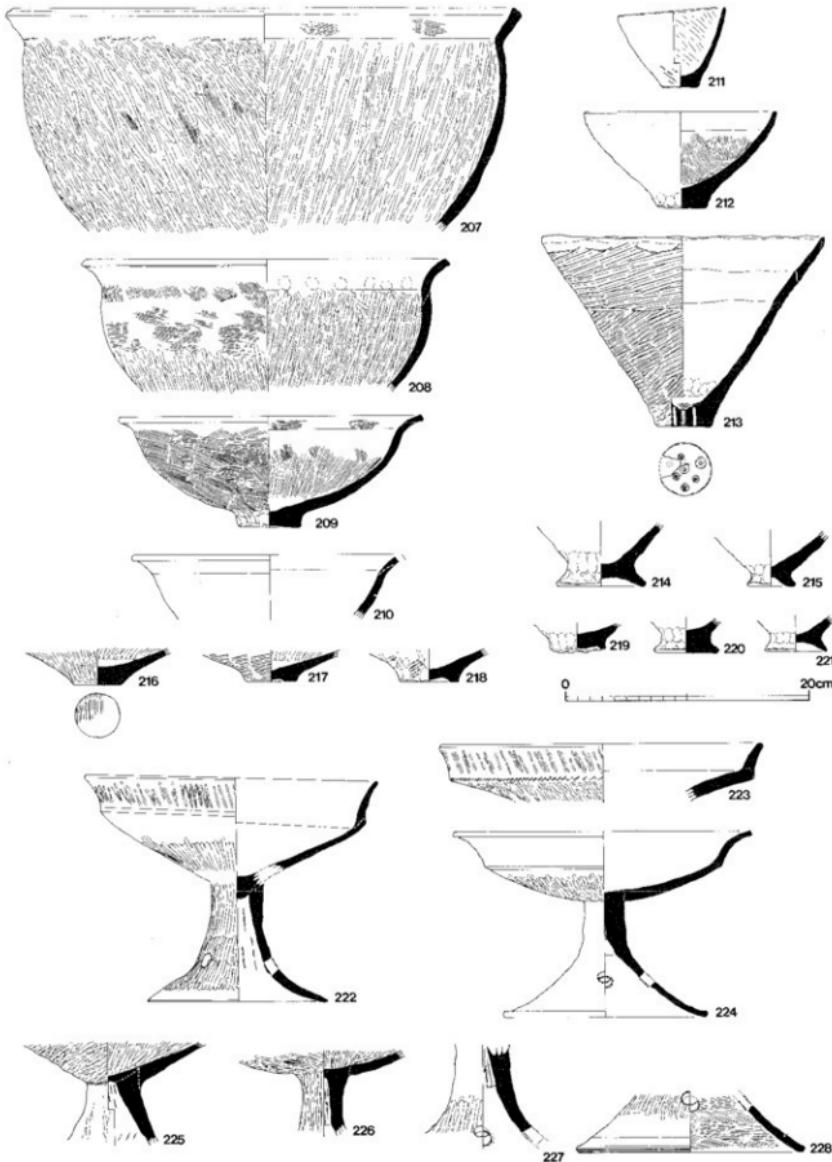


图37 III区 SK 01 出土土器实测图 (3)

れるもので、218はナデ、ヘラミガキによってすり消している。

222は高坏A<sub>1</sub>に分類されるもので、脚部は緩やかに開き、外面は縦方向のヘラミガキを施し、径1.1cmの円孔を3方向から穿孔している。脚部内面はヨコナデを施すが、紋目が残る。坏部は底部が直線的に開き、口縁部はゆるく外反する。坏底部外面は放射状のヘラミガキを施し、口縁部外面もヨコナデの後縦方向の細いヘラミガキを施している。坏部と脚部の接合は、円板充填法による。口径23.7cm、器高18.7cmを測る。

223は器台の可能性も考えられるが、ここでは高坏として分類した。外面はヘラミガキによって仕上げられるが、坏底部と坏口縁部の境にヘラ状工具による細い刻み目が巡る。口径26.0cmを測る。

224は口縁部が大きく開くもので、坏口縁部高と坏底部高がほぼ等しいものである。坏底部外面は放射状のヘラミガキを施す。脚部は中実の短い脚柱部と屈曲して大きく開く脚部とから成り、脚部に径1.2cmの円孔を4方向から穿孔する。坏部と脚部の接合は挿入付加法による。口径24.0cm、器高15.2cmを測る。

225～228は高坏の脚部片で、基本的にヘラミガキによって仕上げている。228の脚部内面は6条/cmの横方向のハケを施し、径1.1cmの円孔を4方向から穿孔している。端部には不明瞭な凹線紋が1条巡る。

229～232はミニチュア土器である。229は壺、230は甕、231・232は鉢に分類が可能である。229は2条/cmのタタキ後縦方向のヘラミガキを施すが、指頭圧痕が残る。230は外面は10条/cmの縦方向のハケをナデで粗くすり消している。指頭圧痕が残る。231は外面は4条/cmの左上がりハケ、内面下半はヘラケズリを施す。232は口縁部のみの残存であるが、内・外面ともに磨滅顯著で調整不明である。

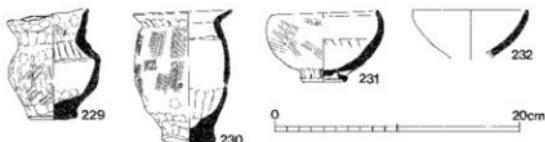


図38 III区 SK 01出土土器実測図(4)

上層出土土器 上層(第1層)出土土器には、壺B<sub>1</sub>(236)、壺F(235)、壺I(233・234)、甕A<sub>1</sub>(240～242)、甕A<sub>2</sub>(243～247)、甕B(248)、鉢A(253)、鉢B(254)、高坏A<sub>1</sub>(257・259)、高坏A<sub>2</sub>(258)、高杯B(260)などがある(図39・図40)。

233は底部を欠くがほぼ器形の全容を知ることのできる細頸壺である。口縁端部には擬凹線が1条巡る。口頸部外面は縦方向のヘラミガキ、体部外面は上部が縦方向、下半はやや左上がりのヘラミガキを施す。体部内面は下半は10条/cmの左上がりのハケを施すが、口頸部及び体部上部は接合痕、指頭圧痕が残る。口径8.4cmを測る。

234は口縁部外面に凹線紋5条が巡り、頸部には縦方向のヘラミガキを施す。内面には紋り日が残る。口径8.4cmを測る。

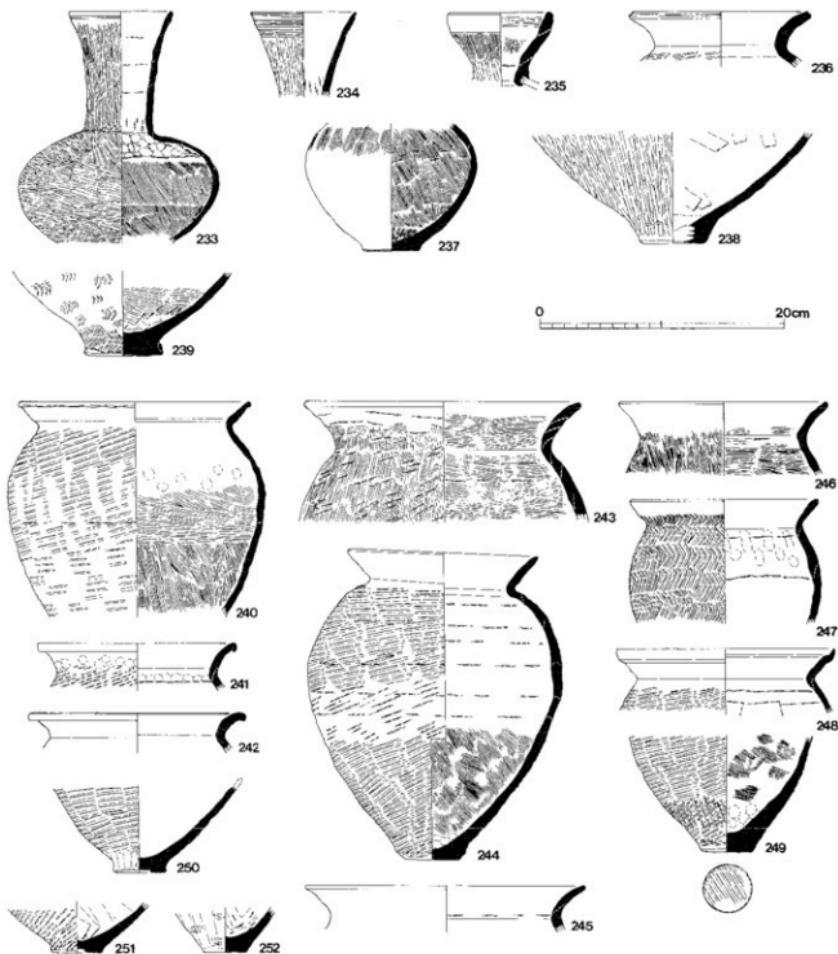


図39 III区 SK 01出土土器実測図(5)

235は内溝して聞く口縁部で、外面は10条/cmの縦方向のハケ後縦方向のヘラミガキ、内面は4条/cmの横方向のハケ後ヨコナデで仕上げる。口径8.0cmを測る。

236は壺の可能性も考えられたが、ここでは壺に分類した。体部外面は3条/cmのタタキをヨコナデによって粗くすり消している。口縁部はヨコナデで、端部は窪んでいる。口径13.9cmを測る。

237は体部上部外面と内面に10条/cmのハケを施すもので、底部内面には蜘蛛の巣状圧痕がみられる。

238・239は壺底部で、238の外面はヘラミガキ、内面は板ナデ状のハケを施す。239は外面に3条/cmの綾杉状のタタキを施し、ナデですり消している。内面は5条/cmのやや左上がりのハケを施す。底部外面はケズリ様の上げ底で木葉瓶が残る。

240の体部外面の下半部は水平方向、上半部は右上がりの2条/cmのタタキを施し、最大径付近にナデを加えすり消している。内面は下半部は8条/cmの縦方向のハケ、最大径付近は6条/cmのやや水平方向あるいは左上がりのハケを施すが、体部上部はナデで指頭圧痕が残る。口径18.4cm、体部最大径20.8cmを測る。

241は、体部外面に4条/cmの右上がりのタタキを施す他はヨコナデで、タタキメをすり消している。頸部内・外面に指頭圧痕が残る。口径15.7cmを測る。

242は口縁部内・外面はヨコナデ、頸部以下の内面はナデで仕上げる。口径16.4cmを測る。

243の外面は、2条/cmの螺旋状タタキを7条/cmの縦方向のハケですり消している。内面は7~8条/cmの横方向のハケを施すが、一部指頭圧痕を含む。口径22.0cmを測る。

244は外面に2条/cmの螺旋状タタキを施し、最大径付近をナデによってすり消す。内面は体部下半は10条/cmの左上がりのハケ、その他はヨコナデ、ナデである。口径15.0cm、器高25.3cm、体部最大径20.6cmを測る。

245は磨滅のため調整不明である。口径22.1cmを測る。

246は8条/cmのハケを外面は縦方向に、内面は横方向に施す。口縁部はヨコナデである。口径16.6cmを測る。

247は頸部以下の外面に3~4条/cmの綾杉紋タタキを施すが、下半部は2次焼成を受けやや磨滅している。内面はナデで体部上半は指頭圧痕が残る。口径14.9cm、体部最大径15.5cmを測る。

248は体部外面に3条/cmの右上がりのタタキを施し、内面の体部は横方向の板ナデであろう。口縁部はヨコナデで、端部は受け口状に上方につまみ上げている。口径17.6cmを測る。

249は外面に3条/cmの右上がりのタタキを施すが、底部付近はナデによるすり消しと垂直に近い浅いタタキが加わる。底部外面には3条/cmのタタキメが残る。

250~252は壺底部であるが、250は鉢の可能性もある。250は外面に2条/cmの螺旋状のタタキを施し、ナデによって粗くすり消している。内面はナデである。底部は上げ底で、外面には指頭圧痕が残る。251は外面は2.5条/cmの右上がりのタタキをナデで粗くすり消している。内面は板ナデである。底部は上げ底である。252の外面は2条/cmの右

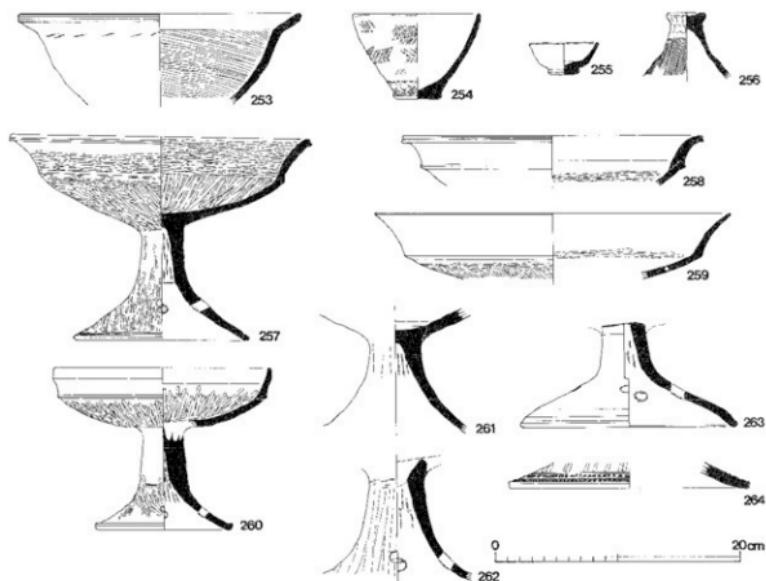


図40 Ⅱ区 SK 01 出土土器実測図 ( 6 )

上がりのタタキを板ナデに近いハケによってすり消している。内面はケズリに近い板ナデである。

253は口縁部はヨコナデで、端部上面に擬凹線1条、端部外面に凹線1条が巡る。体部外面は下から上へのナデで、頸部に絞り目が残る。内面は5条/cmの左上がりのハケを施す。口径22.6cmを測る。

254は外面に3条/cmの綾杉紋タタキを施し、ナデによって粗くすり消している。内面はナデで仕上げる。口径10.2cm、器高7.0cmを測る。

255はミニチュア土器の鉢で、手捏ねの後ナデで仕上げる。口径5.5cm、器高2.6cmを測る。

256は蓋で、頂部は円状を成す。体部外面は10条/cmの縦方向のハケを施し、内面はナデである。つまみ部外面に指頭圧痕がみられる。

257の壺口縁部は内・外面ともに横方向のヘラミガキ、壺底部は外面は不整方向、内面が放射状のヘラミガキを施す。脚部は外面は丁寧なナデ調整の後縦方向のヘラミガキ、内面は丁寧なナデで仕上げる。径1cmの円孔を4方向から穿孔する。口径23.9cm、器高17.1cmを測る。

258・259は高杯壺部で258は口縁部を厚めにつくり出すA類である。口縁部はヨコナ

テで、端部に鈍い凹線が1条巡る。坏底部は横方向のヘラミガキを施す。口径24.1cmを測る。259は坏底部外面は放射状のヘラミガキ、坏底部と坏口縁部の境は内・外面ともに横方向のヘラミガキを施す。口径28.8cmを測る。

260は高坏Bの器形がわかる唯一の例で、坏口縁部と坏底部の境に突帯状の明瞭な稜が巡る。坏口縁部はヨコナデ、坏底部は放射状のヘラミガキを施す。脚部は中実で、長めの脚柱部から屈曲して短く聞く裾部をもつ。外面は板ナデ状の縱方向のハケの後ナデ及びヘラミガキですり消す。径8mmの円孔を4方向から穿孔する。脚部と坏部の接合は坏底部を欠くため明確ではないが、おそらく挿入付加法によるものと思われる。口径17.4cm、器高13.3cmを測る。

261～264は高杯脚部である。261の外面は坏底部がハケで、脚柱部はヘラミガキであろう。脚裾部はナデである。脚部と坏部の接合は挿入付加法で、円孔の有無は不明である。

262は外面に縱方向のヘラミガキあるいはハケを施しているものと思われ、内面はナデである。径1.3cmの円孔を4方向から穿孔する。脚部と坏部の接合は断定はできないが、円板充填法によるものと思われる。263は脚柱部から屈曲して内湾してひらく脚裾部をもつものである。内・外面ともに磨滅顯著で調整については不明だが、径1.3cmの円孔を4方向から穿孔する。脚部と坏部の接合は挿入付加法によるものと思われる。264は外面はナデ及びヘラミガキで、内面はヨコナデ調整である。脚裾部は装飾が豊かで、沈線紋+三角形刺突紋+凹線紋+円形竹管紋+沈線紋を施紋する。

### (3) その他の弥生時代後期の土器

IV区

SD 01から比較的まとまって当該期の土器が出土している。このうち、図化できたのは21点である(図41)。

SD 01出土土器には、壺B<sub>1</sub>(265)、壺E(266)、壺D(268)、壺I(267)、壺底部(269・270)、壺A<sub>3</sub>(271～273)、壺底部(274～280)、鉢B<sub>1</sub>(282)、鉢B<sub>2</sub>(281)、鉢A(285)、高坏A<sub>2</sub>(286)、高坏脚部(287・288)、ミニチュア土器(283・284)がある。

265は、幅広の口縁端部を強いヨコナデによって窪ませ、頸部及び体部上部外面は縱方向のヘラミガキを施し、内面はヨコナデを施す。頸部内面は指頭圧痕が残る。口径22.8cmを測る。

266は、内・外面ともにヨコナデを施すものと思われるが、内面は磨耗顯著で詳細は不明である。口径13.3cmを測る。

267は、細頸壺の口頸部であるが、端部付近を欠いている。外面は磨耗顯著で調整不明、内面には絞り痕や接合痕が明瞭に残る。

268は短く外反する口頸部をもち、端面をもつもので、外面は緻密なヘラミガキを施す。口縁部内面にも横方向のヘラミガキがみられるがヨコナデが加わるため不明瞭である。体部内面下半は板状の工具によると思われるナデを施しているが、上半は接合痕が残る。口径8.3cmを測る。

269は、体部外面は指押さえ及びナデ、内面は14条/cmの横方向のハケ、底部内面は8

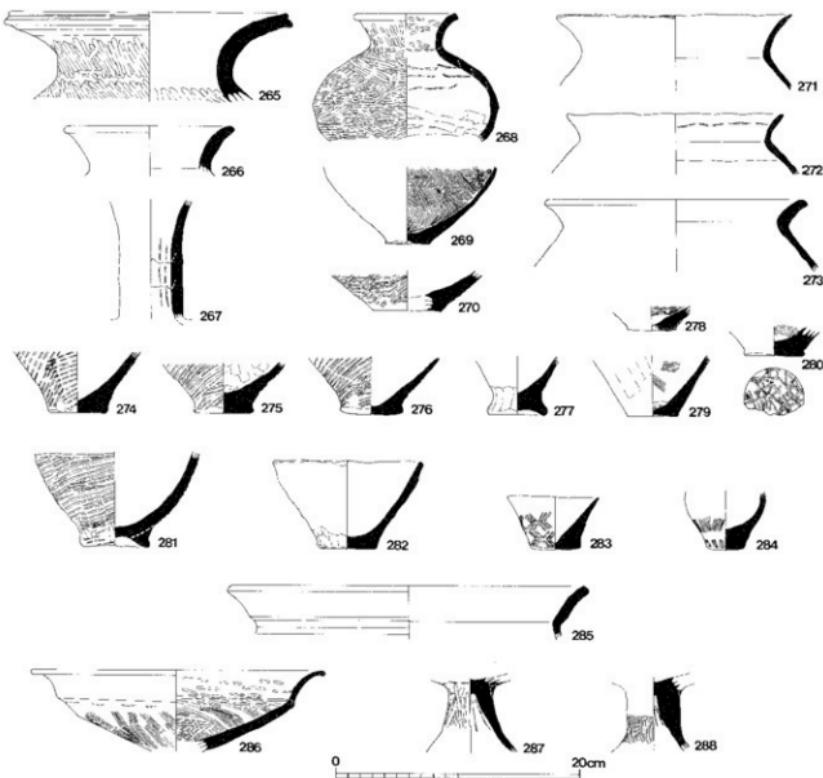


図41 IV区 SD 01出土土器実測図

条/cmの放射状のハケを施し、蜘蛛の巣状圧痕がみられる。また、底部外面は押圧によって上げ底状に盛んでいる。底径3.7cmを測る。

270は壺底部で、外面は、3条/cmのタタキを横方向後右上がりに施す。内面はナデ。底径5.6cmを測る。

271～273は壺口縁部で、何れも磨耗顯著で調整については不明である。口径は271は21.6cm、272は口径17.8cm、273は19.3cmを測る。

274～280は壺底部としたが、上げ底の277は鉢底部の可能性もある。274～276は外面にタタキメを残すものであるが、278は9条/cmの右上がりのハケ、280は6条/cmの放射状ハケをそれぞれ内面に施し、15は外面板ナデ、内面に8条/cmのハケを施す。280の底部外面にはタタキメが明瞭に残る。

281は口縁端部を欠くため断定は難しいが、鉢であろう。粘土縫を輪状に接合して脚台

状の底部とし、その上にさらに粘土紐を積み上げて成形している。外面に3条/cmの右上がりのタタキメが残るが、最上部は水平方向のタタキメがみられることなどから、壺を分割成形する際の擬口縁を生かして鉢として整形したものと思われる。底部はタタキメを指すサエによってすり消している。底径5.6cmを測る。

282は外面は指すサエ、ナデによって整形し、底部外面に指頭圧痕が残る。内面は螺旋状のナデを施す。口径4.9cm、器高7.2cmを測る。

283・284はミニチュア土器で、手捏ね成形によるものである。283は鉢で、外面に絞杉紋タタキを施す。口径7.5cm、器高4.3cmを測る。284は鉢あるいは壺と思われる。外面に10条/cmの縱方向のハケを施し、ナデを加える。底径3.0cmを測る。

285は大型の鉢口縁部と思われる。内・外ともにヨコナデを施すもので、口径29.5cmを測る。

286は高壺の壺部で、壺底部は内・外ともに7条/cmの縱方向のハケ、壺口縁部内面が横方向のヘラミガキを施す。口径24.1cmを測る。

287・288は高壺脚柱部で、287は外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデで、絞り痕が残る。288は外面は10条/cmの縦方向のハケ、内面はナデで、絞り目が残る。ともに挿入付加法によって壺部と接合されるものと思われる。

I区南半  
SK 01 および遺物包含層である暗褐色砂質土層から量的には少ないが、当該期の土器が出土している。

SK 01 出土土器には壺B<sub>1</sub>(290)、壺B<sub>2</sub>(289)、壺I(291)、小型の壺(293・294)がある(図42)。

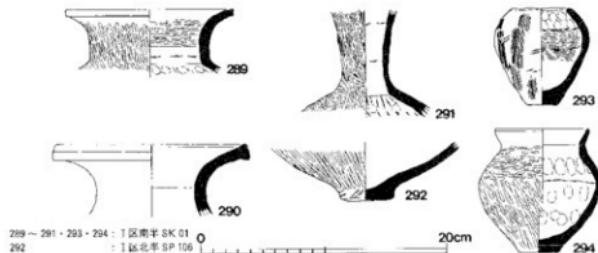


図42 I区道構出土土器実測図

289は、頭部外面が縦方向のヘラミガキ、内面が横方向のヘラミガキを施す。口縁部は内・外ともにヨコナデ、頸部下半以下はナデである。内面には接合痕、絞り目、指頭圧痕が残る。

290は磨滅が顕著なため詳細は不明だが、内・外ともにヨコナデを施すものと思われる。口縁端部は強くヨコナデを施す。

291は細頸壺の口頸部で、外面は口縁部が8条/cmの縦方向のハケ後縦方向のヘラミガキ、体部上半は左上がりのヘラミガキを施す。内面はナデであるが、接合痕、絞り目、指頭圧痕が残る。

293は蛸壺の可能性も考えられるが、判然としない。外面は平行タタキの後8条/cmの縦方向のハケ、内面は体部に8条/cmの横方向のハケがみられるが、口縁部には指頭圧痕が残り、底部はナデである。

294は小型の壺で、外面は体部上半が横方向、下半が左上がりのヘラミガキ、内面には指頭圧痕、接合痕が残る。口縁部は内・外面ともにヨコナデを施す。口径7.4cm、器高10.2cmを測る。

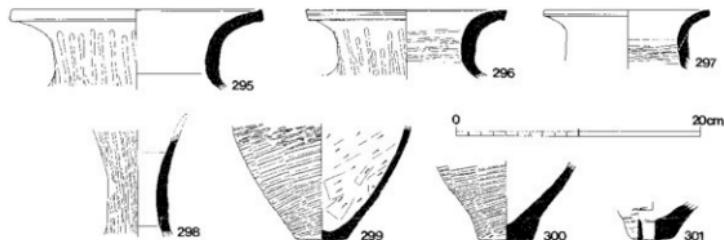


図43 I区南半出土土器実測図

SK 01以外では遺物包含層（図43-295～297・299・301）および攪乱層中（図43-298・300）より当該期の当該期の土器が出土している。

295～297は口縁部のみの残存で体部以下の器形は不明であるが、いずれも壺B<sub>1</sub>に分類されるものである。295は、外面がナデの後縦方向の粗いヘラミガキ、内面はナデを施す。口径20.2cmを測る。296は、外面の調整は295とほぼ同じだが、内面にも横方向のヘラミガキを施す。口径16.2cmを測る。297は、磨滅のため、外面及び内面上部については不明だが、頭部内面には横方向のヘラミガキを施す。外面には縦方向のヘラミガキを施しているようだが、判然としない。口径13.6cmを測る。

298は、内湾気味に緩やかに外反する壺Iの口頭部で、端部付近を欠いている。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は口縁部がヨコナデ、頭部が棒状の工具によるものと思われるナデを施す。基部径5.6cmを測る。

299・300は壺底部、301は鉢Cの底部であろう。299は、外面は2条/cmの右上がりのタタキ、内面はヘラケズリ後ナデを施す。底径4.4cm、残高9.4cmを測る。300は、外面が3条/cmの右上がりのタタキ、内面はナデを施す。底部外面には木葉痕がみられる。底径4.4cmを測る。

301は、外面は3条/cmのタタキをナデによってすり消し、内面はナデを施す。底径3.6cmを測る。底部中央に径1cmの円孔が穿孔されており、瓶として使用されていたものと考えられる。

I区北半 SP 106 から当該期の土器が出土している（図42-292）。

292は壺底部で、外面は縦方向のヘラミガキを施すが、底部外面には右上がりのタタキメが残る。底径4.5cmを測る。

## 第4節 古墳時代後期以降の遺物

### (1) 土器

I区南半

当調査区では SX 01 より古墳時代後期の土器が出土している（図44）。

302～305は須恵器で、302は壺蓋、303・304は壺身、305は有蓋高壺の蓋である。

302は天井部の約1/2に回転ヘラケズリを施す。天井部の内面は不定方向のナデを含む回転ナデである。口縁部は回転ナデで、端部は丸く收めている。口縁部と天井部の境の後は鈍く、天井部には淡黄白色の自然釉がかかる。口径 11.9 cm、器高 3.9 cm を測る。303 は底部の約1/3に回転ヘラケズリを施す。その他は回転ナデで、口縁端部はやや窪んでいる。受部端部は鋭い稜をなす。底部は火たすきと黒灰色の自然釉がかかる。口径 10.6 cm、受部径 12.4 cm、たちあがり高 1.7 cm、器高 4.5 cm を測る。304 は底部の1/2弱に回転ヘラケズリを施す。受部付近に暗灰色の自然釉がかかる。口径 10.7 cm、受部径 13.7 cm、たちあがり高 1.6 cm、器高 4.1 cm を測る。305 は天井部の約1/2に回転ヘラケズリを施し、頂部に中央部が窪むつまみを有する。天井部と口縁部の境の後は鋭い。その他は回転ナデで、口縁端部は若干窪む。口径 12.0 cm、器高 5.1 cm、つまみ径 3.2 cm、つまみ高 0.9 cm を測る。

306 は製塙土器の口縁部で、外面は磨滅が顕著であるが、指頭圧痕が残る。内面は下から上へのナデである。口径 5.2 cm を測る。

307 は土師器の壺で、体部外面は4本/cmの縱方向のハケを施し、下半はナデによって粗くすり消している。口縁部外面には指頭圧痕が残る。内面は、体部が右上がりのヘラケズリで、頸部直下は右から左へ強いヘラケズリを施す。口縁部は4条/cmの斜め方向のハケをヨコナデによって粗くすり消している。

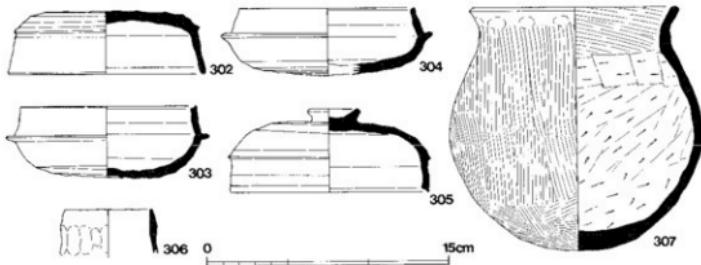


図44 I区南半 SX 01 出土土器実測図

III区切り土部分 同調査区では、平安時代の土器が遺物包含層からまとまって出土している（図45）。

黒色土器 308 は黒色土器の碗である。ほぼ完形に復元されたもので、口径 13.5 cm、器高 5.1 cm で、器高指数は、37.8 を測る。底部は平底で、やや内弯ぎみに外方に開いて口縁部に至る。

口縁端部内面には1条の沈線が巡り、口縁部にはやや強めのヨコナデを施す。底部には退化した断面がやや歪な台形を呈する低い高台を付す。内外面共に非常に精密なヘラミガキ

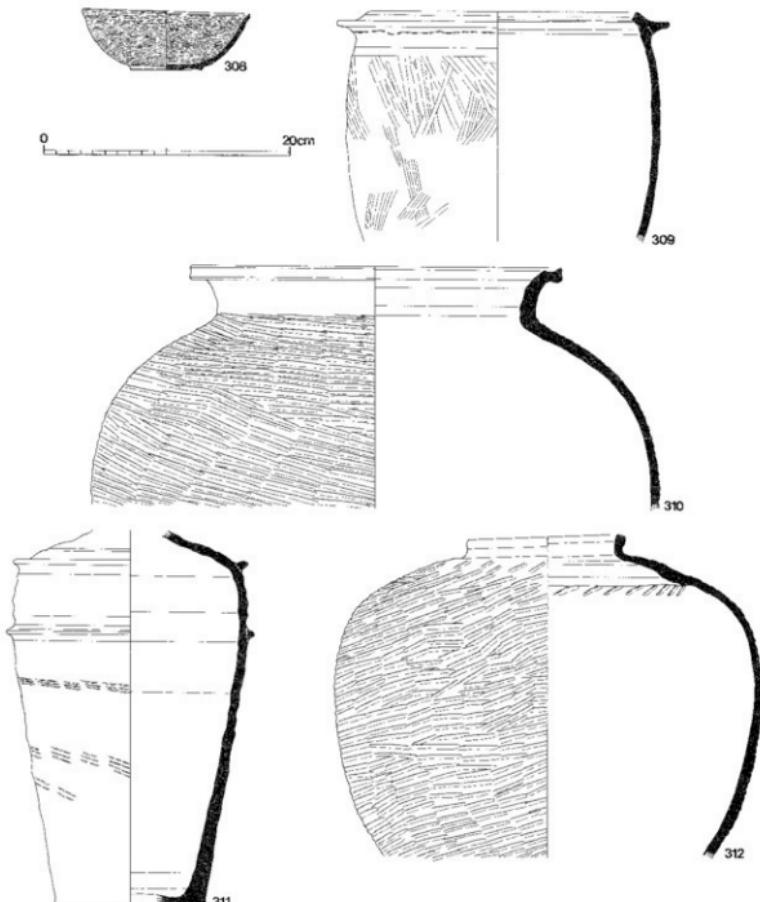


図45 Ⅲ区切り土部分出土土器実測図

を施すが、口縁部内面はヨコナデによって消されている。底部外面についてはヘラミガキを施している可能性もあるが、磨耗のため不明である。

**土師器** 309は、土師器の羽釜である。口径 20.5 cmを測る。

**須恵器** 310は、広口の甕である。口径 30cmを測る。体部外面には、3 条/cmの左上がりのタタキを施す。口縁部は回転ナデ、体部内面は横及び斜め方向のナデである。

311は、双耳壺で、口縁部と耳を欠くが、肩部以下は約半分が残存している。体部外面にタタキメが僅かに残る。底径 12.2 cmを測る。

312は、やや肩の張った無頸の直口壺である。法量は、口径 12.7 cmを測る。体部外面

には、2条/cmの右上がりのタタキを施す。口縁部はヨコナデで、端部上面は面をもつ。肩部の内面には当て道具の痕跡と思われる圧痕が残る。

## (2) 瓦

I区北半

当調査区で平瓦が3点出土している(図46)。

313は包含層出土、314は包含層上面出土、315は表土掘削中の出土である。

313は、凹面は板ナデ、凸面は大・小の亀甲文タタキ、側面はケズリである。厚さ2.8cmを測る。

314は、凹面には布目痕が残り、凸面には繩タタキメ、側面はナデである。厚さ2.3cmを測る。

315は凹面は磨耗顯著で調整不明であるが、凸面は粗めの繩タタキメが残る。厚さ2.0cmを測る。

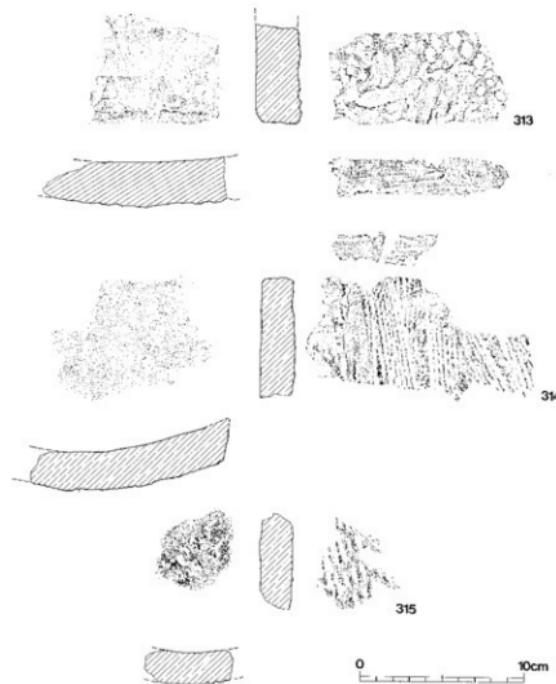


図46 I区北半出土瓦実測図

## III区

8-W区の包含層（暗褐色シルト質細砂層）中から須恵器の丸瓦が1点出土している（図47）。

316は凸面はナデ、凹面はヘラケズリ、側面はヘラ切りである。胎土は2mmまでの白色砂粒を多く含み、焼成は良い。色調は凸面は灰色、凹面は赤灰色である。厚さ2.5cmを測る。

（阿部）

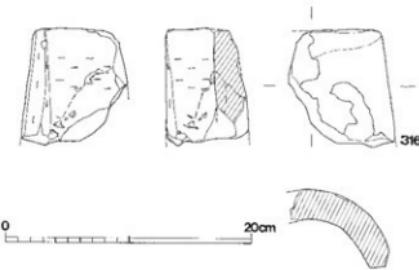


図47 III区出土瓦実測図

## 註

- (1) 泉 拓良「西日本磨研上器様式」小林達夫編『縄文土器大観』4 1989に滋賀里Ⅲ式についての議論がある。ここでは滋賀里Ⅲ式としておきたい。
- (2) 花崗岩の主要成分は、石英、長石、雲母であり、他に角閃石が含まれる。六甲山系に起因する上砂によって製作された当遺跡の土器の胎土についても、当然のことながら基本的に角閃石が含まれる。この点については、御大阪市文化財協会 田中清美氏より指導、助言をいただいた。益富壽之助『原色岩石図鑑』1987
- (3) 所謂牛胸西籠の胎土であるとする場合については、68の土器の胎土、色調を基準として記述する。また長原遺跡の土器を実見するにあたり御大阪市文化財協会 京嶋 党氏より便宜をはかっていたとき、また助言をいただいた。
- (4) 佐原 真他『船橋Ⅱ』平安学園考古学クラブ 1962第14図 806、家根祥多『長原遺跡発掘調査報告Ⅰ』大阪市文化財協会 1982 図版 11B-15・16のものと類似する。
- (5) 石器の比重の計測については、自動天秤ばかり SHIMADZU LIBROREB 3200 D 及び SHIMADZU LIBROR EB 32 KDW を使用して行った。
- (6) 石庵丁の石材については、㈱京都フィッショントラック 檀原 勝氏の分析による。外見上は、神戸市北区道場町武庫川流域に産出する所謂塩田石に類似するが、比重にやや違いが認められる、という助言を同氏よりいただいた。

## 第V章 自然科学的分析

### 第1節 自然科学的分析について

I区北半・II区の調査の進行のなかで、I区北半で大きい落ち込み状の遺構が存在し、かつまた出土遺物が少量ながらも弥生時代前期頃に集中していることなどが判明した。さらにII区でも同様の状況が判明した。

当該期の稲作や環境復原を行うことは、重要な意義をもつものと判断し、以下の自然科学的分析を行った。

分析試料採取については、II区流路1の堆積土は、砂礫が主体でおそらく分析に耐えないものと判断されたため、II区流路1に比べ砂礫が少ないI区流路1を土壤採取の対象とした。土壤採取箇所は、土層観察用に残した畦を利用した。

またこれに反してI区では、木材化石は殆ど残存せず、II区では比較的多くの木材化石が検出された。木材化石の採取は、II区で行った（図48参照）。

以上のように、分析資料の採取については、偏りのある状況は避けがたいものであった。

（口野）

1. プラント・オパール分析（ドット部分）

2. 樹種同定 （網点部分）

3. 花粉分析 （ドット部分）



図48 自然科学的分析試料採取位置平面図

## 第2節 神戸市 上沢遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

1. はじめに この調査はプラント・オパール分析を用いて、上沢遺跡における稻作跡の探査を試みたものである。以下に、プラント・オパール分析調査の結果を報告する。

2. 試料 試料は、I区北半の中央断面から柱状に採取され、当研究所に送付されたものである。この試料から、4層について2点、5層について3点、7層について1点、8層について3点、10層について1点の計10点を分割し、分析試料とした（図49）。

なお、5層からは縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての土器が、8層からは縄文時代晚期の土器が検出されている。

3. 分析法 プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾（105℃・24時間）、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスピーブを添加（直径約40μm、約0.02g）  
※電子分析天秤により、1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（150W・26KHz・15分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-3}$ g）をかけて、単位面積で厚さ1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケア科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である（杉山・藤原、1987）。

4. 分析結果 プラント・オパール分析の結果を表5および図50、図51に示す。なお、稻作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケア科、ウシクサ属（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ属（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限

定した。卷末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

## 5. 考察

### (1) 稲作の可能性について

4層、5層、7層、8層、10層から採取された計10点について分析を行った。その結果、4層中位(4-2)でイネのプラント・オバールが検出されたが、密度は900個／gと低い値である。したがって、同層の堆積時期に調査地点の近辺で稲作が行われていた可能性は考えられるが、上層からの混入の危険性も否定できない。その他の試料からは、イネのプラント・オバールはまったく検出されなかった。

### (2) 古環境の推定(図51参照)

ネザサなどのタケア科植物は比較的乾いた土壤条件のところに生育し、ヨシは比較的湿った土壤条件のところに生育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって土層の堆積環境(乾湿)を推定することができる。

同地点では、全体的にタケア科が卓越しており、ヨシ属はほとんど見られなかつた。このことから、各層の堆積当時の調査地点付近は、タケア科が繁茂するような比較的乾いた環境(土壤条件)であったものと推定される。

## 参考文献

- 杉山真二・藤原宏志 1987 「川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オバール分析」  
『赤山一古環境編一』川口市遺跡調査会報告第10集 281-298.
- 藤原宏志 1976 「プラント・オバール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-」  
『考古学と自然科学』9:15-29.
- 藤原宏志 1979 「プラント・オバール分析法の基礎的研究(3)-福岡・板付遺跡(夜向式)水田および着馬・日高  
道路(弥生時代)水田におけるイネ(O. sativa L.)生産量の推定-」『考古学と自然科学』12:29-  
41.
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オバール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オバール分析による水田址  
の探査-」『考古学と自然科学』17:73-85.

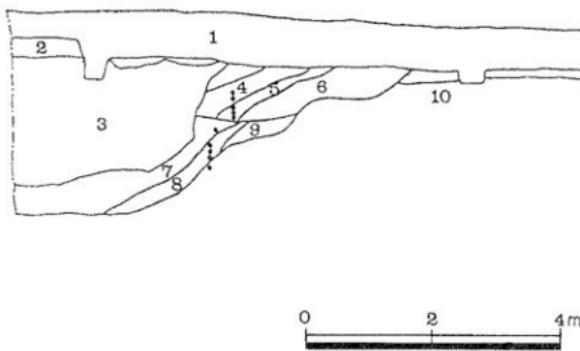
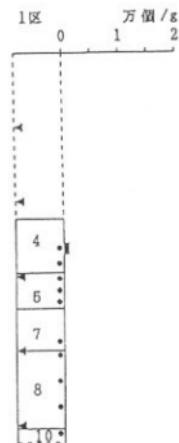


図49 プラント・オパール分析試料採取位置断面図

表5 プラント・オパール分析結果

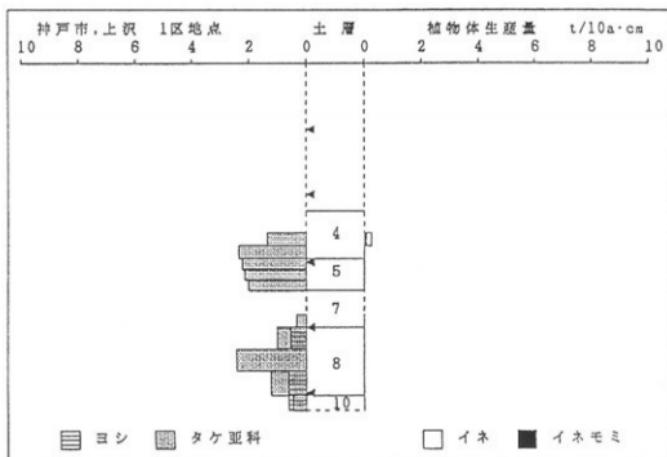
神戸市、上沢遺跡  
T区地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(朽穀量) t/10a	ヨシ藪 個/g	タケ亞科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
4-2	128	10	1.00	900	0.93	0	28,000	0	0
4-3	138	10	1.00	0	0.00	0	48,900	0	0
5-1	148	8	1.00	0	0.00	0	45,800	0	0
5-2	156	8	1.00	0	0.00	0	44,600	0	0
5-3	164	8	1.00	0	0.00	0	41,200	0	0
7-2	190	10	1.00	0	0.00	0	6,600	0	0
8-1	200	17	1.00	0	0.00	700	20,400	0	0
8-2	217	17	1.00	0	0.00	0	50,700	0	0
8-3	234	18	1.00	0	0.00	900	24,800	0	0
10	252	—	1.00	0	—	800	9,700	0	0



(注) ▲印は50cmのスケール, ●印は分析試料の採取箇所

図50 イネのプラント・オバールの検出状況



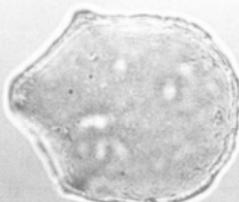
(注) ▲印は50cmのスケール

図51 おもな植物の推定生産量と変遷

1 分類群 イネ  
地点 I区  
試料名 4-2  
倍率 400



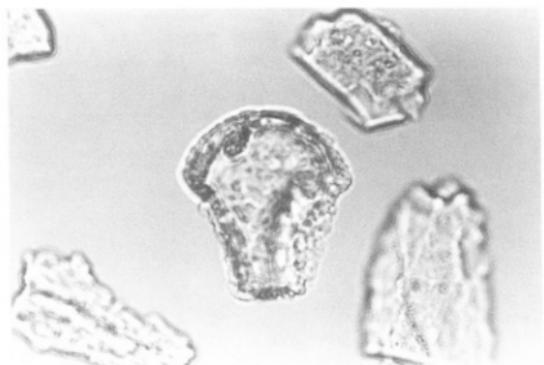
2 分類群 ヨシ属  
地点 I区  
試料名 8-1  
倍率 400



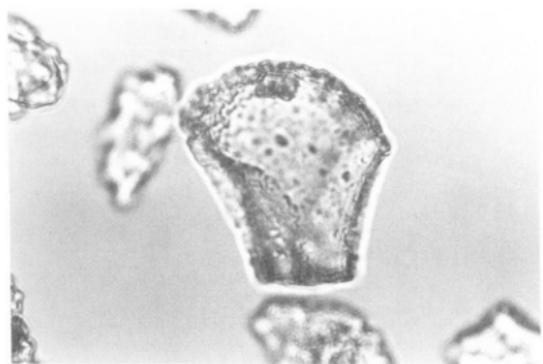
3 分類群 タケ亞科 (ネザサ節)  
地点 I区  
試料名 8-2  
倍率 400



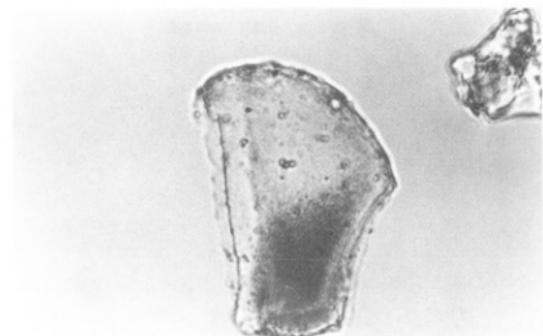
掲図写真12 プラント・オパールの顕微鏡写真 (1)



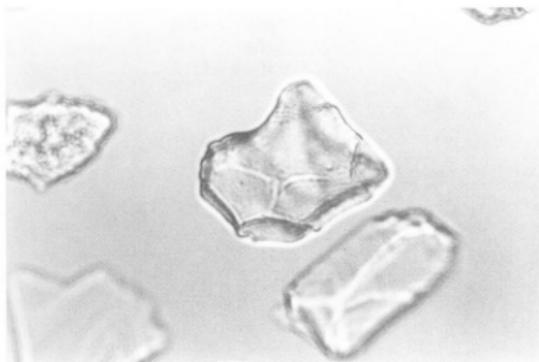
4 分類群 タケ亜科  
地点 I 区  
試料名 4-2  
倍率 400



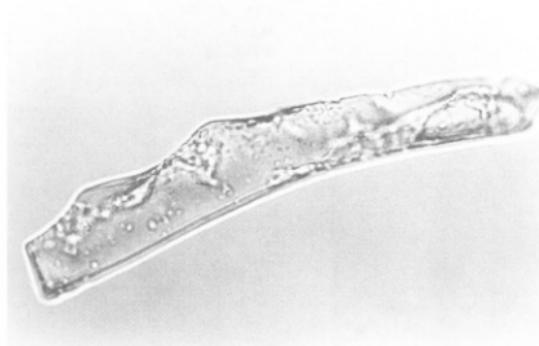
5 分類群 タケ亜科  
地点 I 区  
試料名 8-2  
倍率 400



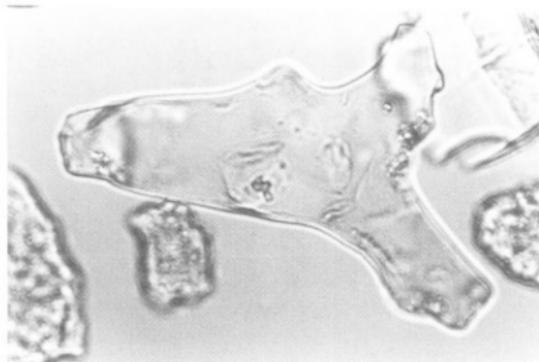
6 分類群 不明  
地点 I 区  
試料名 4-3  
倍率 400



7 分類群 樹木起源（ブナ科、シノキ属？）  
地点 I 区  
試料名 7-2  
倍率 400



8 分類群 樹木起源  
地点 I 区  
試料名 10  
倍率 400



9 分類群 樹木起源  
地点 I 区  
試料名 7-2  
倍率 400

挿図写真14 プラント・オバールの顕微鏡写真（3）

### 第3節 神戸市 上沢遺跡出土木材の樹種同定

能城修一・鈴木三男

上沢遺跡Ⅱ区は神戸市長田区六番町～七番町に位置しており、そこには縄文時代晚期から弥生時代前期初頭にかけて埋没した自然流路が見いだされた。自然流路内には16点の木材化石が見いだされ、このうち下層からのもの7点は流路内の北端から南端にわたって散在して埋積していた。中層からのもの8点のうち7点は同一の樹木の根系と考えられ、上層の1点は流路の東肩斜面に根をはっていた。

#### 樹種同定結果

出土した木材の同定用の標本は、片刃カミソリを用いて徒手切片を作製し、それをガムクロラールで封入して標本番号(HKM-1～16)を付し、永久プレパラートとした。標本は東北大学理学部生物学教室植物分類学講座に保管されている。以下にそれぞれの樹種の記載をしし同定の根拠を明らかにした。また各樹種の顕微鏡写真を挿図写真15～17に示した。

##### 1. イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch イヌガヤ科 挿図写真15-1 a～1 c (HKM-15)

やや厚壁の仮道管からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやか。晩材部は量少なく、年輪界はやや不明瞭。仮道管の内壁には、水平にちかく不揃いな、らせん肥厚がある。木部柔組織は年輪内に散在し、水平壁は結節状である。放射組織は単列で、1～5細胞くらいと背が低い。分野壁孔はトウヒ型で小さく、1分野に1～2個。

以上の形質より、この標本はイヌガヤであると同定した。

##### 2. マキ属 *Podocarpus* マキ科 挿図写真15-2 a～2 c (HKM-7)

やや厚壁の仮道管からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやか。晩材部は量少なく、年輪界はやや不明瞭。仮道管の内壁にらせん肥厚は認められない。木部柔組織は年輪内にまんべんなく散在し、水平壁はふつう平滑である。放射組織は単列で、1～10細胞くらい。分野壁孔はトウヒ型でごく小さく、1分野に1～3個。

以上の形質より、この標本はマキ科のマキ属であると同定した。

##### 3. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* プナ科 挿図写真15-3 a～3 c (HKM-3)

大型でまるいや厚壁の管孔が単独で放射状に密に配列する放射孔材。管孔の直径は不規則に変化し、年輪界は不規則で不明瞭。導管の穿孔は單一で、内部にはチローシスが観察される。木部柔組織は短接線状、量多く直径が大きい。放射組織は同性で、大型の複合状のものと、単列のものからなる。

以上の形質より、これらの標本はブナ科コナラ属アカガシ亜属であると同定した。

4. コナラ属コナラ節 枝・幹材 *Quercus* sect. *Prinus* (stem wood) ブナ科  
挿図写真16-4 a ~ 4 c (HKM-16)

大型でまるいや厚壁の管孔が単独で年輪界にそって1列にならび、晚材部では急に径を減じた薄壁で角張った管孔が火炎状に配列する環孔材。導管の穿孔は單一で、内部にはチローシスが見られる。木部柔組織は晚材部で不規則な接線状、ときに大型の結晶細胞が数珠状につらなる。放射組織は同性で、大型の複合状のものと、単列のものからなり、ときに大型の結晶が認められる。

以上の形質より、この標本はブナ科コナラ属コナラ節の枝・幹材であると同定した。

5. ヤマグワ 枝・幹材 *Morus bombycina* Koidz. (stem wood) クワ科 挿図写真16-5 a ~ 5 c (HKM-5)

大型で円形～楕円形のやや厚壁の管孔が単独あるいは2～3個複合して早材部に集合し、晩材部では徐々に径を減じた小型でまるいや管孔が単独あるいは数個複合して、ななめ接線方向ならぶ傾向をみせて散在する環孔材。導管の穿孔は單一で、内部にはチローシスが観察され、小道管の内壁には明瞭ならせん肥厚がある。放射組織は、上下端の1～2細胞のみが直立細胞からなる異性で背がたかく、8細胞幅くらいに達する。

以上の形質より、この標本はクワ科ヤマグワの枝・幹材であると同定した。

6. ヤマグワ 根材 *Morus bombycina* Koidz. (root wood) クワ科 横断面：  
挿図写真16-6 a (HKM-8), 6 b (HKM-10), 6 c (IIKM-13)

大型で円形～楕円形の管孔が単独あるいは2～3個複合して早材部に集合し、晩材部ではやや径を減じたまるいや管孔が単独あるいは数個複合して散在する環孔材 (HKM-8)。中心部では晩材がほとんど形成されず、大型の管孔が散在した散孔材となる (HKM-10, 13)。導管の穿孔は單一で、らせん肥厚はふつう認められない。年輪界は、木繊維の直径があまり変化しないため不明瞭。木繊維の直径は大きく、壁の肥厚はよわい。放射組織は異性で、成熟すると枝・幹材のものに似るが (HKM-8)、中心に近いところでは直立細胞が鞘状に配列し、不齊な紡錘形となる (IIKM-10・13)。

以上の形質より、これらの標本はクワ科ヤマグワの枝・幹材であると同定した。

7. ヤマザクラ 枝・幹材 *Prunus jamasakura* Sieb. ex Koidz. (stem wood)  
バラ科 挿図写真17-7 a ~ 7 c (HKM-4)

やや小型でまるいや管孔が単独あるいは数個複合してやや密に散在する散孔材。管孔は放

射方向から斜め接線方向につらなる傾向をみせ、管孔の直径は年輪界にむけて徐々に減少する。導管の穿孔は單一で、内壁にらせん肥厚が認められ、しばしば内部に褐色のゴム状の物質がつまっている。放射組織は同性にちかい異性で4細胞幅くらい、ときに大型の結晶細胞をもつ。

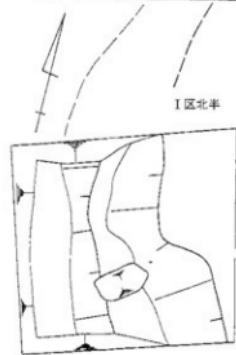
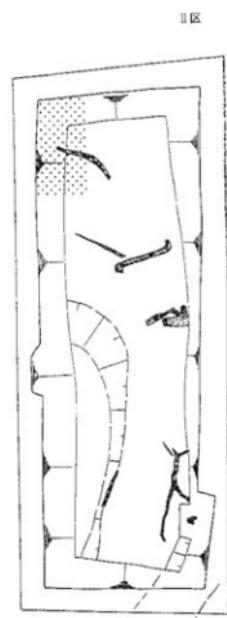
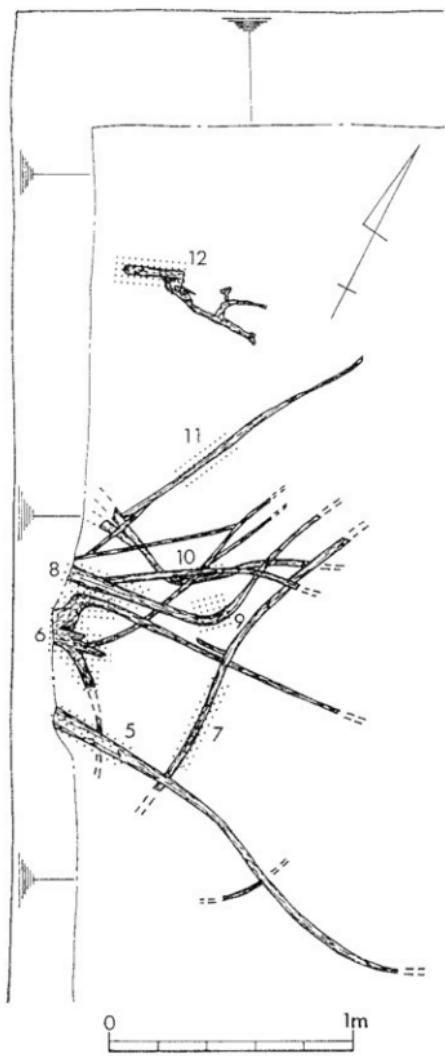
以上の形質より、この標本はバラ科サクラ属のヤマザクラの枝・幹材と同定した。

### 考察

上沢遺跡Ⅱ区の自然流路から出土した木材16点からは、6分類群が認められた。下層からは、イヌマキ、アカガシ亜属、コナラ節、ヤマグワ、およびヤマザクラが出土した。また中層の根系はヤマグワのものであり、その北側にはイスガヤが認められた。また上層のものはアカガシ亜属であった。点数がすくないため、当時の遺跡付近の植生を復元することは困難であるが、常緑広葉樹と落葉広葉樹とからなる広葉樹林が周囲に成立していたと想定される。

表6 上沢遺跡Ⅱ区出土木材化石一覧表

標木番号	樹種名	サンプル№
HKM-1	コナラ属アカガシ亜属	3
HKM-2	コナラ属アカガシ亜属	16
IHKM-3	コナラ属コナラ節	15
HKM-4	ヤマザクラ 枝・幹材	14
HKM-5	ヤマグワ 枝・幹材	1
HKM-6	コナラ属アカガシ亜属	2
HKM-7	マキ属	4
IHKM-8	ヤマグワ 根材	5
HKM-9	ヤマグワ 根材	6
HKM-10	ヤマグワ 根材	7
HKM-11	ヤマグワ 根材	8
HKM-12	ヤマグワ 根材	9
IHKM-13	ヤマグワ 根材	10
HKM-14	ヤマグワ 根材	11
HKM-15	イヌガヤ	12
HKM-16	コナラ属コナラ節	13



0 10m

図52 樹種同定試料採取位置図(1)

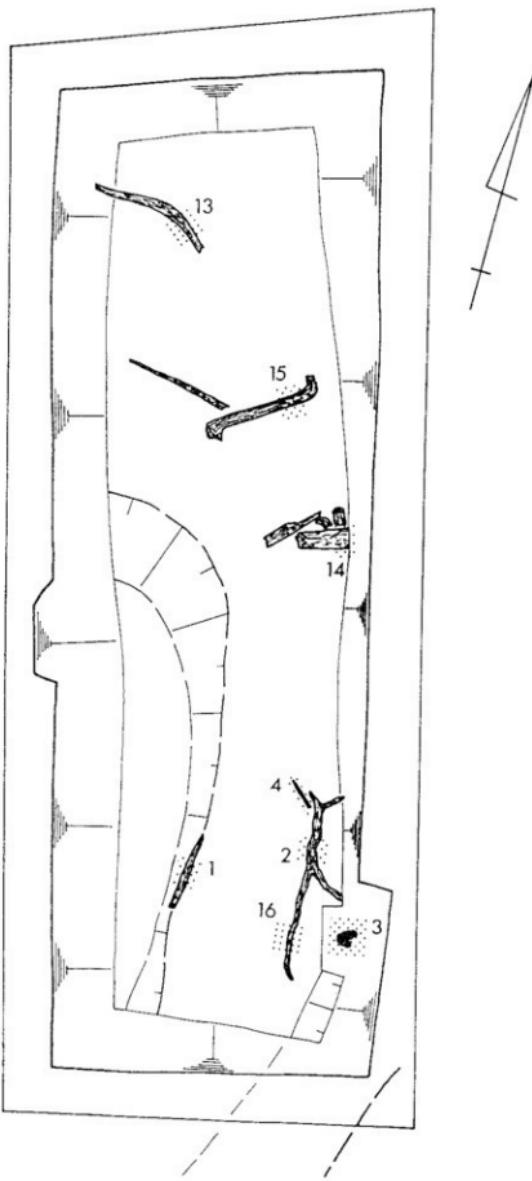
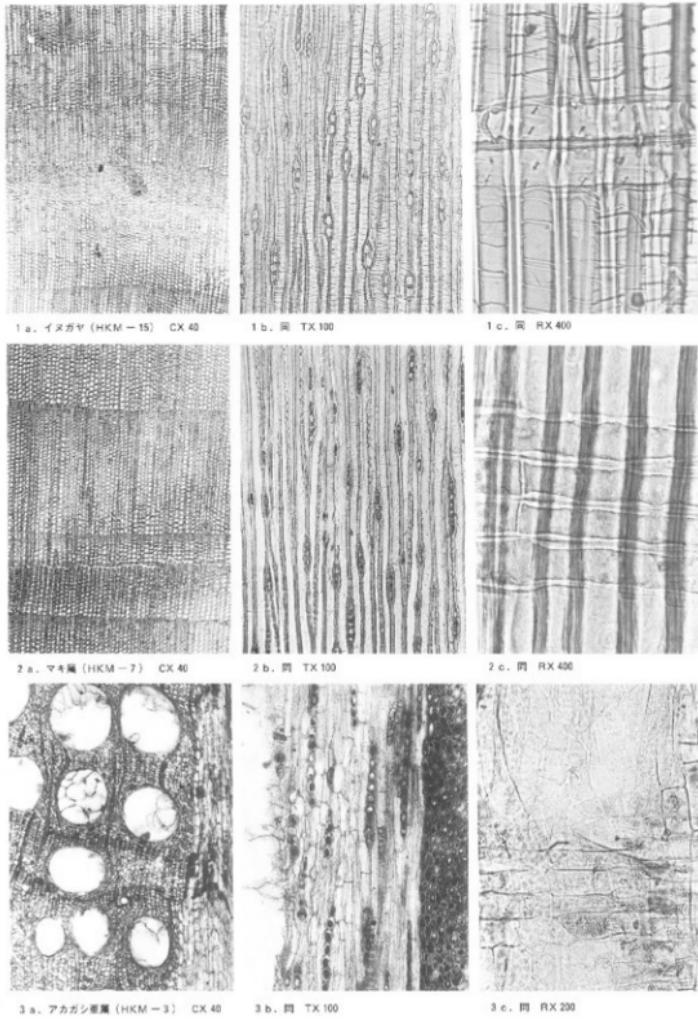
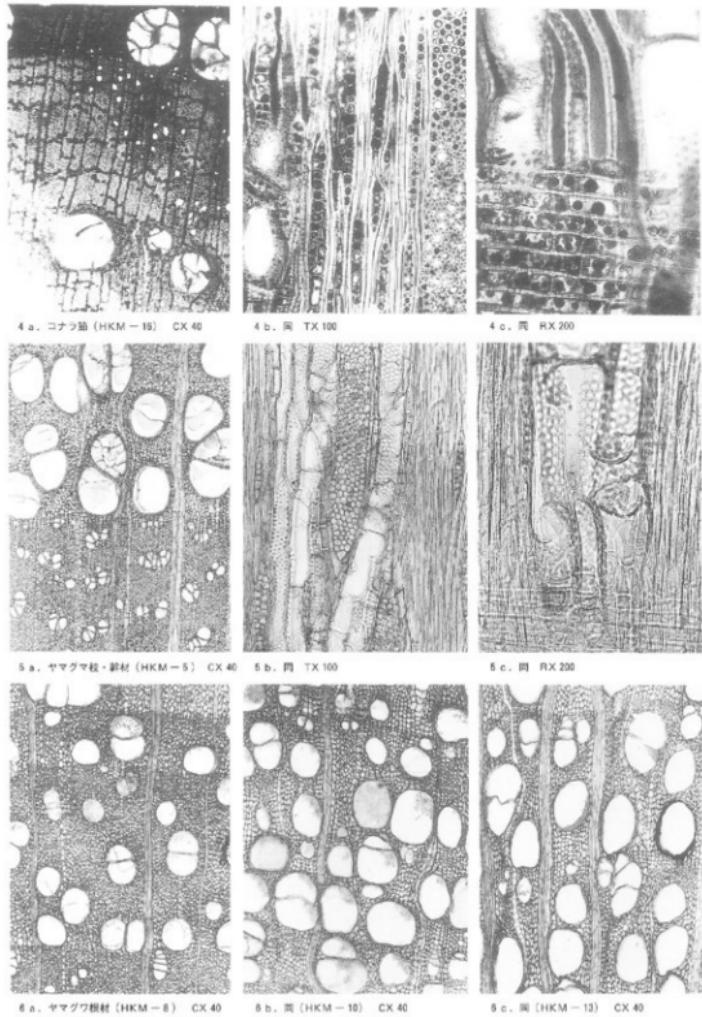


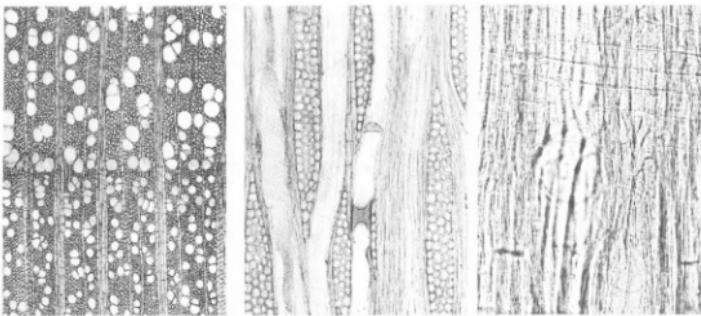
図53 樹種同定試料採取位置図（2）



挿図写真15 上沢遺跡Ⅱ区出土木材化石の顕微鏡写真（1）



挿図写真16 上沢遺跡II区出土木材化石の顕微鏡写真(2)



7a. ヤマザクラ (HKM-15) CX 40

7b. 同 TX 100

7c. 同 RX 200

掲図写真17 上沢遺跡Ⅱ区出土木材化石の顕微鏡写真（3）

## 第4節 神戸市 上沢遺跡における花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

上沢遺跡は、神戸市の南西部長田区六番町1丁目他に所在する遺跡である。本遺跡で確認された2面の遺構面のうち、第2遺構面で検出された流路からは、縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての遺物（土器）が出土している。縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての時期は水稻栽培の開始時期であることから、水稻栽培の有無について検証することは、重要な問題である。そこで、本調査は、花粉分析の手法を用いて、当時の植生環境や水稻栽培の検証を行うことを目的として行った。

### 1. 試料

試料は、流路内の中央断面より約30cmごとに5つのブロックに分割して採取された。なお、試料はそれぞれ上と下が約5cm重複するように採取されている（図48・54参照）。また、流路の地山と思われる堆積物については、別に採取された。花粉分析に用いた試料は、当社にて上層記載を行い、堆積物の状態などを考慮に入れて5つのブロックから各2点、地山と思われる堆積物から1点、計11点を採取した（図55参照）。

### 2. 分析方法および結果の表示法

花粉・胞子化石の抽出は、以下に示した方法で行った。

試料を湿重で10~15g秤量し、フッ化水素（HF）処理により試料中の珪酸質の溶解と試料の泥化を行う。次に重液（ZnBr<sub>2</sub> 比重2.2）を用いて鉱物質と有機物を分離させ、有機物を濃集する。その有機物を0.25mmのふるいに通し、大型の植物遺体を除去した後、アセトリシス処理を行い植物遺体中のセルロースを加水分解させる。最後に KOH 処理により腐植酸の溶解を行う。

処理後の残渣の一部をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、その中に検出した種類（taxa）について同定・計数した。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは種類間の区別が困難なものである。

### 3. 結果

本調査で分析した各試料とも、花粉化石・シダ類胞子化石の保存状態が極めて悪く、破損・溶解がかなり進んでおり（挿図写真18）、検出した種類・数ともに少なかった（表7）。したがって、イネ属の同定をするには不適と判断したため、イネ属同定は行わなかった。

#### 4. 考察

本調査によって分析した全試料からは、花粉・胞子化石がほとんど検出されなかった。この原因としては、まず好気的な環境下による酸化や微生物などの影響により花粉化石が分解してしまったことが考えられる。また、試料は砂質なものが多く、20~55 $\mu$ の花粉化石は16 $\mu$ 以下の微粒子と同じ挙動をとる（松下、1981）ことから、花粉化石が粘土などの微粒子とともに淘汰されてしまったことも考えられる。一般に、被子植物より裸子植物の花粉やシダ類胞子の方が、風化・腐敗に対して抵抗が強い。そのため、花粉化石の保存が悪く落葉樹の半数以上に風化の痕跡が見られるような場合には、その試料は花粉分析には不適（徳永・山内、1971）とされている。したがって、今回の分析結果から古植生を復元することは差し控えた。

#### 5.まとめ

今回分析した試料中に、花粉・胞子化石がほとんど検出されなかったため、稻作についてや周辺の植生に関しての考察は出来なかった。今後、本遺跡周辺の植生を検討するに当たっては、閉鎖系の水域であると思われるような湿地の堆積物を分析対象とすることが望まれる。

#### 引用文献

- 徳永重元・山内輝子（1971），化石の研究法 1.4 花粉・胞子，共立出版，P.50~73。  
松下まりこ（1981），播磨灘表面堆積物の花粉分析——内海域における花粉・胞子の動態—，第四紀研究，21，P.15~22。

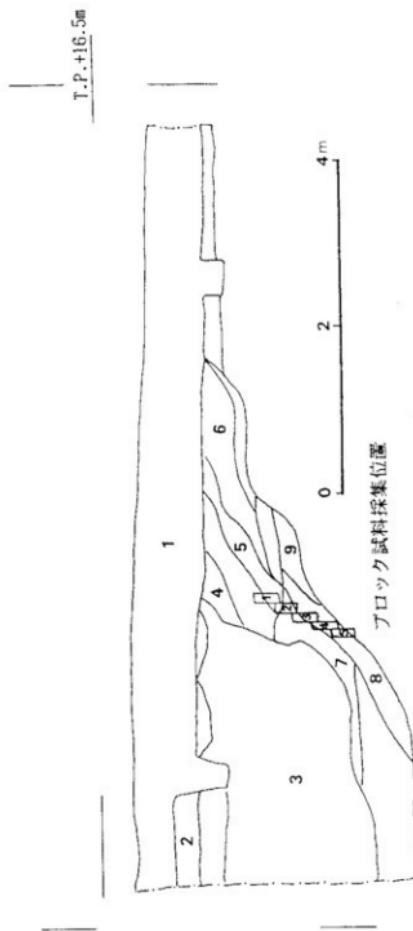


図54 花粉分析試料採取位置断面図

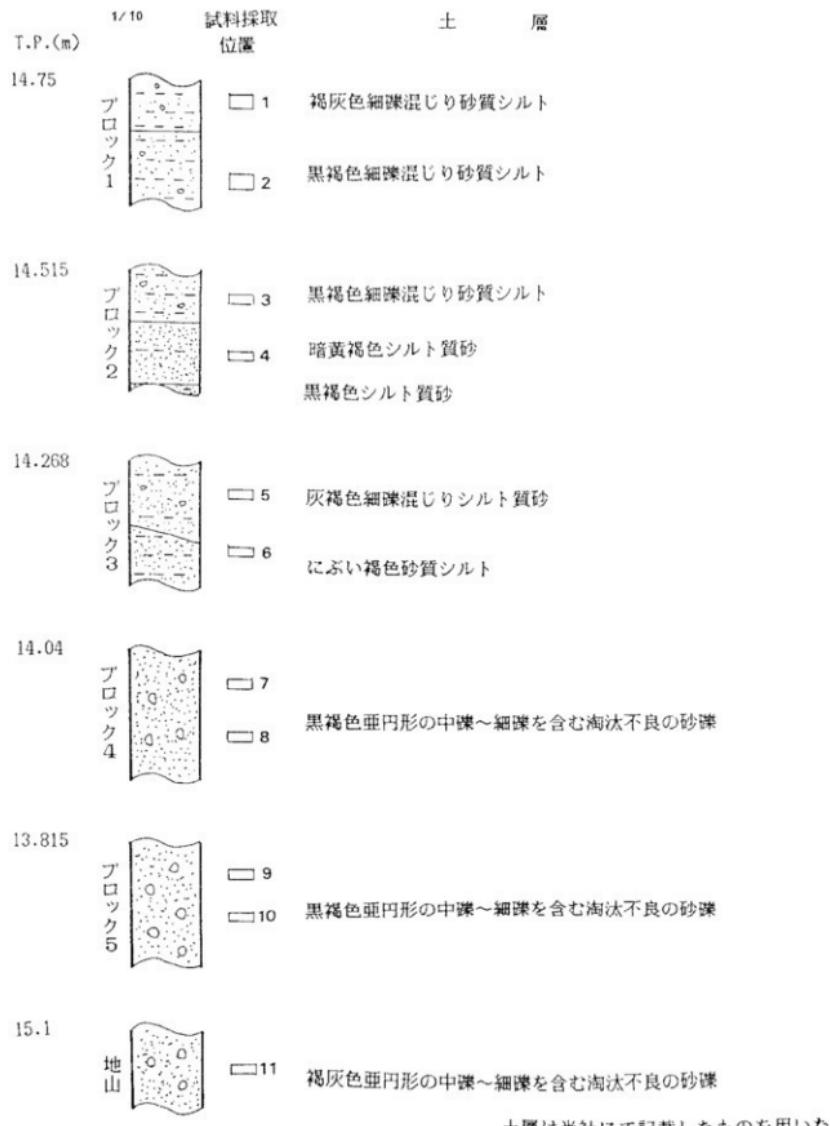
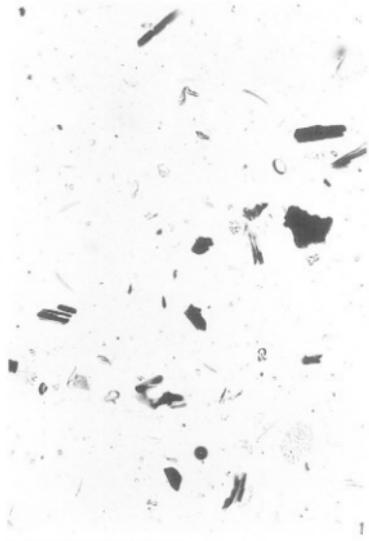


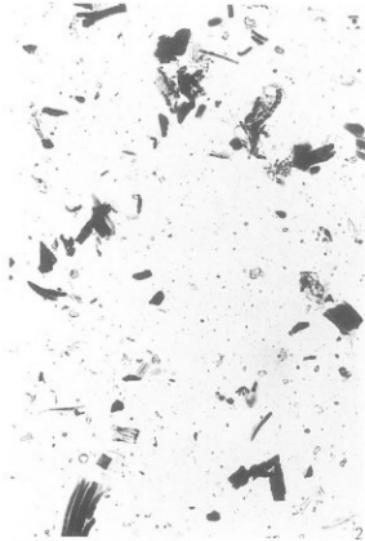
図55 花粉分析試料採取位置図

表7 I区北半花粉分析結果

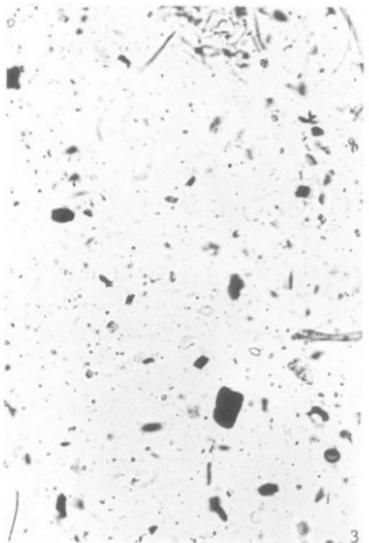
種類(Taxa)	試料番号	月									
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
木本花粉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
モミ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
マツ属	—	1	1	—	—	—	—	—	—	2	1
コウヤマキ属	—	1	1	—	—	—	—	—	—	1	—
ヤマモモ属	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
クマシデ属—アサダ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ハンノキ属	5	—	—	—	2	—	—	—	—	1	—
ブナ属	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
コナラ属コナラ亜属	2	—	—	3	—	—	—	—	2	—	—
コナラ属アカガシ属	3	—	—	—	—	—	—	1	15	—	—
クリ属—シイノキ属	5	—	—	1	4	—	—	14	—	4	6
ニレ属—ケヤキ属	2	—	—	1	—	—	1	—	—	—	—
カラスザンショウ属	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
シラキ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—



1 状況写真 試料番号 1 倍率 50



2 状況写真 試料番号 4 倍率 50



3 状況写真 試料番号 8 倍率 50



4 状況写真 試料番号 11 倍率 50

100 $\mu$

挿図写真18 花粉分析試料顕微鏡写真

## 第Ⅵ章 まとめ

### 第1節 弥生土器を共伴する突帯紋土器について

#### (1) 神戸市内の突帯紋土器出土遺跡

分布状況 一覧表で明らかなとおり、神戸市内では、突帯紋土器の出土する遺跡は現状で、24遺跡である。

以下表8及び図56に基づき、神戸市内の分布状況について見てゆきたい。

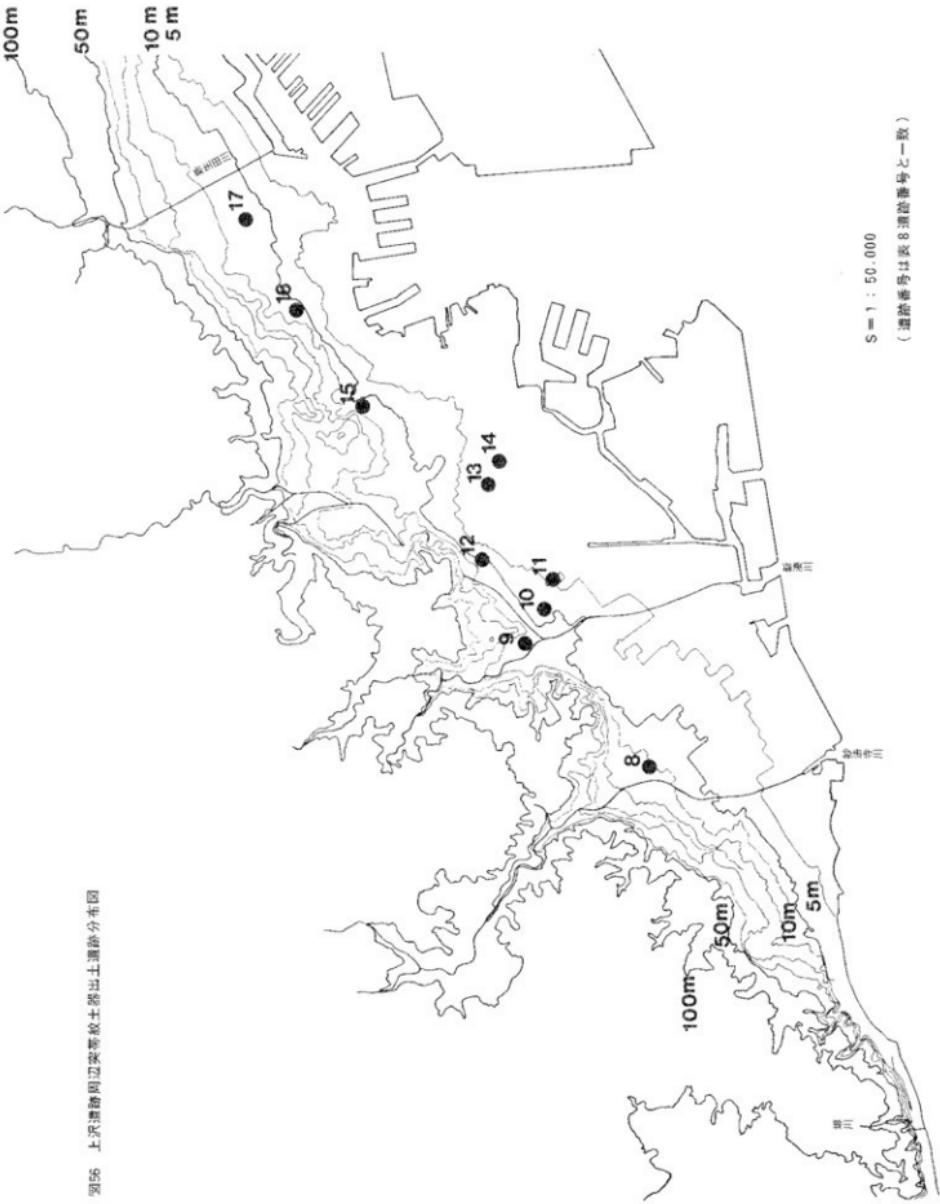
表8 神戸市内突帯紋土器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	立地と標高 (m)	型式			備考
				漫IV	船橋	長原	
1	養田	西区押部谷町養田	低位段丘55				
2	堅田	西区平野町堅田	低位段丘55		○		
3	玉津田中	西区玉津町田中	沖積地 18		○	I古～中～	
4	西戸田	西区平野町西戸田	低位段丘35				
5	印路	西区平野町中津	氾濫原 22	○			
6	大歳山	垂水区西舞子	中位段丘30		○		
7	垂水・日向	垂水区日向	沖積地 4				
8	戎町	須磨区戎町	沖積地 10	?	○		I新
9	長田神社境内	長田区長田町	沖積地 14	○	○		
10	五番町	長田区五番町	扇状地 5		○		
11	三番町	長田区三番町	扇状地 4		○		
12	上沢	長田区六番町	扇状地 16		○	I古～中	
13	大開	兵庫区大開通	沖積地 4	○	○	I古～中	
14	三川口町	兵庫区三川口町	沖積地 3		○		
15	宇治川南	中央区楠町	低位段丘16	○	○	○	I古～中
16	旧三宮駅構内	中央区北長浜通	低位段丘12				
17	雲井	中央区雲井通	沖積地 12	○	○	○	I古～中
18	篠原	灘区篠原中町ほか	扇状地 60	○	○		
19	篠原南町	灘区篠原中町	扇状地 45	○			
20	北青木	東灘区北青木	砂堆 2				I中
21	本山	東灘区本山中町	沖積地 8		○	○	I中
22	本庄町	東灘区本庄村	砂堆 4			○	
23	森北町	東灘区森北町	扇状地 30		○		
24	塩田	北区道場町塩田	沖積地 160				

( 通航番号は表 8・測定番号と一致 )

S = 1 : 50,000

図56 上流清掃用沿岸砂防土堤出土測定分布図



塩田遺跡（No.24）を除き、明石川流域と六甲山南麓とに大きくその分布がわかれ。そして突帯紋土器出土遺跡が、以後弥生時代へと継続する遺跡は明石川流域では、現状で玉津・田中遺跡（No.3）のみであることがわかる。日を転じて六甲山南麓では、弥生時代へと継続する遺跡が明石川流域とは異なり数多い（No.12・13・15・17）ことがわかる。地域間の相違であろうか（図56参照）。

六甲山南麓の上沢遺跡の存在する西浜西部域での分布状況は、標高10m前後の扇状地等に東西に展開している。丘陵上に存在する縄文時代遺跡と一定程度治水を成し得た弥生時代遺跡の中間的な位置に存在するとみるには、穿ったみかたであろうか。

このような中で、大開遺跡（No.13）では畿内第1様式古段階の環濠集落が確認されており、弥生土器と共に突帯紋土器の評価についての一助となってきた。

今回報告した上沢遺跡の突帯紋土器については、この大開遺跡と直線距離にして約1kmしかなく、密接な関係が窺われる。

神戸市内の突帯紋土器出土遺跡 表8引用文献（文献番号は表8遺跡番号と一致する。）

1. 東喜代秀「養田遺跡」『昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
2. 山口英正・中村健一「堅田遺跡」『昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
3. 山本三郎編『玉津田中遺跡調査概要1』兵庫県教育委員会 1984
4. 口野博史「西戸田遺跡」『昭和57年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1985 その後の整理作業で弥生時代前期土坑より伴出していることが判明した。
5. 黒田恭正「印路遺跡」『平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1991
6. 直良信夫「播磨国明石郡垂水村山田大歳山遺跡の研究」直良石器時代文化研究所所報 第1輯 1926
- 中村善則「播磨大歳山遺跡 1—縄文土器—」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 1986
7. 谷 正俊編『垂水・日向遺跡第1・3・4次』神戸市教育委員会 1992
8. 山本雅和編『我町遺跡第1次発掘調査概報』神戸市教育委員会 1989
9. 黒田恭正編『長田神社境内遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会 1990
10. 丸山 潤・丹治康明「五番町遺跡出土の土器」「楠・荒田町遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1980
11. 口野博史他「三番町遺跡」『昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
12. 本報告
13. 前田佳久編『大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1993
14. 山本雅和・三川口町遺跡』『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988
15. 丹治康明「六甲山南麓における縄文時代の動向—最近の調査成果より—」『神戸の歴史』第13号神戸市長総局 1985

16. 菅本宏明「旧三宮駅構内遺跡」『平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1993
17. 丹治康明編『雲井遺跡第1次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1991
18. 下條信行・定森秀大編『神戸市灘区 篠原A遺跡発掘調査報告書』助古代学協会 1984
19. 山本雅和『篠原南町遺跡』『平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
20. 小川良太・山下史朗『北青木遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 1986
21. 南 博史編『神戸市東灘区 本山遺跡発掘調査報告書』助古代学協会 1984
22. 片岡 豊編『神戸市東灘区 本庄村遺跡発掘調査報告書』助古代学協会 1985
23. 黒田恭正「森北町遺跡」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988
24. 黒田恭正「塩田遺跡」『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1987
25. 遺跡の立地については、前葉和子「玉津田中遺跡周辺の地形環境」「玉津田中遺跡調査概要 I」兵庫県教育委員会 1984・高橋 学「戎町遺跡の地形環境一湊川・妙法寺川流域の地形環境 I—」「神戸市須磨区 戎町遺跡第1次発掘調査概報」神戸市教育委員会 1989・高橋 学「芦屋川・住吉川流域の地形環境 I—」「北青木遺跡発掘調査報告書」兵庫県教育委員会 1986などを参考とした。

## (2) 突帯紋土器について

表3・4をもとに遺物について、第IV章で述べた点も含めていま少し言及したい。

全体の傾向としては、口縁部、体部を含めてB類に属するものは、流路1では0点で、流路2では3点と少ない。刻み目については、無刻みのものが最も多く、流路1では3割以上、流路2では半数を占める。無刻みにつぐ刻み目として、小D字形が共通して多くそれぞれ2割程度を占める。ついでO字形、小O字形が1割強となり、D字形は1割弱となり共にその大勢を占めない。さらに、58のようなものもあるが、船橋遺跡などに見られるようなD字形は、認められない。

また口縁部突帯の形態では、A2~4類が7割以上を占める。

胎土については、実測図に示した総数87点のうち、搬入品は僅か5点に過ぎず、花崗岩片を多く含む粘土で作られた在地的な傾向の強い遺物と考えられる。

個別の遺物については、59の刻み目は、D字形、小O字形、線状に、60は、D字形、小D字形、小O字形に観察される。刻み方に対する追化傾向の表出であろうか。

類例として、刻み目に対する見解は異なるが、雲井遺跡No.102は、報告で示された編年観から、突帯紋土器の分類で最も新しいⅦ類に属するものである。また雲井遺跡では、在地的なものについては、刻み日の細かいことが特徴的であるという指摘がある。

土器の地域性、在地性という点では、西播磨地域では姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡、西摂地域では伊丹市口酒井遺跡<sup>(1)</sup>での分析があげられる。

丁・柳ヶ瀬遺跡では、在地の突帯の成立過程と刻み目の消長を突帯の加節性の観点から

分析が行われている。

口酒井遺跡では、在地的な土器群と他地域の胎土をもつ土器群との比較対照して分析を行っている。これらの両遺跡の分析は当遺跡について、多くのことを示唆している。

以上述べた点から、上沢遺跡での分類について繰り返すとA 2～4類は、突帯は丸みを持った三角形か蒲鉾形の断面で、口縁端部より下がって突帯を施す。

上沢遺跡A 2～4類に当てはめられると考えられるものは、雲井遺跡ではVI～IX類、口酒井遺跡では在地系の胎土A深鉢形土器群口縁凸D類であろうか。

上沢遺跡の突帯紋土器と弥生土器は、流路からの出土遺物であり層位的な取り上げはできず、総体として捉える。このことを前提として、雲井遺跡、口酒井遺跡での分析、縦年観に照合してみると、船橋・口酒井・長原<sup>(5)(6)</sup>という変遷をたどるならば、船橋期に属するものではなく、長原併行、長原以降の時期を想定することができる。

### (3) 弥生土器について

弥生土器 72・74は、口頭部界と頸体部界とに段をもつ。口頭部界の段は口縁部外面に粘土紐を足して肥厚させ形成するものである。頸体部界のそれも粘土紐の接合痕を段として残すものである。

弥生時代前期古～中段階の壺の調整については、その多くはナデ、横方向のヘラミガキもしくは斜め方向のヘラミガキを施す。この中で72・74は、縦方向のヘラミガキを施す特徴的な土器である。

以上のような特徴をもつものとして大開遺跡No 596 があげられる。初期環濠内の土坑から出土である。報告によれば、初期環濠に占段階の時期を与えており、遺物のみから判断すれば、大開遺跡とそう大差ない時期、もしくは遺物のみとりあげればより古相を示すものと位置付けられよう。

また流路1・2から出土した弥生土器の中で、最も新しい特徴を示すものは、89の貼り付け突帯を持つ壺片1点である。他にⅢ区流路2最上層からの出土で、貼り付け突帯かと思われる壺片1点があるのみである。これらを除けば、全体として中段階より新しくなる要素はないと考えられる。

瓢型土器 88については、復元される径や器壁の厚さなどから、瓢型土器として、復元案を図示してみた。復元した高さは18.5cm、最大径は9.8cmである。

器種としても少し時期的に下がることを考えれば、無頸壺や水差の可能性も残している。しかしながら前述したように流路1・2より出土した土器を総体として前期中段階までと捉えるならば、これらの器種はその蓋然性は低いものと考えられる。

次に紋様は直線で描かれていることから、所謂木葉紋の範疇で捉えるものではなく、山形紋もしくは綾杉紋と捉えるほうが妥当であろうか。しかしながら方形区画を意識した描法は山形紋などの描かれ方とは異なる。88については、方形区画内の四隅を意識して斜め方向に描く方法は、木葉紋の一種として捉えることも可能である。

この仮定のもとに工楽氏の分類によれば、区画の描法は、+木葉紋の分類にあたる。そして方形区画内での弧線の线条より+2、+3の分類を行い、この分類以外に香川県伊喜

末遺跡例 (+9?) をとり上げている。

弧線と直線という決定的な差異はあるが、+7~9条と多条という点で88と、共通するものがある。

また区画線を半区画分すらし、同様の木葉紋を描く例や、異なる紋様を描く例もある。

3点目として88の時期を前述のように前期中段階までと捉えると、工賀氏の述べる「遠賀川式土器の段階に限定できる」時期とあまり齟齬をきたさないようである。

#### 石器

石器については、縄文文化的な傾向を示す石皿と、弥生文化的な傾向を示す石庖丁と他に綠泥片岩片が出土している。用途は不明であるが、両文化ともに用いる石材である。

突帯紋土器と弥生土器の共伴とともに当該期の複雑な状況を象徴的に示す遺物であろう。

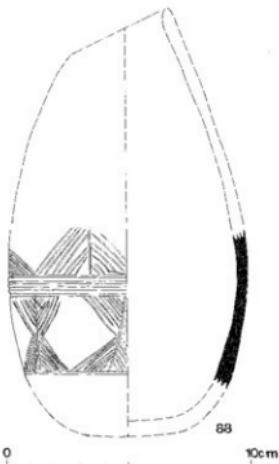


図57 1区・II区発掘1出土瓢形土器復元図

#### (4) 小 結

最後に図56にあげた遺跡の時期的変遷について述べこの項のまとめとする。

戎町遺跡は、長原期に属する上器は存在するものの、弥生土器については前期新段階の時期へと時間的な空白がある。長田神社境内遺跡は、長原期以降途絶する。猿原遺跡も同様である。

宇治川南遺跡・雲井遺跡は滋賀里Ⅲ期から長原期までの型式が追え、出土量の多寡はあるものの前期古段階から新段階へと継続する。

大開遺跡・上沢遺跡は、長原期および前期古段階で出現し前期新段階で途絶する。

遺跡での遺物の出土状況や構造の存否による本質的な部分を差し置いて、変遷状況を乱雑に述べた。今後より詳細な遺物の分析と上記の問題点を踏まえ検討したい。(上野)

## 第2節 弥生時代後期の土器について

既に第IV章第3節において弥生時代後期の土器についてみたが、ここでIII区SK01出土土器を再度取り上げ弥生時代後期の土器について考えてみたい。

SK01出土土器は埋土が分層できることから、大きく上・下層のまとまりとしてとらえることが可能である。ではそれぞれの土器についてみた場合に、時期的な前後関係について指摘できるかどうかが重要な問題点となってくる。その関係が証明できるとき、層位的にも型式的にも新旧関係を立証できることになる。

各々の土器についてみる前にまず、SK01出土土器全体の縦年的位置づけについてみていくことにする。

壺についてみた場合、二重口縁壺は上・下層のいずれの層位からも出土していない。長頸壺は下層のみだが少量出土している。高杯は口縁部が外反するタイプのものが大半で、楕円形の坏部をもつ確実な例は1点である。手造り形土器はその粗形となる鉢もふくめて1点も出土していない。これらの事項を考え合わせると、SK 01出土土器は総体として、弥生時代後期後半の中でも前半に近い時期の所産である可能性が高い。

次に器種ごとにみていくことにする。

壺

壺はFを除く各種が出土しているが、B<sub>1</sub>を除くと上・下層両方で出土する形態が見当たらない。このため各種ごとにその消長をたどることは困難である。

甕

器形的な特徴からみると、下層出土の甕は体部最大径を中位にもつものが大半を占めるのに対して、上層出土の甕は上位に最大径をもつ肩の張った器形のものが主体を占める。

調整技法からみると、下層出土のものは外面はタタキを残すものが主体で一部にハケやヘラミガキを施している。上層出土のものは外面のタタキメをナデ消したりハケで消したものがみられるようになり、タタキのなかには綾杉紋原体のものがわずかにがらみられるようになる。ただし、下層出土の183は体部内面の全体にヘラケズリを施し、体部が球形を指向しており新しい傾向が見て取れる。

綾杉紋タタキ 甕の体部に綾杉紋タタキを施すものがあることについて既に触れたが、ここで少し詳しく触ることにする。このタイプの土器は、大和・山城・紀伊・和泉・播磨の地域で弥生時代後期から古墳時代前期の時期にみられる。神戸市内では当遺跡の西方に位置する長田<sup>(1a)</sup>神社境内遺跡において出土が確認されている。器種は長田神社境内遺跡では大半が甕で、甕底部に1点みられる。当遺跡でも甕及び壺底部の例がみられ、その他に鉢及びIV区 SD 01ではミニチュア土器の鉢に類似がある。鉢については甕を分割成形する際の擬口縁をそのまま生かして鉢としたものと思われ、他のタタキと同様に主に甕を主体として用いられた製作技法であることがわかる。

現在のところ神戸市内でこの種のタタキメをもつ出土例は長田神社境内遺跡と当遺跡のみで確認されている。出土土器全体に占める割合は非常に低く、近接する2遺跡でしか出土していないことをどう評価するか今後の課題である。また、長田神社境内遺跡例のタタキ原体は中央に軸線をもつものであるに対し、当遺跡のものは軸線をもたない。このタタキ原体の違いや、他のタタキメに比べて装飾的な意味合いが強いものなのかどうかなどについても今後検討する必要がある。

甕 底部

下層出土土器のうち、底部の形態が判明するものは図化していないものも含めて41点で、突出しない平底（A類）11点、突出気味の体部下半が丸みをもつ平底のもの（B類）7点、突出する平底（C類）12点、外方に張り出した分厚い円盤状のもの（D類）8点、上げ底（F類）3点がある。

上層についてみると、甕底部の残存するものは15点と資料数が減少する。それらは前述のA類4点、B類7点、C類2点、F類2点である。

なお、全底部数のうち底部外面に木葉痕を残す例をみると、下層では4点で、うち1点はタタキメなどで木葉痕をすり消している。上層では1点であり、他にタタキメを残すものが1点ある。下層でタタキメなどで木葉痕をすり消すものがあり、上層でタタキメのみ

を残すものがあることから上層の方に新しい要素を指摘できるのではないだろうか。

鉢にはA・B・C 3種があるが、資料数は少ない。ただし、A類については口縁部形態から変化の様子を追うことができる。つまり、頸部からやや内湾気味に聞くものから外反して開くものを経て大きく外傾するものへと変化する。縁部も面をもつものからやや丸みを帯びるものへと変化するようである。B種は下層で2点、上層で1点しか出土していないため、資料的な問題はあるが、下層では大・小2種があるのに比べ、下層では小型のものの出土である。上層出土のものは体部がやや開いてたちあがり、底部も突出するようになる。鉢Cは上層では出土していないのでその変遷については不明である。

高杯

資料数が少なく、器形の全容を知ることのできるものは上層・下層各2例ずつである。下層では杯体部と杯口縁部のなす角度が130～140度のA<sub>1</sub>と150度前後のA<sub>2</sub>及びA<sub>3</sub>があるが、上層ではA<sub>1</sub>とBの2種が出土している。A<sub>1</sub>の資料が増えていることをみれば上層出土のものにやや新しい要素を見いだすこともできるが、下層出土のA<sub>2</sub>類の65は外反の角度が大きく脚部も中実で、挿入付加法を採用しているなど新しい要素を含んでいる。上層出土土器のなかには腕形の杯部をもつB類が含まれることなど古い要素も含まれており、高杯に関しては単純に前後関係を示すことはできない。なお、円板充填法は不確実だが、上・下層ともに各1例ずつみられる。

以上のように、上層・下層間の出土土器については明確な前後関係は認められない。土器を殆ど包含しない第2層を間層として扱むものの、SK 01出土土器全体が後期後半の前半に近い時期に位置づけできることから考えても時間的な間隙は僅かなものであったといえるだろう。しかしながら個々の要素を考えたとき、上層の土器に僅かながら新しい要素が含まれていることも事実であり、今後の資料の増加を待って当該期の土器についての検討を加える必要がある。また、最後に土器の胎土についてであるが、SK 01出土土器を含めて弥生時代後期の土器の胎土は石英・長石・クサリ礫を多く含むもので、肉眼観察の上では概ね在地産の土器と考えられる。ただし、当該期の他の遺跡の土器に比べるとハケを多様している点など、製作技法の点では他地域の影響とも考えられる要素も含んでいる。この点についても今後の資料の増加を待って検討したい。

(阿部)

### 第3節 平安時代後半の土器について

平安時代後半に属する土器としては、既に第Ⅳ章第4節においてⅢ区切り土部分出土土器をとりあげた。切り土部分の調査において出土したものは、同調査区の北西部で、遺物包含層の暗褐色砂質土から出土したもので、遺構出土資料に比べると資料の一括性に欠けるものの、当該期に属する遺物が比較的良好な状態で出土している。出土遺物には須恵器碗・壺・甕、土師器羽釜、皿、黒色土器碗がある。ここでは再度同調査区出土遺物を取りあげ、当該期の土器について若干の考察をおこなう。

須恵器

須恵器については、碗、甕、無頭壺、双耳壺などが出土した。

椀

椀は小破片が数点出土するのみで、図化できるものもなかった。口縁部の特徴などから判断するといわゆる東播系須恵器と呼ばれるもので、神出・万葉池1号窯出土資料とは

は同時期のものであろう。11世紀前半から中頃にかけての時期に位置づけられる。

甕

310は頸部がやや開き気味に外反し口縁端部は屈曲させて内面を底ませ、さらに上方につまみあげている。このような特徴をもつ口縁部は、神戸市住吉宮町遺跡第11次調査 SD 01出土資料の中にあり、東播系須恵器として11世紀中葉に位置づけている。体部外面に平行タタキを施し、内面をすり消している手法も類似する。310も同時期に位置づけられる。

双耳壺

双耳壺は、吉備から西摂北部にかけての生産遺跡や集落遺跡で出土するもので、神戸市でも神出古窯址群や長田神社境内遺跡などでの出土が確認されている。本遺跡出土の311は口縁部や把手を欠くため器形の面から時期決定することはやや困難な面もあるが、肩の張った器形と突帯の位置、2条の突帯間の距離などに特徴がある。このような特徴をもつものとしては、西脇市金城池1号窯址出土資料中に類例がある。金城池1号窯の時期は11世紀前半と考えられており、本遺跡の311についても同時期と考えられる。

無頸壺

神戸市域ではあまり類似資料に恵まれていないため、詳細な時期については不明である。参考資料としては、三田市相野古窯跡群では当該器種を壺C<sup>(22)</sup>として分類している。この壺C<sup>(22)</sup>は9世紀代～11世紀代において生産されている。本遺跡出土の312はこのうちⅡ期(10世紀第1四半紀)に位置づけられる古城山1号窯出土資料と口縁部のたちあがりと肩の張った器形に類似点が認められる。しかしながら、古城山1号窯出土資料は外面のタタキメがみられず、手法的な違いも見られる。他の出土遺物の時期とも隔たりがあり、今後の資料の増加を待ちたい。

黒色土器

從来神戸市域では旧播磨國が延喜式に須恵器調貢国として記載されているように、平安時代末以降須恵器を主たる供膳具として生産・使用しており、黒色土器の出土があまり確認されていない状況であった。わずかに神楽遺跡や日暮遺跡等で内黒のA類の椀が少量出土しているのが知られるのみであった。ところが、近年山陽道須磨駅家に推定される大田町遺跡で10世紀代の黒色土器A類の良好な資料が確認されたり、六甲北有料道路建設に伴う上小名田遺跡の調査や旧三宮駅構内遺跡、住吉宮町遺跡などの調査において同B類の出土が確認され、資料の増加が見られるようになった。

今回出土したB類の椀308は、橋本久和氏の分類ではⅡ b タイプ、森隆氏の分類によると畿内系第IV類にあたるものである。形態的には上小名田遺跡 SK 617 出土資料と類似する。底部外面のヘラミガキの有無について不明な点があり、やや古くなる可能性もあるが、11世紀前半のものと考えられる。

以上みてきたように、Ⅲ区切り上部分出土資料は概ね11世紀前半から中頃の時期に位置づけられる。遺物包含層中出土であるが、限られた時期のものから構成されており、当該期の好資料と言えるであろう。

(阿部)

#### 第4節 むすびにかえて

繩紋土器と速賀川式土器の共伴は数年來注目をあつめ、様々な論議と共に数多くの成果がある。神戸市においても第1節でも述べたように、多くの蓄積がある。さらに長原則に相前後する時期の在地性、地域性を分析する研究成果がある。

当報告では成しえなかつたが、これまでの資料の集積によって、長原式に併行もしくはこれに相前後する時期の形式の設定を模索する可能性が、現状では生まれているという点を指摘しておきたい。

次に突帯紋土器については長原式に併行する時期、弥生土器については前期前半（古段階～中段階前半）という時期を考えておきたい。そして当調査では、弥生時代前期前半以後後期の遺構が出現するまでの間、遺跡は途絶する。当然のことながら遺跡の広がりが予測されるが、短期間の遺物のみを含む流路の存在は、このことを示唆するものと考える。

このように上沢遺跡は、縄紋時代終末期と弥生時代初期という複雑な時期を象徴しかつ特徴づける遺跡である。当遺跡と同じく途絶する大門遺跡の関連を踏まえ、今後の検討課題としたい。

再び繰り返すこととなるが、縄紋時代から弥生時代にかけて稻作文化の波及は、それを伝えた人々、伝えられた当時の人々にとって生活の大きな変革期であったと考えられる。当然自分たちを取り巻く環境に対しても急激なものでないにしても、その働きかけ方も異なるものとなつたはずである。このような観点から当時の環境を知る手段としてプランツ・オパール分析、花粉分析、出土木材の樹種同定を自然科学的な視点から可能な分析を試みることとした。

プランツ・オパール分析では、微量ながらも稻のプランツ・オパールを検出することができた。99の土器のように初の圧痕と思われるものが観察され、六甲山南麓での稻作文化の始まりを示す資料が蓄積されつつある。

花粉分析では、採取したサンプルは砂を多く含み花粉の流失が考えられ、残念ながら環境復元にいたる良好な結果を得ることができなかつた。

植物遺体の樹種同定では、サンプル数が少ないながらも広葉樹林が成立していたという結果がえられた。

地形的には斜面地で、弥生時代前期の段階でどれほどの稲作を展開したかは、述べるべき材料はないが、遺物の出土等から一定程度の生活の定着があったことは想定できよう。

次に弥生時代後期の遺構の存在が示すように、当時の人々の生活の定着があったことが窺える。同時期の遺跡は、第Ⅱ章でも述べたように当遺跡周辺にもひろがりをもって展開されており、一定の農耕社会が営まれていたことが考えられる。他地域からの影響と周辺遺跡との関連性をもちろん、在地的な様相も併せ持つ遺跡である。

また縄紋時代晚期から弥生時代前期及び弥生時代後期の遺跡は、調査地点の西もしくは西北方向にそのひろがりが予測される。

古代に属すると考えられる瓦片や11世紀代の須恵器の壺の出土は、高燥な地形を背景とした寺院などの特殊な遺跡が存在する可能性を示唆するものであろう。 (口野)

## 註

- (1) 佐原 真也『船橋II』平安学園考古学クラブ 1962
- (2) 表8 文献17
- (3) 岡崎正雄・深井明比古編『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 1985

- (4) 南 博史他『口酒井遺跡—第11次発掘調査報告—』伊丹市教育委員会助古代學協会 1988
- (5) 長原遺跡の資料における新旧もしくは細分といった点の議論がある。
- 家根祥多『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』神戸大阪市文化財協会 1982
- (6) 春成秀爾『弥生時代の始まり』東京大学出版会 1990
- (7) 大隅遺跡例の他に段と縱方向のヘラミガキをもつ類例として皆見によれば、以下に示すような例がある。縱方向のヘラミガキのみの例は括弧で括る。
- a) 中島直幸・田島龍太編『素烟遺跡』唐津市教育委員会 1982 8層下層No.745・(743)
  - b) 『田村遺跡群』第2分冊高知県教育委員会 1986 4, Loc. 17No. (197)
  - c) 宮崎哲治編『林・坊城遺跡』香川県埋蔵文化財研究会 1993 No.414・(415・416・420)
  - d) 中西清人他編『山賀その3』大阪府教育委員会助大阪府文化財センター 1981 No.253・(387)
- (8) この項については、工楽善通氏に実見していただき指導、助言をいただいた。
- (9) 佐原 真『弥生土器』No.125『日本の美術』1976  
森田克行『筑津地域』『弥生土器の様式と編年—近畿編Ⅰ—』1990
- (10) 中西清人他編『山賀(その2)』大阪府教育委員会助大阪府文化財センター 1983 山形文とする類似例 P36~37 No.18
- (11) 工楽善通『蓬萊式土器における本業文の展開』『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1963
- (12) 「鬼塚遺跡」『河内古代遺跡の研究』大阪府立花園高等学校 1970 には区画線を半区割にした本葉紋例がある。
- (13) 佐原 真『弥生土器』No.125『日本の美術』1976
- (14) この項の考察に関しては、以下の文献を参考にした。
- 佐原 真「畿内地方」「弥生式土器集成 本編2」1968  
森岡秀人「会下山遺跡出土土器特論」「新修 芦屋市史 資料篇1」1976  
森岡秀人「畿内第V様式の欄干細分と大師山遺跡出土土器の占める位置」「河内長野 大師山、関西大学 1977  
福井英治編『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市教育委員会 1982  
黒田恭正編『長田神社境内遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会 1990  
森田克行『筑津地域』『弥生土器の様式と編年—近畿編Ⅱ』1990
- (15) 青木勘時「特異な叩き目に関する覚え書き」『東大阪市文化財協会ニュース Vol. 2 助東大阪市文化財協会 1986  
西岡雅紹『庄内式期のもう1つの叩き目』『究班』坪藏文化財研究会 1992
- (16) (14) 黒田文献及び下記文献  
西岡誠司他『長出神社境内遺跡』『平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1992  
佐伯二郎氏のご教示による。
- (17) 青木氏分類のA類 (15) 青木文献  
(18) 青木氏分類のB類 (15) 青木文献  
(19) 壁底部の形態分類については、(14) 黒田文献を参考にした。
- (20) 丹治康明「万葉池1号窯」『昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報』1990
- (21) 丸山 清他『古宮町遺跡 第11次調査』神戸市教育委員会 1990

- (22) 森内秀造他『相生市・緑ヶ丘窯跡群』兵庫県教育委員会 1986  
 岸本一郎『播磨・緑風台窯址』西脇市教育委員会 1983  
 岡崎正雄他『相野古窯跡群』兵庫県教育委員会 1992  
 吉田 畏他『吉野ダム建設に伴う発掘調査報告書(3)』兵庫県教育委員会 1988
- (23) 笠ノ口 5号窯、方壁池 1号窯出土資料の中にある。丹治康明氏のご教示による。
- (20) 文獻  
 丹治康明「神出古窯址群」『昭和56年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1983  
 丹治康明「神出古窯址群」『昭和57年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1985
- (24) (16) 西岡他文献  
 (25) (22) 岸本文獻  
 (26) (22) 岡崎他文献  
 (27) 香本宏剛「神奈道跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1981  
 (28) 谷 正俊『口暮遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1989  
 (29) 口野博史他『大田町遺跡』『平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994  
 (30) 香本宏剛「上小名田遺跡」『平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1992  
 香本宏剛「東播系須恵器出現期における浜播同境地域の土器様相」「考古論集」  
 潟見 浩先生退官記念事業会 1993  
 (31) 香本宏剛他『旧三宮駅構内遺跡』『平成2年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1993  
 (32) (21) 丸山他文献  
 (33) 橋本久和『畿内の黒色土器(1)』『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会 1986  
 (34) 森屋「西日本の黒色土器生産(上)」「同(中)」「同(下)」「考古学研究」第37巻第2号～第37巻  
 第4号 1990・1991  
 (35) (30) 同じ  
 (36) 武末純一「近年の時代区分論議―特に弥生時代の開始を中心にして」  
 「日本における初期弥生文化の成立」横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ 1991  
 藤尾慎一郎『水縄農耕と突帯文土器』(眞宍吾文土器の学史的研究) 同論文集 1991  
 春戒秀爾『弥生時代の始まり』東京大学出版社 1992  
 藤田忠司「稻作の始まるとき」「光庭」埋蔵文化財研究会 1992  
 (37) (3) 文獻  
 丹治康明編『雲井遺跡第1次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1991  
 南 博史他『口酒井遺跡第一第II次発掘調査報告書』伊丹市教育委員会助古代學協会 1988  
 (38) 関本孝之「原始共同体解体論批判あるいは弥生文化批判」「異貌――」1974  
 伊藤慎樹「淡尾地方における弥生時代の石器の問題」『三重考古』創刊号 三重考古学研究会  
 1975などの論文は縄紋文化と弥生文化のもつ本質的な差異を稻作文化の受容、侵略という視点で  
 観える。

# 写 真 図 版





1. I区南半全景（北から）



2. I区南半 SX 01 全景（北から）

図版2



1. I区北半・II区第1遺構面全景（南から）



2. I区北半・II区第1遺構面全景（北から）



1. I 区北半流路 1 全景（南から）



2. I 区北半流路 1 断面（南から）

図版 4



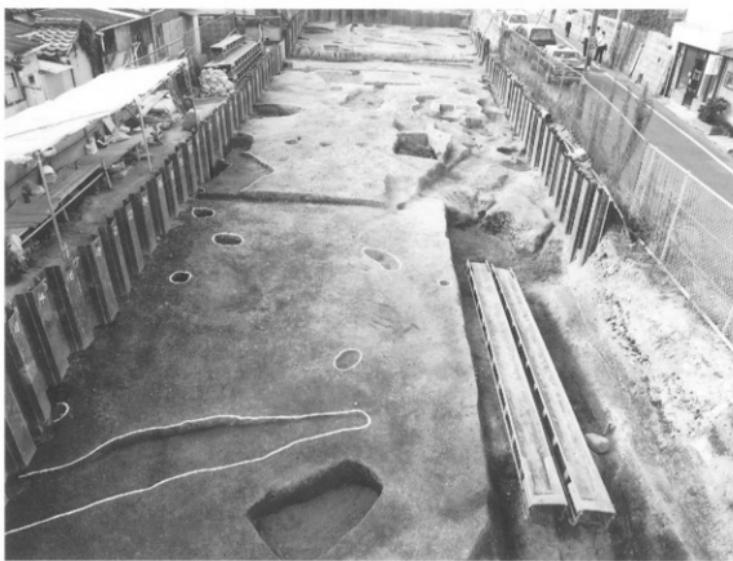
1. II区流路1流木群検出状況（東から）



2. II区流路1北半部全景（南から）



1. II区流路 1北壁断面（南から）



2. III区第 2造構面全景（南から）

図版 6



1. Ⅲ区 SK 01 第1層土器出土状況（東から）



2. Ⅲ区 SK 01 第4層土器出土状況（東から）



1. III区 SK 01実掘状況（東から）



2. III区第3遺構面全景（南から）



3. III区流路 2 全景（南から）

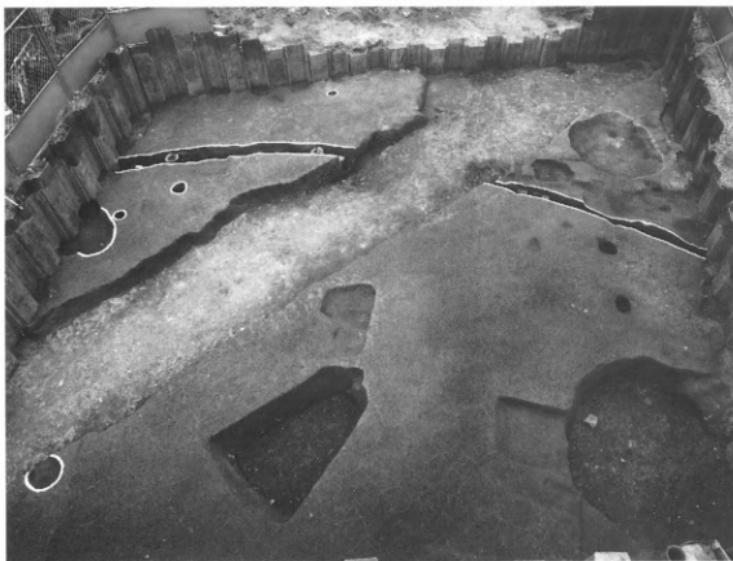
図版 8



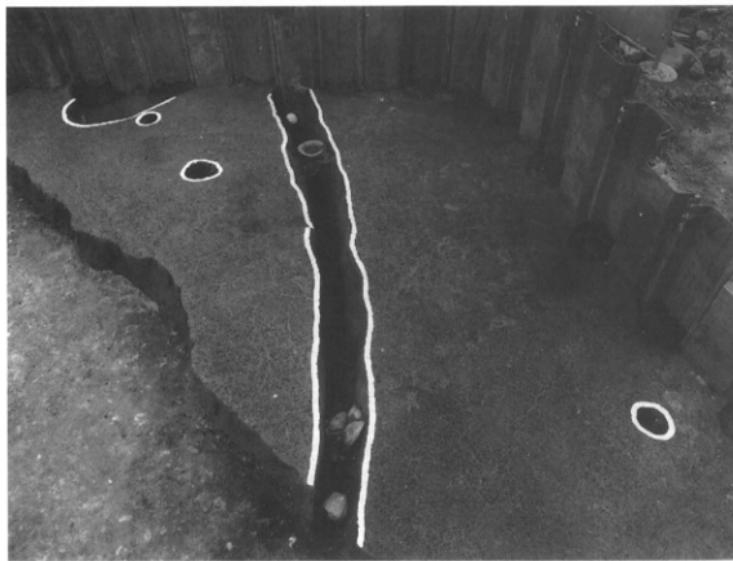
1. III区流路 3 全景 (西から)



2. III区流路 3 中央壁面断面 (東から)

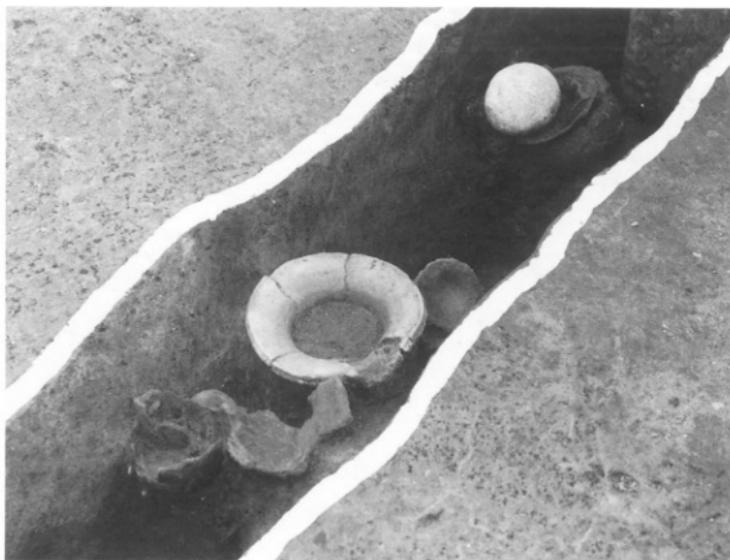


1. IV区第1遺構面全景（南から）



2. IV区 SD 01 西半部全景（東から）

図版10



1. IV区 SD 01 土器出土状況（北東から）



2. IV区第2遺構面全景（南から）